
すべてへ

気象情報

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すべてへ

【Nコード】
N9902D

【作者名】
気象情報

【あらすじ】
主人公を放課後の体育館裏に呼び出したのは、仲良くなった男はみな消えてしまうという“呪い”の噂のあるきれいな女の子だった。出会うべくして出会ったふたりは、自分たちの出会った意味を見つけようとする――手探りで、少しずつ。第3回世界で一番読みたい小説グランプリ1次選考通過。

1・呪われたクラスメイト(A c u r s e d g i r l)

「放課後、体育館裏に来て下さい」

思わず背筋がカユくなる、絵に描いたような青春のセリフだと思う。

それをまさか、自分が聞くことになるとは思わなかった。

俺が斉藤和也という日本では比較的普通の部類に入る名前を貰って生まれてきてからばちばち十七年になろうとしている。高校二年、小中学生の頃に描いた高校生の理想像にはほど遠く、とにかく周囲に埋没した高校生活を送る俺が今ここにいる。もちろん、楽しくないわけではない。友達だってちゃんとして、部活もやっていてそこでの成績もそれなりで、中三の一時期だが彼女だっていたこともある。それなりに満足というか妥協というか、そういうもののある程度できる自分自身なんだと思う。でも、そういうものまで引くくめて自分が特定の誰でもない、とにかく“みんな”と同じ、そんな気がしていた。

でもそこから抜け出そうとするわけでもなく、抜け出したいわけでもなく、将来に明確なビジョンも夢も描けずに、まあ頭の力強い大人の考える現代の高校生像にぴたりと一致した、そんな存在で、それはもうどうしようもないんだ、そう思っていた。

ごっん。

休み時間の教室で机に突っ伏してぼんやりしていた俺の頭頂部がグーで軽く叩かれる。

「休み時間に寝るな。授業中に寝ろ」

そんなこれまた絵に描いたようなダメ学生のセリフを吐くのは木

田貴司。俺とは幼稚園の頃からの幼なじみで、ずっと同じ幼稚園、小学校、中学校、高校と通ってきたことになる。同じクラスになるのも、今年で六回目になる。

「まったくお前は朝っぱらからあんなこと言われといてさ、危機感つつーもんがないのかよ」

あんなこと、つまりはあの青春のセリフ。

俺は今日の放課後、体育館裏に行かなければならないことになっている。

呼び出したのは同じクラスの光原漑。背丈は俺よりは低いぐらいで、女子の中では結構高い部類に入り、切れ長の目には長いまつげ、少し外にハネたセミロングの黒髪。整ったその顔立ちは可愛くもあり綺麗でもある……歯の浮くようなそんな紹介文にも違和感がないぐらいには美人。

なのにどうして、フリーの俺が貴司の言う“危機感”を持たなければならぬのか。

理由はひとつ。

“呪い”の噂だ。

厳密に言えばそれは呪いではないのかもしれない。

付随するいろいろなエピソードを除いて簡潔に言くと、なんらかの形で光原に近付いた男はある日突然“消えてしまう”というものだ。おおかたの恐怖の対象はその呪いではなく“呪われた光原”であるようで、呪いを薄々にも信じている男が光原との接触を少し大げさに避けようとしているのも時折感じる。

そんなバカなこと信じられるか、とも思うけど、なかなかそうはいかないらしい。

クラス替えてその光原と同じクラスになり、特に何も起こらないじゃないかなんて思っていた矢先、噂を信じようとせずに光原と仲良くなるうとし、そしていくらかは仲良くもなったように見えた奴がひとり、消えた。

そいつの名前は浪野宏治といった。

もちろん突然ふっ、と透明になって消えたわけではなく、ある日を境に浪野が学校に来なくなり、最悪でもそこで担任が「家庭の事情で……」なんて言い出すところが何も言わず、それどころか一週間が経った頃に「どうしても連絡がつかないんだが、誰か今どうしてるか知らないか」なんて言ったものだから、クラスはちよつとした騒ぎになった。

知っている奴から知らない奴へと噂は広まり、信じる信じないを別として噂の認知度も上がったし、たった一度の出来事で単なる偶然、夜逃げか何かだと言い切ってしまうこともできるにしても信憑性も確実に上がった。

その日じゅうはなんとか普通に振る舞っていたように見えただけ、次の日光原は学校を休んだ。

——ということがあったのが先月だから、もう三週間ほど前のことになる。

そして今朝、「放課後体育館裏に来てください」だ。

状況としては陸上部の朝練のために早く登校し、貴司とふたりで教室で準備をしていたところに何故か光原がやってきて言っていたわけだから俺と貴司しかこの事実は知らず、まだ傷は浅い。一応のくされ縁、俺は貴司を信用している。

だけどそんな風にだらだら考えたところで俺は呪いを別に信じ込んでいる訳じゃないし、光原の容姿だけでも考えたらもうちよつと浮かれてもいいんだろうけど、まあ話をおおっぴらにしたいのとは昔から好いた惚れたにあんまり熱をあげられないのと、そして貴司が妙に俺を心配していることもあり、やっぱり手放しではいられないわけだ。

五限の後の休み時間、貴司が逃げ道を用意しろとか行かないほうがいいとか小声でつぶやくのにも耳を傾けず、ひたすら俺が教室の一番後ろに位置する自分の席でぼうつとしていると、隣の列の前か

ら二番目に座っていた光原が振り向いてこっちを見た。

思わず身体を硬くする。貴司は話に夢中で気付いていない。

何かしでかすのか、と思ったが、光原はただ首を傾げるような軽いお辞儀をこちらによこしてうつすらと笑顔を作っただけだった。よろしくね、とでも言うつもりなのだろうか。

俺も首だけでお辞儀を返したけど、上手く笑顔は作れなかった。貴司はそれでも気付かない。

振り向いたその光原の姿はお世辞ではなく綺麗で、あの笑顔が自分だけに向けられたものだなんて思い当たって、少しぞつとした。でもその“ぞつ”はなんだか悪くない“ぞつ”で、そんなことを考えていたところにチャイムが鳴った。

放課後まであと、一時間。

毎日授業に夢中で、気が付くといつも放課後です、なんて普段から言えるような模範生じゃ決してないが、さすがに今日はそれが当てはまる。貴司はやっぱり、やんわりと止めたけど、俺は当然のごとく行くことにした。

俺は呪いなんて信じない。あんな美人に呼び出されたらこのこ出て行くのも当然だ。貴司があそこまで無茶に心配できるのは彼女持ちの余裕だろう。

ぐだぐだ考えているうちに体育館裏までやってきていた。

俺の通うこの御崎高校の体育館はロケーション的にちよつと特殊で、学校が高台にある関係上屋外にある階段を下りないとたどり着けないところにある。つまり校舎から少し低いところにあるわけで体育館裏は薄暗く、人も少ないから“そういう話”をするにはもってこいの場所なのかも知れない。

結局ガラにもなくドキドキしながらきよろきよろと光原の姿を探す。が、見当たらない。ホームルームが終わるや否や教室を出て行くのが見えたからもう着いていると思ったのに。

出鼻をくじかれる格好になった俺は所在なく、やたら大きいシャ

ベルや汚れきつてもともとのボールだか判らないようなボールの転がる体育館裏をとぼとぼ行ったり来たりする。それほど経ってはいないのだろうが待つ時間はいやに長く感じられ、いい加減騙されたのではないかという考えまで浮かび始めたころ、不意に後ろから足音が聞こえた。急いで振り向く。

「ごめんなさい、遅くなっちゃった」

そんな謝罪の声とともに、光原は現れた。

「ほんとごめんね、私が呼んだのに」

「いや、大丈夫大丈夫」

本当にすまなさそうな感じで光原が言うので、かえってこっちが恐縮してしまった。

呪いの噂が根底にあったのかも知れない光原のなんとなくツンツンしたイメージより随分柔らかな人柄のようで、俺は少しだけ緊張がほぐれた。

「うん、わかった……ありがとう」

「それでさ、用事って、何なんだよ」

俺の中に少なからずある下心が、俺をせっつき光原を急かさせる。

「あ、うん、あのね」

期待って、裏切られるためにかけるものなんだよな。

「私の呪いの噂って、知ってる……よね？」

正直動揺した。今の今まで他人が勝手に騒ぎ立てているだけで、本人はそれに耐えているんだと思っていたから。

「ああ、ええと、聞いたことぐらいなら」

俺のそのしどろもどろの返事を聞いて、光原はなぜか少し表情を緩めたように見えた。

「よかった、用事って、その話だから」

「その呪いが……どうしたんだよ」

まだしどろもどろのまま、俺は言う。

「えっと」

光原は後ろで組んでいた手を体の前に組み替えて、少しうつむいたままで言った。

「斉藤くんが信じてるかどうかは解らないし、こんなこと言って信じてくれるかどうかも解らないけど、あの噂って、本当なんだ。それで」

「待って」

まるで現実感のないことをあっさり言っただけの光原を遮って、俺は言った。

「そんなこと言われたってすぐに信じられるわけないだろ？」冗談とかだったら、タチ悪いぞ？」

「そんなのじゃない……違うんです」

「じゃあ俺も危ないんじゃないのか？俺は消えちゃったりしないのか？」

感情的な口調でまくし立てる俺に光原は驚いたような顔を見せて、さっきより深くうつむいた。今度は光原がしどろもどろになって、言った。

「ごめんなさい……そこまでちゃんと、話、しますから」

クラスメイトがうつむいて体育館裏、タメ語ですらなくなって、しかも美人だったら。

俺は、どうするべきですか。

「あのっ」

「敬語は、やめてくれ」

あのっ、が敬語かどうかは凄く怪しいが、俺は一応言った。

「それだけでいい。光原の話、ちゃんと聞くから」

「う、うん、わかった。私ね、呪いを解いてくれる人を探してるんだ」

少し元気を取り戻した光原は、そんなことを言い出した。

「それが俺なのか？」

「かもしれない」

「じゃあ、俺じゃなかったら？」

「わからない」

もし失敗したら、どうなるんだ？——そう聞き返そうとして、やめた。

多分何を聞いても何を言っても、納得のいく答えは返ってこないだろう。

だったら諦めるしかないのかも知れない。多分、これまで普通に生きすぎていたバチが当たったんだろう。今日の俺は、明らかに普通じゃない。多分明日からも、この分だと似たようなものになるだろう。

「斉藤くん？」

だったらじっとしたままで“自分”を守るよりも、どこに繋がっているか解らない道に進むほうがいい気がする。無鉄砲と下心のレールに乗るのも、別段悪いことではない。

「だったら俺は、どうしたらいいんだ？」

俺が出した答えは、それだった。

「私ね、ずっと呪われてたんだ」

光原は俺の質問には答えずに、しばらくの間をおいてぼつりぼつりと話し始めた。

「幼稚園の頃からね、私が仲良くした男の子って、よくいなくなってた。でもその時はまだ、どこに引越すとか、これからどうするとかはつきり解るような“おひっこし”だった。小学校に入ってもそういうのは続いていって、それどころかね、もっとひどくなったの。北海道とか沖縄とか、そのうち外国とか、遠く、とにかく遠くに引越していくようになった。手紙も出したりしてみるけど、すぐに返ってこなくなっちゃうの。中学入ったらそういうのですらなくなつて、この前みたいにはつきり“消えちゃう”ってなるようになったの。小学校のころからだんだん男の子のことは避けるように

なつてつたんだけど、私本当に怖くなつて。中学入つて三人目が出たときにはもう誰も私に話しかけてくれる男の子もいなくなつたし、私ももう、誰とも話したりしないように、周りを思い切り自分から遠ざけた」

もともとそんな気のなかつた俺の心が、だんだんと呪いを信じるほうへ傾いていく。話から聞いてとれる光原が背負っているものは、俺にもはつきりと解るくらいに大きくて、重い。

「だけど高校に入つてね、周りがほとんど知らない人になつた。同じ中学から来たのなんてひとりだけだし。だから大きな噂になることなくてね、ちゃんと友達もできて、“彼氏つくらないひと” っていう肩書き付きでだけど、ちゃんと普通でいられるようになった。一年経つても誰も消えたりすることなくてね、私すごく、楽しかったの」

もともと今年になつて同じクラスになつただけで何の繋がりもなかつた俺だけど、“光原の友達”は何人か知っている。少なくともあの日までは、浪野が消えたあの日までは、光原は俺の中で普通の女子だつた。

「それがこの前、変わった。浪野くんが、変えたの。もともと同じクラスになつた四月から、ちょこちょこ話しかけてきたりはしてて、ひどくなると友達がいなくてたりしてたの。でも浪野くんは聞いてくれずに、それで……。私、これからどうやって生きていったらいいのか解らない。もしかしたら浪野くんも他の男の子たちもどこかで元気にやつてるのかもしれない。でも少なくとも私の知ってる範囲から、浪野くんは消えちゃつた。寂しがる人もいると思うし、それは私のせいだとも思う。しかもだんだん呪いは強くなつてゐるみたいだから、これからどんな風になるのかも、解らない。でもとにかくまた本気で、男の子から遠ざからなくちゃと思つて周りを見渡したときに、斉藤くんだけは、違つて見えたから」

話が自分のことに戻つてきて、少しはつとした。いつの間にかうつむいていた顔を上げて光原の顔を見ると、その目は少し潤んでい

るように見えた。

「すごく迷惑な話だと思う。もしかしたら、絶対しちゃいけないことだったのかも知れない。でも私、我慢できなかった。よく考えてみたら私から男の子に話しかけたことってこれまでに多分なくて、初めてそうしたい、と思わせてくれた斉藤くんなら、何か私を変えてくれるんじゃないかって思った。だから、何もなくていいの。呪いのことなんか関係なしに、ふつうの友達が欲しいな、って思っ
て、斉藤くんなら私が呪いでも大丈夫、って思ったの。自分でもわからないことだらけで、わがままなお願いかもしれないけど、おねがいします」

そう言い切って、光原は頭を下げる。

正直少し落胆はあったけど、なんだそんなことか、と思った。よく考えれば光原の言うことを信じるのなら信じるで俺が消えたりはしないことになるし、まるつきり信じないとしてもそれは同じだ。できることはしよう、ってさっき決めたところだし、それが“できること”なら。

「わかったよ、わかった。もういいよ、友達なんだろう？」

「ん……うん。ありがと」

「じゃあ、何かあったら、なんでも言ってね」

そう俺が返事をする、光原はありがとう、としつこいほどに繰り返して、きびすを返して走り去っていった。

その場にひとり残された格好になった俺は、このまま体育館裏にいても仕方ないので部活に行くことにした。

俺と貴司は陸上部に所属していて、ともに長距離をやっている。

準備をしてグラウンドに着くとみんな基礎練に励んでいるところだったので、俺は先輩を捕まえて用事があって遅れたと告げてストレッチから始めた。

部員も少ない弱小の部活だからそこまで厳しくなく、特に咎められることもなく途中から加わる。

しばらくして種目別の練習に入って、俺と貴司は学校の外周を走
るために抜け出した。

「なあ、どうだったんだ？ 告白でもされたのか？」

貴司は興味津々に聞いてきたがあまり答える気分になれず、また
話すよ、と答えたまま、一日が終わってしまった。

翌日は特に光原と話したりすることなく放課後を迎えた。

「というわけで、専門家の方に来ていただきました」

「何が」というわけで”なんだ。つーか、専門家って何だ」

「あー、俺光原と小中学校一緒でさ」

そんな感じで貴司が連れてきたのは、隣のクラスの児玉亮。

「そうなのか」

「うん。で、お前面白いことになってるらしいな」

貴司が何を話しているのかは解らないが、いくらか誇張を入れて
いるとみて間違いないだろう。貴司の悪い癖だ。

「面白い…… ってことはないけど、まあ普通じゃないよな、一応」

「でさあ、結局お前なんて言われたんだ？」

貴司はどうしても、昨日俺に何があったかを聞き出したいらしい。

「あ、それ俺も聞いときたいなあ」

亮も乗ってきた。くそう、タチが悪い。

「言わなくちゃダメなのか？」

「ダメ」

すかさず貴司が答えるが、それは無視する。

「いや、別にそれは言わなくてもいいけど…… お前、結局呪いって
信じてるか？」

さっきまでとはうってかわった真剣な調子で亮は聞いてきた。

「俺は信じてない、かな。単なる偶然だと思う」

光原をかばうつもりはないし、話してくれたことを信じないつも
りもないが、俺は少し強がってみた。

「そうか…… あんな、俺、その話をしに来たんだ」

そう前置きした後で、亮は話し始めた。

今まであまり噂になることのなかった、昨日光原が話してくれたのとはまた違った話。

「俺、光原と小中学校一緒だったって言ったじゃん？ それ自体結構珍しいんだよ。呪いの噂は小学校のころ、多分三年のときにはあったはずなんだよな。で、そのせいかは知らないけど、あいつ普通にいけば進むはずだった中学には進まずに、その……越境？ して、わざわざ南吉原中に進んだのな」

「あの評判がすげー悪かったところか？」

貴司が食いつく。南吉原中のことなら、俺も少しは聞いたことがある。ここ数年の間に荒れ始めた、いわゆる不良の巣窟として。

「そうなるな。で、俺はたまたま引越したからしょうがなかったんだけど、まあ場所的には隣の校区になるからおかしくはないって言っても好きこのんで行くところじゃないじゃん。だから小中とあいつと同じとこ通ったのは、俺ひとり」

「で……その頃の光原はどうだったんだ？」

俺がたまらなくなつてそう聞くと、亮は首を傾げながら言った。

「どうしようもないくらい有名だったよ、小学校のときは。一学年三クラスで、六年に上がるころには半分以上の奴がクラス同じになったわけだし、一年にひとりはいなくなつてたからな。中学は……ふたり、だったかな」

「三人、って言つてたぞ」

反射的に口を挟んだ。貴司と亮が、ぱつとこちらを見る。

「そこまで詳しくは聞いてないけど、俺、お前らが思つてるよりちゃんとした、そういう話を光原としてきたんだよ」

「つてことは、何が起きてきたのかなんてのは省いていいわけだな？」

そういうことになる、と返事をする、ますます亮は身を乗り出してきた。

「じゃあ、お前はこれからどうするんだ」

そういつて貴司も、急に真剣な顔になる。

「光原と、とりあえず仲良くしてみる」

決意の割に情けない語感だなあ、と言ってから思っていると、案の定というか何というかふたりも腰くだけになって突っ込んできた。

「それでいいのかよ」

「結局一緒じゃんか」

——私ね、ずっと呪われてたんだ。

——斉藤くんだけは、違って見えたから。

——だから、何もなくていいの。

「違うよ」

光原は、そんな奴じゃない。

その言葉を飲み込んで、俺はそれだけ言った。

光原が考えて、俺に話してくれたこと。それをどこまでふたりに伝えていいか解らなくて、俺はそれきり何も言えなくなってしまった。

うやむやのままで亮が帰ってしまつて、何となく煮え切らない感じで俺と貴司はいつものように部活に出たあと並んで自転車を走らせながら学校を出た。

光原と亮じゃないが俺も小中高と貴司と一緒に。同じクラスになること六回。家も当然のように近くて、ちゃんとした幼なじみくされ縁だ。

そんなだから当然こんな雰囲気になることも何度かあったはずだけど、やっぱり何も話せないで沈黙するのは気まずくて、慣れることはない。

「あのな」

家まで三分の二くらいまで行つたところでようやく貴司が口を開いた。

「何を光原さんから聞いたのか知らないけど、俺はお前が決めたんならそれでいいと思うよ？」

いきなり何を言い出すかと思えば。

「例えばお前が消えたとしても、バカな奴がいた、ってずっと覚えておいてやる」

俺はおかしくなつてちよつと笑い、そして言った。

「大丈夫だつて、大げさだなあ」

「いや、俺もね？　なんか大丈夫な気がする、結局」

貴司のその一言で、なんだか安心した。本当に大丈夫、そう思えるようになった。

「それでさ、俺だけじゃなくてお前だけでも呪いとか、そういうのナシで光原と接してもらいたいんだよ」

「俺もか？」

そう、と一言言つて、また続ける。

「万が一呪いの噂が本当なんだとしても、光原自身は呪いでも魔女でもなんでもない。話してみて、解ったもん。本当に大丈夫、って思ふんなら、普通の女子と同じ感じでいいじゃん、と思つて。光原だつて……悩んでたよ。もちろん本人なわけだから、本当は一番の被害者なんだよ」

「そっか」

ありがとう、と言つてみようとしたけど、横を走り抜けていったバイクにそれはかき消されて、まあそういうガラでもないしな、と思ひ直してやめた。

「ま、美人とお近づきになれるわけだしな」

そう言つていつもの調子で貴司が茶化してくれて、俺が彼女持ちのくせに、と突っ込んだところに家に着いて、別れた。

なんだかんだでいい奴なんだよな。

ふつつと息を吐いて鍵を廻し、ノブに手をかける。

「ただいまー」

なんだかいつもより落ち着いていた気分で、ドアを開けた。

1・呪われたクラスメイト（A c c u r s e d g i r l）（後書き）

もともと7章編成だったものを読みやすいように更に分割し、多少の改稿を施して掲載しています。

各章サブタイトルも7つを新たに追加。実はかなり苦勞しています。できればお付き合いください。

2・僕は君を知らない (You can change me)

「おかえりー」

ふたつ下の妹、未来がその声に応える。

齊藤家は俺と未来の兄妹に父親と母親、という家族構成だが、父親は単身赴任で家にいることはほとんどなく、普段はその父親を除いた三人で生活している。そのうえ母親も週四回パートに出ているので俺より帰りが遅くなることもざらで、今日も多分その日だったはずだ。

「カレー温めたところだからすぐに食べられるよ」

居間でテレビを見ながら、未来がそう声をかける。わかった、とだけ返して部屋に戻り、荷物を置いて着替えを済ませたあと自分でご飯をよそってカレーをかけ、食卓についた。

多めによそった三分の一ほどを食べ終わったところで水が足りなくなつて注ぎに立つたら、もう一度戻ってくるのと同時に未来もこちらにやってきた。

「未来はもう食べたんだろ？」

「食べたよ」

言いながら未来は、“何でこつち来るんだ”という俺の意図はおそらくわざと汲まずに、長方形の食卓のはす向かい、一応設けられている父親の席にこしかける。

「じゃあそのまんまテレビ見てりやいいじゃんか」

俺がそんな憎まれ口を叩くと、未来は逆になんだか嬉しそうな顔をした。

「今日はいつもにまして愛想がないね。なんかあったの？」

「うるさい」

「ほらまたそうやって。モテないのも当然よね」

「はいはい」

昔から、それこそ物心ついたときから未来は何故だか必要以上に

俺にべったりだ。

家を空けるくせにやたら心配性な母親のせいでふたりでまとまって行動させられることが多かったからだとか、原因は思いつくには思いつく。だけどそれならなおさらケンカとかするようにも思えるし、中三にもなれば反動で嫌われたりしてもいい気もする。

「だからさ、和也は……」

「そうやって兄きのこと下の名前で呼ぶのもいい加減にやめない？」

そこまで語調は厳しくないにしてもこんな感じで平均以上にはぼろくそに言っているわけで、でもそんな時少しだけ口を尖らせた後の未来の笑顔が一番楽しそうな感じがして、それってどうなんだろうと思う。例えばクラスメイトが男子でも女子でも実はこんなだったとかだったら、たぶん俺は確実に引く。二歩ぐらい。

「いーじゃん、外国人みたいで。ハウアーユー、カズヤ？」

「アイアムジャパニーズ」

俺がそう返すと未来は何故か大笑いした。俺もそれがなんだかおかしくて、少しだけ笑う。

まあ別に、完膚無きまで嫌われているとかよりは確実にいいんだろうけど。

TRRRR……

未来が座るすぐ後ろに置いてあるチェストに置いてある電話が鳴って、俺たちのその笑い声を断ち切る。話している間に食べ終えてしまっていた俺は、未来が出たのを見届けて水を飲み干し、台所へ席を立った。

——はい、はい、ちょっと待ってください。

「和也ー、デンワー。みつはらさん、だって」

さて食器でも洗うかな、などと思っていた俺は完全に面食らってしまった。

みつはらって。光原かよ。

不自然なほどの早足で受話器をひったくり、しっしっ、と未来を

追い払いながら電話に出た。

「も、もしもし」

「あ、光原です。今の、妹さん？」

「そうだよ……えーと、どしたの？」

なんだか弱みを握られた気分になって、少し焦った口調になってしまう。

「名簿で番号、調べたの」

いや、そういうことじゃなくって。

どうして電話かけてきたの、だなんて聞いていいものなんだろう
か。

でも意図が分からない以上、めったな返事はできない。

「え、えーっと……」

「あのね」

ひたすら口ごもっていた俺だけど、光原のほうで口を開いてく
れ、少し助かった。

「明日の放課後に、この前と同じ所に来て欲しいの」

「体育館、裏？」

「そう」

体育館裏。

学生をやつてれば日常の中で出てきてもいい単語だが、やっぱり
今はその単語ひとつとってもなんだか違う響きがある。

「わかった」

ここで深くは聞くまい。もともと解らないことだらけの光原のこ
とだし、しかも多分、明日になれば解ることだ。焦ることはない。
そこからは適当なやりとりをして、電話を切る。やっぱり気には
なるけど今はそれどころじゃない。

「ねーねー和也、今の誰？ ダレ？」

とりあえず後ろでまとわりつく未来から、なんとかしないと。

「だからさ、別になんでもないんだってば」

「なんでもないので和也に女の人から電話あったりしないでしょ？」
「いや、だからあったんだって」

電話を終えて食器を洗い片付ける間ずっと、そしてその後俺がそそくさと部屋に引き揚げてからも、未来はそんな不毛な物言いを続けながらつきまとい続ける。

「隠すことないじゃない」

俺の部屋の隅に居座って、未来はまだそんなことを言う。

「隠してないよ。別に何も無いんだから」

そしてむう、としばらく黙り込んだので安心したら、今度はポケットから携帯を取り出して言う。

「もういいもん。タカシさんに聞いちゃうから」

幼なじみの貴司だから当然未来とも面識があって、というかむしろ普通に仲が良くてふたつ違うのに普通に友達していて、ちよくちよくメールもしている節もある。大したことじゃないが、未来の携帯のアドレス帳にはちよつとしたタイミングの問題で両親や俺より早く、自宅の次に貴司の名前がある。でもまあ、そんなことはどうでもいい。

そして少しの間黙ってメールを打った後、未来は満足したのかぶつぶつと誰に言っているのか解らないような捨てゼリフを吐きつつ部屋を出て行った。

まさか貴司も、そのあたりの空気は読んでくれるだろう。勝手に教えたりは、きつとしない。

いくらか安心して、宿題でもやるか、と鞆を開いたとき、がちやつ、ともう一度ドアが開いて未来が顔を出した。

「タカシさんも知らないってどういうことよ。もうつまんない。知らないっ」

がちやん。またドアが閉まる。

いつからあんなに高飛車に、とため息をつきながらもう一度机に向かうと、貴司からメールが着信した。

『おい！ 光原さんから電話あったってどういうことだよ』

やれやれ、今度はこいつか。

机に片ひじをつきつつアドレス帳で貴司の名前を呼び出し、受話器のボタンを押す。

プッププツ、という音がやたら長く続いたあとコールが始まり、ワンコールで貴司が出た。早い。

「もしもし」

メールの中の“！”はどこへやら、間延びした声で貴司が出る。

「もしもし、じゃねーよ。速攻出といて」

俺がそう突っ込むと、貴司は少し笑って、答えた。

「ん、まーいいじゃん。で、光原さんはなんだって？」

「明日の放課後、体育館裏だつてさ」

「またかよ」

「まただよ」

何を考えているのか何も考えていないのか、貴司はうーん、と長く伸ばしてから言った。

「それだけ？」

「それだけ。そんな大したことじゃねーよ」

「大したことじゃ、か。お前が大したもんだよ」

「そうか？ “大丈夫”、なんだろ？」

俺が冗談の口調で言うと、貴司はだって美人だぜ、と答える。そういう奴だ。

「とにかく、大丈夫大丈夫。俺はそれより未来を何とかして欲しい」「未来ちゃんの何がいけないのさ」

直接話している時なら確実に身を乗り出してきているような口調。何様だよ。

「だって人の電話の内容やたら知れたがるし、お前に聞いてダメだったら俺に当たるし、やたら食うし皿洗わないし、俺のこと下の名前で呼び捨てするし」

「聞き飽きたよそのグチも。じゃあなんだ、おにいちゃんっ、なんて呼ばれたいのか」

「そっちのほうはまだマシだね」

俺がそう返して、ふたりでははは、と笑う。

「ま、明日だな」

「だな、それじゃ」

「おう」

そうして電話が切れた後なかなかテンションが戻らずに、部活の疲れが気疲れか、宿題もそこそこにシャワーを浴びて寝てしまった。眠りに落ちる直前に、少しだけ光原のことを思い出した。

意外なほど平常心を保っている自分に、少しだけ驚いたりしてみ

る。
随分早く寝たことになるのに、目覚めたのはいつもと同じ時間だった。

翌日。

どこかしらツンとしている未来と、いつ帰ってきたのか知らない母親に食卓越しに見送られ、俺は随分早い時間に家を出た。

何故か、貴司が迎えに来た。

「一応、根掘り葉掘り聞いとかなきゃダメだろ？」

貴司はそんな意味不明な言い訳をする。何をだ。

「俺にも協力させてくれるんだろ？」

なんてだ。

「多少早かったのは謝るからさあ」

「……何なんだよあの言い訳。“緊急ミーティング”って」

チャイムを三度鳴らして俺を呼んだ挙げ句、緊急ミーティングだから、と言ってすぐに貴司は食事を終えたばかりの俺を家から連れ出しやがった。

ああいう言い方だから、多分未来と母親は陸上部まわりだと思うだろう。もし追及されても、キャプテンが足を折ったとか、顧問の先生の引率ができなくなったとか、そういう口から出まかせの言い訳ができる奴だ。

「だからさ、緊急の……ミーティングだよ」

「わかってる」

さすが、助かる。そう相槌を打って貴司は口を開いた。

朝、通勤ラッシュが訪れる前の道路の左側を、速いペースで並走する。

実は一番誰かに聞かれる心配の少ない、この過ぎていく町並みの中、学校まではあと十分ちよっと。

「昨日あれから、なんか悪い気もしたけど凜に話したんだ。お前らのこと」

凜。灰原凜。

クラスメイトの女子で、貴司の彼女。

背は平均より高めですらっとしていて、一言で言えばスタイルがいい。ぱっちりとした二重で、鼻も高く顔は小さい。それほど注意を向けていなくても笑った顔がいやに目を引く、光原とは系統が全く違うがこちらともいゆる美人だ。男どもの評価で言えば愛想がな（い、と捉えられている）光原よりも、呪いの件を差し引いて考えても確実に高いだろう。スポーツはそこそこ万能、頭も悪くないらしい。去年はクラスが違った上にもともと面識はなく、学校以外での繋がりがあるわけでもない。貴司と付き合い始めたのは去年の冬ごろで、まったくどこで引っかけてきたんだか、といった感もある。「なんでもしゃべるのはいつものことだろ。別にいいよ」

容姿も悪くない程度、強いて言えば背が高くくらいでいつもただヘラヘラしているだけの貴司とは釣り合わないというのはもはや一般通念にもなりつつあるが、周りが目を離すとふたりは羨ましくなるほどにべったりで、そんなことも気にする素振りも見せない。

そんな事情もあるから別に何をしゃべっていても不思議ではないし、むしろそう、いつものことだ。

しかも灰原は光原と仲が良い。よく知っているわけではないが、見たところ親友レベルだ。だから貴司なりに、何か考えがあったんだろう。

「うん、そしたらさ、凜もやっぱり光原さんに相談受けてたんだって」

俺は相槌を打たずに、ちょっと息をのんだ。貴司はそのまま続ける。

「凜はさ、呪いとかそこまで信じてるわけじゃないみたいで、『漑も彼氏欲しくなったんじゃない？』なんて軽く言ってたんだよ。まあ俺はそこまでの話じゃないと思うんだけど」

貴司と近いからその繋がりで、俺もクラスの他の男子よりは灰原と話す機会が多い。確かに言いそうな気もする。話を簡潔にまとめてはきはきと話す、きつと小学校の頃は学級委員か何かだったに違いない。

そしてふたりして黙る。でも、交差点を曲がったり車をよけたりしているので気まずさはない。

学校までもう少しのところ、やっと俺は口を開いた。

「呪いでも呪いじゃなくても、理由が何であれ悪い奴じゃなさそうなんだから普通に接してみてもいいでしょ？ 前も言ったけどさ」

「俺もそのつもりだよ」

「過剰反応する奴もいるだろうけど、その辺は完全無視の方向で」
「……さすがだな」

何が。

校門を通り抜け、がらがらの自転車置き場に自転車をとめる。

貴司と学校に行くことも、こんなにながらがらの自転車置き場も俺にとつては滅多にないことで、まだ静かな校舎とあわせて妙に新鮮な気分だった。

教室に着くと、まだ誰もいなかった。

ある程度早い時間であるにしても、さすがに誰かいるだろうと踏んでいたのだが。

中央列一番後ろにある自分の席について、そっぴや宿題やってなかったんだって、今日は朝練いいや、とノートを取り出した。

「それにしても未来ちゃんから聞くことになるうとはね」

自分の席に荷物を放り出した貴司は窓側の誰のだか判らない席に横座りし、何やら携帯をいじりながら言った。

「俺もまさか、未来から伝わることになるうとはね」

「あれっ、未来ちゃんからメール来てる」

俺がはあ！？ と表情だけで表してみせると、貴司は文面を読み上げはじめた。

「『おはようございます。和也、怒ってますか』だって。怒ってる？」

「怒ってはないんだよ。怒ってたのは未来のほうだったんだってば」

「ちよつと怒ってるよ、と。送信」

「おい」

ちよつと身を乗り出したがすぐにやめた。大したことじゃない。

「おにいちゃんのが好きで好きでたまらないんだろっね。あつ、

『どうしたらいいですか』だって。どうしてほしい？」

「どうもこうもないよ、普通でいい。いつものことじゃん」

「そっか、ふーん……」

そう言いながら画面に目を落とし指を動かしていた貴司は、しばらくしてはッ、と小さく笑った。何をたくらんでいるのだろうか。

「まあ、まず下の名前では呼んで欲しくないわけだ」

「うまく言ってくれたの？」

家では四六時中一緒にいる俺より一応他人である程度の尊敬も勝ち得ている貴司が言ったほうが聞くだろうから、だとしたら助かる。

「一応、な」

でもまあ、過度な期待はかけないでおこう。

始業時間が近付くにつれて、教室にだんだん人が増えてくる。

始業十分前、一度目の予鈴がなった直後、人混みに紛れて光原も教室に入ってきた。

人が増えてきていたので俺の隣の席に移動してきていた貴司が何

故か手を振って、それに気付いた光原がこちらを見た。戸惑いながらもちよつと表情を明るくして首だけでお辞儀をすると、笑顔で返してくれた。

その笑顔に安心して、俺は終わりそうもない宿題にまた目を落とす。貴司はずつと光原を目で追っていて、しまいには灰原に気付かれて蹴られていた。バカな奴。でも、なんだかんだでいい関係だと思う。ふたりとも、笑っているから。

少しして、貴司が座っている席の主もやってきた。対馬冴だ。

俺と同じ中学校から来た奴は何人かいるが、対馬もその中のひとりで、しかも貴司を除けば唯一小学校も同じで、五、六年とクラスは同じだったが、その五年の秋に転校してきたのでそれほど付き合いは長いわけでもない。

「おはよ、ごめんごめん」

貴司がそう言って立ち上がる。必要以上の笑顔、相手が女子になると途端に愛想がいい。

「大丈夫。まだ使う？」

「うーん、もういいや。時間ないし」

そう言いながらも一度笑顔を作って、俺に目くばせしてから席に戻っていく。

あつ、灰原が行った。蹴られてる。……好かれてるなあ。

そんなことをぼうつと目で追いながら考えていると、対馬に軽く肩を叩かれて少し驚いた。

「ねえ、今日教室移動あつたっけ」

「ああ、理科があるだろ。何とってるんだっけ」

「生物。一緒じゃん」

「じゃあ今日は教室だな」

しかし、小学校の頃と比べて対馬は変わった。顔立ちや背格好は当然だけど、中学の三年間と高一で同じクラスにならない間に、いつだか知らないが眼鏡もかけるようになっていたし、そして何よりしゃべりが標準語になっていた。どこ出身だったかは覚えてないが、

確か西日本系のなまりがあつたはずだ。これまでもたまに話しかけられることはあつたけど短い会話の中ではなかなか判らなくて、今年になって同じクラスになり、席替えて隣の席になつたこともあつてたまに話したり、話しているのを聞くようになって、妙に違和感を覚えたものだ。

「そつか。ありがと」

その声を合図にするかのように始業のチャイムが鳴り、クラス担任の女性教師、有働先生が教室に入ってきた。皆に挨拶させ、連絡事項を伝え始める。

話半分に聞きながらペンを走らせ、なんとか宿題を終わらせた。

意外と早く放課後になった。

早く行きすぎるのもどうかという不必要な気遣いから教室でうだうだしていると、貴司に捕まつた。

「まだ行かないのか？」

「ちよつと早いだろ。光原は今週掃除当番だからまだ生物教室にいるはずだし」

そんな会話をしていると、灰原がこちらにやってきて割り込んできた。

「斉藤、聞いてるよ」

そう言つて、独特の力のある眼差しで俺の目を見てくる。俺は小さくうん、と答える。

「呪いは、信じてるんだっけ」

「わかんない。でも、呪いがもしあつたとしても、光原自身は悪くないんだと思う。ちよつと話しただけで解つた。普通だった」

聞いて灰原は、少し安心したように笑つた。やっぱり、結構な美人だ。

「斉藤がそう思ってくれるなら、澪はきっと変われると思う。ありがとう」

そう言つて、背中を向けて去っていく。

将来的にはキャリアウーマンだな。上司にいて欲しいタイプだ。

「じゃあそろそろ行けよ。時間あるなら、部活も来いよ」

「おう、わかった」

俺と一緒に立ち上がった貴司は、たかたかと灰原を追いかけていった。

うーん、あのふたりの力関係がよく解らない。

体育館裏に着くと、光原はもう来ていた。ちよつと遅かったかもしれない。

「来たよ……待った？」

「ううん、今来たところ」

そんなどこかで聞いたことがあるような会話をした後、いきなりで悪いんだけど、と前置きをして光原は聞いてきた。

「ねえ斉藤くん、男の子って、私のことやっぱり、怖がつてるのかな」

どこかちよつと、聞きにくそうだった。

「怖がつてる……とは違うんじゃないかな。本当に信じてる奴って、多くはないと思うよ。貴司みたいにある程度信じて受け入れた上で、ヘラヘラしてるのもいる。まあ、あれは例外かもしれないけど」

そこまで言って俺は地べたに座り、壁にもたれた。光原は隣で立っただけだ。

「木田くん？」

「ああ、ちよつと話したんだ。この前のこと、少しだけね」

突っ込まれるかと思ったが、光原はそれ以上何も言わなかった。

「そう、ごめんね。変なこと聞いて」

「大丈夫。俺もひとつ、聞いていい？」

うん、と相槌を打ちながら、光原も俺の隣にしゃがんできた。

「光原は男のこと、怖いのか？」

「どうして？」

「だって、裏を返せばお前は……消しちゃった奴の分だけ、自分も

傷ついてきたってことじゃないの？」

光原は、そうかもしれない、と答えて、さらに続ける。

「でも、消えた人を必要としていた人も、消えた人と仲が良かった人も、きつと傷ついたはずだから。そんなの全部集めたら、私ひとり分なんて」

それは……

それは。

「おかしくないか？」

「おかしくなんか……」

「俺はもつと、光原に自分のことも考えてほしい」

と、思う。そう付け加える前に光原が静かに泣き出したのに気付いた。初めはすすり泣き程度だったのが、途中で泣きじゃくりに変わる。激しく嗚咽しながらいくら出そうとした言葉の中に、「ありがとう」と聞こえた気がした。

しばらくして落ち着いたのか、光原は尋ねてきた。

「ねえ、斉藤くん？ 木田くんも、“大丈夫”な人かなあ？」

さほど考えなしに隣を向くと光原もこちらを見ていて、泣いたあとの赤い目と目が合った。

「ん、大丈夫だと思うよ。俺が保証する。仲良くしてやって」

ひどくどきつとした。心臓がまだ、焦っている。

そんな俺の心中を多分知らないまま、光原は立ち上がった。

「本当にありがとう。すつきりした、なんか」

俺も急いで立ち上がる。

「いや、そんな。礼なんかいいよ」

「うん……あと、これ。私の携帯番号とアドレス。メールってちょっと苦手だから、あんまりしないんだけど」

そう言っただけで光原は小さいメモを手渡す。メールが苦手とは、つくづく珍しい奴だな。

「わかった。今日帰ったら、番号も付けてメール送っとく」

「じゃあ、よろしくね。ごめんねわざわざ来てもらって。だいぶ時間経っちゃったね」

大丈夫、と言おうとして視線を光原に向けると、上目遣いで俺の心臓はまた落ち着きをなくした。なんというか、キレイだ。涙の跡まで、全部が全部。

「わざわざなんてもんじゃないよ。俺はいつでも、毎日でもOKだつて。……じゃあさ、これからはさ、例えば毎週、今日が水曜だから水曜にとかさ、決めてここで話そうよ。や、もちろん教室とかでも普通に話すけど」

「それ、いいね。そうしよう」

途中から自分でも意味不明になってきていたが、光原は笑顔で応えてくれた。

「あ、うん」

「ごめんね、気、遣わせて」

その一言で、なんだか我に返った。

「今度からは、そんなに謝らなくてもいいよ。友達なんだから、当たり前だろう？」

「……ありがとう。また明日ね」

「うん、また明日。あと、それと」

「帰る前に、顔洗つといたほうがいいのかも」

聞いて光原はもう一度、ありがとう、と言った。

別れてから俺はむやみに走りたい気分になって、小走りで部室に向かった。

ひとしきり走った後、整理運動中に貴司が寄ってきた。

「えらく遅かったんだな。どうしたんだ？ いやに気合いも入ってたし」

「いやまあちょっと、いろいろな」

意外なことに貴司は、それ以上の追及をしなかった。

そのあと自転車で一緒に帰る途中も関係のない話をしたり黙ったりが続いた。でも、もうすぐ家に着くというところで貴司はぼつりと言った。

「お前のことは、お前が決めるよ。多分、それでいいんだと思う」
多分貴司が一番、俺のことを解ってくれているんだろう。

いつもと同じように別れて、ドアを開ける。

居間につながる廊下の途中にある洗面所から未来が出てきて、俺を出迎えてくれた。

「おかえりなさい、おにいちゃん」

「はあ!?!」

「いや、タカシさんがさ、こうやって呼び方直したら機嫌も直るって……かず、じゃないおにいちゃん、昨日はごめんね、あたし……」

「もういいよ、もう」

そう言っただけは溜め息をつき、一度部屋に戻った。

とりあえず、さっき見直したのは取り消しておこうか、貴司。

2・僕は君を知らない (You can change me) (後書き)

分けたものの、半端に読みにくい長さになっている気がします……
後半になると更に長い章もあつたりしますので、できれば諦めずに
読んでいただきたいと思います。

ご意見・ご感想もお待ちしています。

3・光るものめがけて (Still I'm on your side)

それから二週間が経って、もう七月になった。期末テストも近い。光原の言った通りメールはあまりしなかったし、電話だって番号を教えたきりになったけど、教室でもちよくちよく話すようになったし、体育館裏でも予定通り二度会って話をした。

意外にも、と言っていいものか会話の主導権は光原が握って、概ね明るく話してくれた。

一度目は友達の話だった。

取っかかりは貴司と灰原のことで、灰原がよくのろけ話をするということだった。

俺は貴司もそうだと言って、ありのままを伝えた。似たものカッブルだという話になったけど、どうも灰原のイメージと合わない。あの揺るぎない感じ、絶対一輪車とか得意なタイプだ。特に根拠はない。

次に対馬の話になった。共通の友人という表現が最もよく当てはまるのが実は対馬かもしれない。光原とは中二の時、通っていた個人塾で知り合ったらしい。その塾というのが対馬の家の近くで、光原の家はもう少し遠かったが方向が同じで、よく一緒に帰ったりしていたらしい。一緒にジュースを買って飲んだりもしたらしいが、対馬はどうしても炭酸が飲めなかったという。

俺はなまりの話を振ってみた。知り合った時にはもう標準語だったという。転校してきた時よりはとれていたが、それでも小学校卒業のころはまだばっちりなまっていたはずだから、中一の間になまっていたのか、直したのか。そんなに急な話でもないだろうが、そんな風に直るものなのか。多少無口になった気がするのと、何か関係はあるのか。そんな疑問もいくつか生まれたけど口には出さないでおいで、それからそれぞれの友達の話、昔の友達の話をつくつた。

そしてそのあたりで最初の時と同じ、一時間くらいが経ったので

俺たちは話を切り上げた。そのくらいでちょうどいいかな、と思った。自分としても先輩の補習が終わる前に部活に出られる、なかなか都合のいい時間でもある。

別れ際の光原の、まなじりを下げた顔が印象に残った。

二度目は家族の話をした。

この前電話に出たのは妹だと改めて説明すると、一度会ってみたいかも、と言われた。嫌な予感がしたので話を広げまいとしたけど、光原にはバレてしまった。

「そんなこと言うんだったら、絶対会いに行きたくなるなあ」

光原のあんなにたずらっぱい顔を俺は初めて見た。すぐになんかちよつとすまなそうな、普段よくする表情に戻ったけど、光原もあんな顔するんだ、としみじみ思った。

そして俺の父親が単身赴任中だという話の後で、光原も同じように話してくれた。

父親が離婚でもとでないこと。母親とふたり暮らしをしていること。

母方の家系がそこその資産家でその関係で家が大きく、でも母親は必要以上に親や親戚に援助を受けることを嫌い、キャリアウーマンで働きづめであること。

家が広すぎるんだよね、せめてきょうだい欲しかったかな。

そう言って作った笑顔に、いつもの輝きはなかった。

人が背負える闇なんて、このくらいが精一杯なはずなのに、それなのに、まだ。

「テスト終わったらさ、遊びに行くよ。妹も連れてさ」

言ってしまったてからさてどうしよう、と頭を抱えている俺がいま
す。

テスト前日になるから来週は体育館裏では会わない、と決めたは

いいものの、そのせいで言い訳をするタイミングもなくて、メールするのも電話するのもなんか悪い気がして、だけど未来にいきなり言うのもハードルが高すぎて結局八方ふさがり、そんな状況になっ
てしまったので、いきなりながら最後の手段で貴司に相談してみる
ことにした。

『折り入って相談があるんだが』

未来が母親と話し込んでいるのを確かめ、大してするつもりもないテスト勉強のノートを閉じてメールを打つ。貴司もああ見えて小心者だから、一応机には向かって、だけどヒマしているところだろう。

『金なら貸さん』

案の定すぐにメールが返ってきた。出られることがわかったから、電話をかける。

キャリアが同じで、しかも指定先にしているから電話はタダだ。

まあ、色気のない話ではあるが。

「もしもーし」

「うい、どしたの」

やる気なさげに貴司が出た。

「いや、ちよつと多少面倒なことになってさ」

「なんだよ、言ってみな」

声のトーンが少し上がる。なんか面白いことだって察知してやがる。

「いやさ、光原と話してて、なんかあいつ家ではひとりのことが多いみたいんだけど、それで未来の話したら、会ってみたいって言われて」

「随分と普通の話してるんだな」

「まあ……で、ちよつと、未来連れて遊びに行くって約束しちゃって」

「なるほど。状況は飲めた」

つまり、と貴司が続けたので、つきあい長いとツーカーだからい

いよな、なんて思っていたら。

「あとは約束の当日ひとりで押しかけて『妹は熱出した』とか言つて上がり込めばいいわけか。そこからあとは、保健の先生にでも相談するか」

「あー俺保健室とかあんまり行つたことないからいきなりそんな相談しに行くのも怖いなあ……って、アホンダラ」

「ノリツツコミ上手くなつたな」

貴司はうつてかわつて冷静な口調で、そんな相槌を打つた。

「ちつたあ黙ってる。俺はお前に協力を仰いでるの。直接未来には言いくいから」

「解ってるよもう情けねえなあ。ちゃんと正直に『彼女の家に遊びに行くからついてきてくれ、気まずいから』って言えればいいのに。そしたら『うんわかったー、おにいちゃんだいすき』、って」

「蹴るぞ」

貴司はこういうことをしなつくつて演じるので気持ち悪さも倍増だ。

「彼女？ おにいちゃんつたらいつの間に……でもおにいちゃんは未来のものなんだから、絶対渡さないんだから！」

「あいな、未来ももう中三になつたんだが」

「ああおにいちゃんだいすき……って、そろそろやめていいか？」

「誰もやれつて、頼んでないんだけど」

貴司は大げさに笑つて、言つといてみるから、と付け加えるように言つた。

心配は尽きないが、まあ結果として伝わるならいいか、と思つただけ。

がちやつ、と部屋のドアが開いたのは、その十五分後だった。

「和也？」

未来の『おにいちゃん』はあの日限りで終わっていて、それがせめてもの救いだ。

「なんだ」

「タカシさんから聞いた。この前の電話の人のこと？」

貴司はどう言ったんだろう。判らない。でも、この調子だしここまで短時間で来られると、きつと凄く適当にやらかしたんじゃないかと思わざるを得ない。

「いや、あのな。光原とその……話す機会があつて、あいつ父親いなくつてさ、母親とふたり暮らしで、家ではひとりのことが多いらしいんだよ」

それで？ という風に未来は黙って俺の目を見たまま首を傾げる。普段があんな感じなだけに、こう黙られると結構堪える。

「で、未来の話も——ほら、この前電話出ただろ？——したんだけど、そしたら会ってみたい、って言われてさ。そういう流れで『今度連れて遊びに行くよ』って言っちゃったというか……」

少しうつむいたまま言った俺が顔をうかがうために目線を上げると、未来はふーん、と長くのばして言って、表情を緩めた。

「なあんだ、和也意外といいヤツじゃん。いつ行くの？」

「テスト終わって、補習までの間のつもり」

「じゃあさ、早めに日どりと時間決めて教えてよ。多分いつでも大丈夫だと思うけど」

そういつておやすみー、と部屋を出ていく。なんとか嵐は去った。俺がその後貴司に電話をかけてもう一度文句を垂れたのは言うまでもないが、貴司がこんな感じのときは、意外に何もかもうまくいってしまふのが不思議なところだ。

翌日、あの緊急ミーティングの日以来何故か貴司と登校することが習慣になってしまった俺はその例に漏れず貴司と一緒に登校し、まだ人影のまばらな教室で無駄話をしていた。

「お前と未来ちゃんは、口元が似てると思うんだ」

「どうだか」

話がひと段落したところに灰原がやってきた。オーバーアクション

で出迎えようとして蹴られた後、貴司は灰原の髪型を褒めちぎっていた。やっぱりマメな男のほうがモテるのだろうか。そんなことはどうでもいいか。

「今日はいつにもましてテンション高いわねえ……どしたの？」

「いやさー、いいことがあったんだよ、和也に」

「はい？」

片ひじについてばんやりとふたりの夫婦漫才を眺めていたのに突然話を振られて面食らってしまった。

そして別に俺の返事を待つでもなく貴司が一部始終を伝え、灰原は勝手に喜んでいた。

「へえー、斉藤頑張るねえ。当日もしっかりね」

俺が黙ったまま溜め息をついたのに、ふたりはまだきやつきや言っている。

そうか似たもののカップルか、なんて俺がなんとなく考えていると、今度は対馬がやってきた。今日は早いね、と適当に挨拶をすませた後、灰原はあれだけ騒いでおいて何を今更隠すことがあるのか今度は耳打ちで、対馬におそらく一部始終をすべて伝えた。聞いた後で対馬は俺のほうに二、三歩歩み寄り、俺のほうを見て内容についていくらか困惑気味に言葉を発したただだった。そうだよな。普通はそんなこといきなり言われても困るだけだよな。

「でさあ、行つて何するの」

「えっ、えーっと……」

正直考えていなかったから、だしぬけに発せられた灰原のその質問には答えられなかった。

「ええ？ 決めてないの？」

「しょうがねーじゃん。勢いで言っただから」

心底信じられないといった調子で灰原が聞き返してきた。そこで貴司がさつと助け船を出す。

「別にいいじゃん、そんなの。愛を確かめに行くんだから」

火にアブラ。油製の船なんて聞いたことないぞ。あれか、天ぷら

油を固めるナントカか。

蹴ってやるうかと思っただ、既に灰原が蹴っていたのでやめた。
よくやるよ、本当に。

そこからみんなに意見を仰ごうとしたけど、聞く前に予鈴が鳴り、
ほぼ同時に光原が現れたので立ち消えてしまった。しかし、来る時
間きっちりしてるなあ。電車で来てるわけでもなさそうなのに。

「おはよー」

「おはよございまーす」

「おはよ」

俺たちが四者四様の挨拶をすると光原もこちらに寄ってきて、笑
顔を作っておはよう、と言った。

家に遊びに行く話を出されたらどうしようかとも思ったけど、三
人ともその辺はちゃんとわきまえているようで、いつも通り貴司が
調子づいたことを言って、灰原に今度は足を激しく踏まれていた。
貴司は俺にしきりに助けを求めて、灰原は対馬にもう片方の足も踏
むように命じていた。だけど俺たちは聞かずに、半歩だけ離れて笑
っている。

そんな小学五年生みたいな状況を見て、光原は言った。

「なんか……あれみたい。グループ交際」

あのバカップルには聞こえなかったらしい。俺は笑いながら、な
んかそれは違うんじゃないかと、単語がちよつと古い気が、とか
口に出さずにツッコミを入れていた。

「やだあ……漣、それはないってばあ」

「そ、そうかなあ」

やたらと対馬が反応していたが、少しして授業が始まったあたり
で気づいた。そうか、奴らが付き合ってる訳だから、俺と対馬が残
るんだ。もうちよつと反応してしかるべきだったのか、俺としても
でも俺はずっと、光原の笑顔の方に引っぱられていた。

あれだけ見てたら、どこにもおかしい部分なんかないのに、と思

った。

二時間目の後の休み時間、地歴の教室移動を済ませた後で対馬が話しかけてきた。

対馬とは選択科目がすべてかぶっていたりして、その関係で話しかけられることは少なくない。でも、今日は違った。

「ねえねえ……本当はさ、遷んち行って何するつもりなの？」

私にだけはこっそり教えてよ、とでも言いたげな口調。小学校の頃はまさしくこんな感じの、いたずらっぽい奴だった気がする。

「いや、本当に決めてないんだってば。何かいいアイデアない？」

ほんとあ？ と茶目っ気の入ったうたぐりの目を少しこちらに向けた後、うーん、と考えるしぐさを見せて対馬は言った。

「じゃあさ、料理でもしてみたら？ 家でも結構したりする、って昔言ってたっけ」

そんなこともあったんだろうか。そう言われれば同じ班になったことも何度かあったな。

父親の単身赴任が小五の春から。そこからは少しずつ、湯が沸かせるようになり、ラーメンが作れるようになり、そうめんが茹でられるようになり、夏休みが明けるところにはチャーハンやオムレツまで身につけていた。レシピを見ればある程度何でも作れるようになるのにも、さほど時間はかからなかったと思う。遠足の日の弁当も未来とふたり分を作ったことがあるけど、ただそれは「色どりが足りない」と不評だった。

「でも俺が作る料理って、なんか所帯じみてるし」

「そんなあ、大丈夫だよ。クラスの男子とか見てみてさ、所帯じみた料理作れる人、いそう？」

未来にせつつかれればケーキを作ったりもするのは秘密にしておこう、うん。

「いなさそうだね」

「しかもさ、ひとりでご飯食べるのって、結構寂しいよ？」

そうなのかな。

自分のことを考えてみると、タイミングはずれてもいつも未来としゃべったりしているから解らない。

「うーん」

「いいトコ見せちゃいなよ。未来ちゃんもいるんでしょ？ 気まずくもならないって」

「どうかな……」

俺はまだ渋る。

「だって、光原だって料理できるじゃん。弁当だってほら、自前なんじゃないの？」

「だからこそ、誰かに作ってもらいたいつても、あると思うよ」「結局押し負けたような形になった。まあ、結構いいアイデアだと思うけど。」

「なんか今日、しゃべるね。なんかいいことでもあったの？」

ちよつとだけ貴司の真似のつもりで、おどけて聞いてみた。

「毎日生きてればたまには、いいこともあるよ、そりゃ」

対馬はそんな風に答える。答えたところで、チャイムが鳴った。

おどけた口調だったのに、語尾が少し消えていく感じだったのが少し気になった。

三時間目が終わって教室に戻り、すっかり“いつものメンバー”

になった面々と合流すると、もう対馬はさっきのようには陽気に話すこともなくなっていて、いつものようにおとなしい対馬に戻った。

言いたいことはもっと、伝えたほうがいいんじゃないかな。

そんなことを思ったけど、当たり前のこと、伝えられるはずもなく、なんとなくぼんやりしている間に放課後になってしまった。今日は木曜日、週明けからテストなのに。

放課後、世界史のプリントを一枚無くしていたことを思い出したので職員室にコピーをもらいに行くと、光原が有働先生に質問をし

ているのを見かけた。世界史の竹下先生がコピーの待ち時間に小言半分グチ半分の話をしてくるのを聞き流しつつそちらに目をやると、光原は随分親しげに話しているように見える。いつも質問しに来ているのだろうか。職員室にはあまり来ないから知らない。授業の後でつかまえて質問をしているのは見たこと歩きもするけど。

やっとコピー機が空いてプリントをもらえ、小言からも解放されて職員室から出て行こうとしたところで、ちょうど光原と一緒にあった。

「おす」

「うん……どうしたの？」

「いや、世界史のプリントもらいに来てた」

「そう。板書は大丈夫なの？」

「ノートはとってるから」

成績はいいらしいだけあってさすがに勉強の話になると何か雰囲気が違う。平均点とれたらいいや、な俺とは大違いだ。

そんな話をしながらしばらく歩き、帰りついたドアを開けるとがらんどうの教室が俺たちを迎えてくれた。

「テスト前ってこんなに人いないっけ」

「そんなことないと思うんだけど」

言いながら光原も荷物をまとめている。帰って勉強するのだろう。「あのさ」

電話やメールで邪魔するよりは、今のほうがいいかな、と思って俺はその光原に言った。

「今度お前んち行ってくて話、妹も行きたいって言ってるからさ。いつがいいかな？」

「そうね……妹さんの夏休みはいつからなの？」

「俺らのテスト最終日からだったと思う」

俺がそう言うのと光原は手を止めて、左手の中指を口元に当てて考えるしぐさをした。

「うーん、じゃあ、その次の日の終業式の後にする？」

「そうしようか」

言われると、都合が悪いわけでもないしそう言わざるを得ない。

「待ち合わせとか、どこにする？ 家とかわかんないし」

「あー、それがあるか。どうしよう」

「あ、佐野塾だったらわかるんじゃない？ ほら、私と冴が通つた」

そんな感じで意外と光原がちゃきちゃき決めてくれたので助かった。

時間も決まって光原がまた荷物をまとめ始めたころ、俺は思い出した。そうだ、料理するってことも言わないと。

「それとさ……」

俺は言いかけたところで教室の前のドアが開き、男子がふたり顔を出した。

「松崎いねえ？」

「いないよ。見てない」

話の腰を折られて、むっとして俺は答えた。無言のままでドアが閉められる。

糸口をつかみ損ねた感じで沈黙が流れた。

「あれ光原だったろ？ ほら……」

「また来るかのな、呪い」

掃除の後で窓を閉められた廊下によく響く、さっきのふたりのものと思しき声。

俺は前のドアをじつと睨んだ。光原はひとつ、溜め息をつく。

「ごめんね、私のせいで」

隠すつもりもなかったのだが、ああいう奴の手にかかるってどんな話だって響きが悪くなってしまふ。そこまで含めての発言かもしれないけど、でも。

「謝るなよ」

「でも」

「あんなのひとりで我慢しちゃダメだよ」

自分はそんなに、格好いいこと言う奴じゃないって解ってた。
でもおくびにも出せないけど、“当事者”ならなおさら俺がその
辺は守っていかなくやいけないんだよなって、その時初めて思った。
それで勢いがついたのか、料理の件はその後事もなげに伝えられ
て、何かあつたら連絡くれよ、なんて言っちゃって、今日のところ
はそこで別れた。

それからテストが始まって、結構自分なりに頑張ったつもりだっ
たんだけどできはあんまり良くなさそうで、貴司は「光原さんに教
えてもらえばよかったんだよ」なんて言いやがった。まあ確かに行
って作るメニューを長時間考えていたこともあつたけど、それはそ
れでまあ、絶望的なほどできなかったというわけでもなさそうだか
ら良かったということにしておく。

3・光るものめがけて (Still I'm on your side) (後

サブタイトルのサブタイトル (英字部分) の文法に関してはあまり自信がありません。

英語は得意科目であり英検も2級を持っていますが、やはりネイティブスピーカーではないので。

その他にもおかしい部分等あれば、笑って見逃していただくかあるいは指摘していただけると幸いです。

4・君が見せた笑顔(Her bright aspect)

さて、テストも明けた。終業式での校長の長い話も明けた。

ホームルームの後、散々貴司に茶化されながらも俺は光原と場所と時間の確認をして、俺は先に帰った。光原のほうが結構家が遠いから、しばらく学校で時間をつぶした後直接塾のほうに行くのだという。まあもつとも、持って行けばいい材料とかそう言うことも含めて前夜にほとんど電話で詰めてあるから、本当に確認にすぎないんだけど。

いつもより少しだけ飛ばして家に帰ると未来はもう準備を済ませていて、帰るなり俺をせっついついてきた。

「ねー和也、まだ？ あたし結構待ってるんだけど」

「わかってるって。でも、時間はまだあるの。言ってるだろ？」

「でもはーやーくうー」

そんな感じでまずシャワーを浴び、出てきてもなお未来はからんでくる。

「ねーねー和也」

下の名前で呼ばれていることがやっぱり少しだけ気になったけど、うん。光原なら大丈夫だろう。

「何だよ」

「今日さー、何作るんだっけ」

「バジルのパスタとラタトゥイユにしようかな、と」

「気合い入りすぎー。普段はお昼ごはんなんて、うどんそばそうめんのくせに」

うすうす解ることは解るんだろうけど、これを光原の前で言われないように祈るばかりだ。こいつのことだから、頼んでおくと絶対何もかも話す。だからとにかく、祈るだけ。物理的にも精神的にも距離が近いから、突拍子もない秘密も知られていたりするし。

「うるせーな」

「いいから和也、早く行こうよ」

「待ち合わせは十一時半なんだぞ？」

「いいじゃん、早く行っても……そうだと和也、エプロンどうするの」

ああそうか、エプロン洗ってねえや。いつも使ってるのはよそに出せる代物でもないし……まあ、いいか。

「ねえ」

「もうしょうがないだろ。なくても何とかなるよ」

「じゃあえーっと、あのね」

いきなりそう言って、てってつと和室のほうに入っていったかと思うと、ベージュの四角くて分厚いビニール袋を持ってきた俺に手渡した。受け取ると、ちよつとした重みがある。

「エプロン、買ったの」

ちよつと照れたような顔で未来は言った。妙なの選んだんじゃないかと疑ったけど中を見ると意外に普通で、ベージュが基調でひもと腰回りはチョコレート色、そしてベージュの部分には赤茶系統の色の正方形が並んでいて、チェック模様に仕上がっている。

「え、いいじゃん普通に。どしたの？」

「んー、誕生日にはエプロンあげようって前から決めてたんだけど、いい機会だと思ってテストの後で選んできちゃった。ちよつと早いけど」

俺の誕生日は八月十七日だ。ついでに言つと未来の誕生日は八月二十四日で、俺はここ何年かはケーキを作つてやつている。プレゼントは人にも選んでもらいたいけど、やっぱりある程度は自分が欲しいものが欲しいというわがママがちよつと形を変えた結果だ。

「へえ……ありがとう、助かった」

「じゃあ今年も、よろしくね」

まあ仲のいい兄妹ということでもよろしいんじゃないかとも思う。でも毎年夏休みの宿題を追い込んでいる時に凝ったケーキを作らせるのは勘弁願いたいものでもあるのだが。

そんな俺の心中を多分知らずにへへへ、と笑う未来の、髪を高い位置でふたつにまとめた頭を、ちよつと撫でてやる。物心ついたときから何度も見てきた、何とも気持ちよさそうな顔をする。こいつこれで中三か、大丈夫かよ……と我に返りそうになるのを一応抑えて、そろそろ行くぞ、と言った。たまに貴司に言われるけど、もしかしたらやつぱりシスコンなのかも知れない。

そしてふたりで佐野塾まで歩いた。着いたのは時間ギリギリだったけど、同じくらいのタイミングで自転車に乗った光原がやってきた。またしても「ごめん、待った?」「今きたところ」の後、光原は未来のほうを見て何か言いかけたけど、未来がいきなり口を開いてそれを遮った。

「あつあたし、未来です。妹です」

明らかにテンパっている。いやいやそんなに緊張しないで、と光原は言ったけど、未来のその焦った様子は俺が初めて呼び出された日の光原のそれに少し似ていた。

そんな風なファースト・コンタクトだったにもかかわらず、三人並んで歩く間に（なんと俺が真ん中！ 誰か友達に見られたら貴司じゃなくても喜んでネタにしかねない）未来と光原は妙にうち解けて、すぐに「漣さん」「未来ちゃん」で呼び合うようになった。そして未来が早くも、そしてどこか予想通り「うどんそばそうめん」を言ってしまった頃、時間にして十分強かかっただろうか、光原の家に着いた。

事前の話どおりそこそこ大きな家で、だけど入れてもらった玄関から見えた向こうは少し薄暗く、中に誰もいないということがすぐに判った。時計を見ると、もうすぐ十二時。いい時間になるので早速、俺は料理に取りかかった。

ちよつと着替えてくるから、と言って自室に光原が入っていったので部屋は少ししんとなったが、すぐに未来が口を開いた。

「和也、漣さんいい人だね。ちょっと背が高くてびつくりしたけど」
「そうだな……でもそんなに背、高いか？」

「だってあたし、和也の知り合いで女の人っていったらあとは対馬さんぐらいしかわかんないし」

対馬と未来は小学生時代に町別班でのつながりがある。そして対馬の背丈は未来と同じくらい、百五十センチ台半ばあたりだろうか。光原は俺より少し低いくらいだから明らかに百六十センチ台、四捨五入したらもしかしたら百七十センチになるかもしれない。だとしたら結構高いな。灰原より少し高いくらいって印象があっただが……あ、それはただ灰原が大きく見えるだけのことが。

「何ボーツとしてんの」

未来がそう言ったあたりで光原が着替えて戻ってきた。

修学旅行もまだだから光原の私服姿は初めてお目にかかることになる、下はジーンズ、上は水色のＴシャツ。ジーンズが細いのも手伝って足がやたらと長く見える。Ｔシャツは完全に普段着といった感じだがそれでもやつぱりすこしぴちつとしていて、胸元は……予想していたよりは、すんとして……ほらあれだ。モデルさん体型。そうそう、そうだ。

「よそ見しない」

未来にちよつと睨まれた。はいはい、と返事をする。だって、わき目もふらないのも失礼じゃなかよ。

「これから人と会う用事とかないよね？ ラタトウユ、ちよつとだけニンニク入るから」

「あ、うん大丈夫。声かけしながら料理なんて、随分慣れてるのね」
「あんまりしょっちゅうじゃないけど、和也は器用だからね……」
つて、漣さんウエスト細すぎー。うわコレ、しかもこんなにくびれてる、いいなあー」

ちらつと目をやると、未来が後ろから光原に抱きついていて。その辺にしとけよ、とか言いたくなっただけど、やめた。光原のほうがむしろ、楽しそうに見えたから。

さて、だいたいの下ごしらえが終わって、いよいよここからが本番だ。

料理に関しては完全に我流だから結構非効率的で、ラタトウイユの材料もパスタの材料もずらつとまな板に並べてしまう。トマト・ナス・ピーマン・タマネギあたりなんか微妙に混ざってしまったいて、これ以上悪化してしまわないうちに取りかかるうとしたら、ちようどそのタイミングでふたりがやってきた。

「和也ー、おなかすいたー」

「私も見学させてもらいまーす」

そんなことを言いながらふたりしてキッチンの入り口に座り、特に未来はきんちょーしてる、とかエプロンの後ろたて結びになってる、とかなんかムダな動き多くない？ とか散々好き勝手なことを言う。

光原は新しいエプロンを似合っていると云ってくれて、未来とふたりしてちよつと照れていたら、同じ顔してるね、と笑われた。

実はメインのパスタのほうはそこそこ作り慣れているから正直楽なのだが、張り切っていつも作らないのに付け合わせにしようと作るラタトウイユのほうがちよつと大変だ。手順はあまり難しくないのだが、何せだいふ前に一度作ったきりだ。大丈夫かな。

パスタを茹でる準備をしつつ、固いものから順に、途中でニンニクを足しながらオリーブオイルで炒める。それから塩コショウと小瓶で持ってきた白ワインを大さじ二杯ほど足して、とろつとするまで煮込む。なんとかパスタが出来上がった少し後くらいで出来上がり、まあとりあえず成功といったところか。

盛りつけまで終わったところでふたりは拍手をくれた。でも普段と違って、というわけでもないけれど今日はなおさら美味しくなくちやいけないから……どうかなあ。

皿を運びながら時計に目をやった。ささっと作るつもりだったのに、もう三十分近く経っているけど、まあいいか。空腹もきつとス

パイスになつてくれるだろう。

結論から言うと、大成功だった。

光原の性格を考えると、そしてまあ未来もそこその常識はあるのでまずいと言われることはないだろうとは思っていたが、それにしても出来すぎなくらい褒めてくれたし、未来も「これをいつも作ってくればなあ」とけなすことも忘れなかったが料理自体は美味しいと何度も言った。バジルは夏バテに効くから、と言うと、そこは「おばちゃんみたい」とすっかりツッコまれたが。

そしてしばらく三人でいろいろと雑談をした後さあ片付けかな、と立ち上がると、それは光原に遮られた。

「まあまあ、お皿くらい洗わせてよ。なんか悪いし」

そんなに気をつかってももらわなくても、とも思っただけど、テスト疲れも抜けきつていないしそこは甘えておくことにした。

今度は俺と未来が、台所の入り口に体育座り。

「未来お前、座りっぱなしじゃなか」

「だって、そういうことになってるじゃん」

未来と俺が小突きあっていると、光原が手を止めずに尋ねてきた。「そういうこと、って？」

「和也は食事担当で、あたしは掃除担当なの」

「へえ」

「俺らさ、父親の単身赴任が決まった時小五と小三だったんだけど、まあ母親も働いてるしさ、俺らも家のことしなくちゃいけないな、って思ったときにもう分担したんだよ。どうしてこうなったんだっけ」

「包丁や火を使わなくちゃいけない方が和也、でしょ。それにしてもあたしたち、それまであんまり手伝いとかしない子供だったよね」

そうなの？ と少しだけ手を止めて、光原はこちらを見た。ふたりでうん、と肯定の返事。

「でも俺は掃除普通にできるぞ」

「ダメよ和也はガサツだから。整理能力まるでないじゃない」

言い合いをしながらぼうつと見上げる光原の横顔が少し緩んで微笑みを作る。

「斉藤くんちはにぎやかで楽しそうね」

「あとは母親だけだけど、まあそれなりにね」

そこはどうしても気の利いたことを言えずに、でも光原はふふつ、と今度はちよつと声を出して笑った。

「ちよつと澪さん、トイレどこですか」

「そのドアだけど……二階のトイレはウォシュレットついてるよ」

「あ、じゃあそっち借りまーす」

とにかく何か言わなくちゃ、と思考を巡らせているうちに未来は光原とそんな会話をしてから立つて階段を上っていった。俺はひとりで座っているのもちよつとやりにくくなって立ち上がり、キッチンの戸のない入り口のへりにもたれた。

「……ありがとう」

そんな俺に向かつて、あらかた片付け終わって石けんで手を洗っている光原は自分の手を見つめたままで言った。

「料理ぐらいいつでもするよ。美味しいって言ってくれて、俺も」

「違うの。あ、それもあるけどでも、あのテスト前のね。ひとりで我慢しちゃダメって言ってくれた時。すごく、すごくね、嬉しかったんだ。凜や冴や、他の女の子の友達はね、何があっても普通に接してくれて、すごく助けられてきたんだけど、やっぱりああいうのが、なんて言うのかな、まっすぐ嬉しいの。家帰ってからありがたかったな、って思うんじゃないかって、その場で。だからありがとうね、私が巻き込んだようなもののなに」

俺はそこにはすぐに反応した。

「うん、でも……最初はお前からだったかも知れないけど、そういうのっておかしいよ。今日誘ったのだって俺だしさ、今は楽しいじゃん。あんなの関係ないって」

「そうかな……そうだね。そうだよね」

「そんなに恐縮しなくてもいいよ」

「いや、あのね。ドキツとするんだ。慣れなくて……私ってこれまで生きてきて、まともにお前って呼ばれたことないから」

てへっ、といった感じで光原は舌を出した。

すいません、俺もドキツとしました。

階段を下りる足音が聞こえて、俺はさっきの位置に座り直した。

でもすぐに光原はその俺と戻ってきた未来に、タオルで手を拭きながらリビング行こう、と促した。

そしてそこから二時間ほど、また雑談をしていた計算になる。

正直時間なんか気にならなかった。二時間つてのだって、気づいたら二時だったからそこからの逆算だ。

一応男ひとり女ふたりでなんとなくアウエー感はあるんだけど、それはそれでまあよくて、むしろ未来がいる分ふたりで話している時のようにしんみりすることはない。光原もなんだかいつもより楽しそうで、未来を連れてきたのは間違いじゃなかったな、なんてひとり心の中で確かめたりしていた。

四時になったことに気づいて、誰からともなく帰る雰囲気になった。光原はまだ早いからもう少しゆっくりしていけばいいのに、なんて言っただけでそれにはお礼で返しておいて、また来るからね、と言う未来に合わせ、また来ような、なんて言っただけの玄関から光原の家を後にした。

家までの少し長い道のりを歩きながら、少しほうつとした気分が未来と話をしている。

「楽しかったね、和也。期待してたよりももっとね。思ってたより漣さん明るい人だったし、思ってたより料理も美味しかった」

俺は左手に材料の残りとエプロンを入れた手提げだけを持って、

未来は手ぶら。昔からの少し近い距離感で並んで、半袖の右手には未来の体温が伝わってきている気がする。

「思ってたより、は余計だぞ」

未来とこんな風に並んで長く歩くのは多分しばらくぶりだ。

「だって、あたしがいても気まずいだけだと思ってたんだもん」

「そうなるんだったら連れて行ってないよ」

逆に、こっちだって思ってたより打ち解けてくれて助かったくらいだ。でもそれは、口には出さないでおく。

「何で料理、作ろうと思ったの？」

「何で、って？」

「だってさ、失敗するかもしれないし、作り慣れたメニューなわけでもないし、男がいきなり料理作り始めたら、引いちゃう人だっているかもしれないだよ？」

未来は少し首を傾げるように、俺の顔を覗き込んで言った。

「そんなんじゃないんだよ」

俺は前を向いたままで答える。

「じゃあどうして？」

「俺らさ、ひとりで食事することってあんまりないだろ？ お前は先に食べることもあるけど、すぐに俺とか母さんが帰ってくるし、俺が食べてる間は食卓カリビングにいるじゃん。だから思ったんだよ。せつかく行くんなら、って」

ふーん、と小さく口をほとんど開けずに言っつて、未来は目線を前方に戻した。

「いいんじゃない？ 和也にしては」

「まあ友達からアドバイスもらっただけだね」

「あー、何よそれ。あたしがホメたの半分返してよ」

「どうやってだよ」

バカなやりとりだけど、そうこうしているうちに佐野塾まで歩きついた。家ももう遠くはない。特に理由もなく、ふうつと溜め息をつく。体の力が、ちよつと抜ける。

「ねえ和也、ちょっと……」

「うん？」

未来は少し改まったように言っ、あまり見ない真面目な顔をす。いきなりのことに、少しだけ体を硬くした。

「言えなかったけど、謝らなきゃいけないことがあつてね」

「なんだよ、怒らないから言ってみるよ」

エプロンの件といい何といい、今日はいやに素直だな。ちょっと気持ち悪いくらいだ。

「えっとね、あたしがトイレ行つてた時の和也と澪さんの話、聞いたちゃったんだ」

「えっ、ああ。でもそれくらい別に」

「澪さんがあの……“呪いの人”なんでしょ？」

「どうしてそれを？」

思わず足を止めて、未来の顔をじっと見つめる。どうやら今日という日、ただではすまないらしい。

家に帰りついて、居間で俺は床に座つてソファーにもたれ、未来は座椅子で向かい合う。今日も母親は少し遅くなるらしい。

「結局噂自体はどんな風なんだ？」

「学校の七不思議とかとそんなに変わんない。信じてる人はあんまりいないけど、内容が他よりリアルだから知ってる人は多い」

「光原の名前は？」

「出てくるなら、もうとくに言ってるよ」

未来は必要以上にしゅんとなつてしまつて、さっきまでのしやいでいた感じとの落差が俺を余計に滅入らせる。

「普通の……噂なんだな」

「うん」

「絶対に誰にも言つなよ。我慢してるのは、誰よりあいつなんだか

ら」

むう、と未来がうなるように小さく返事をしたのを聞き届けて、俺は階段を上って自室に戻った。

ベッドに腰かけるとすぐ、ポケットから取り出した携帯で貴司に電話をかける。

普段より長くかかったが、貴司は出た。通じると同時に、無意識に立ち上がる。

「もしもし、どうした？」

「貴司、今どうしてる？」

電話口が少しざわついている。おそらく家にはいないのだろう。

「ああ今、映画見終わって……」

「長くはかからないからそのまま聞いてくれ。未来が学校で呪いの噂を聞いてるらしいんだ。個人名は出てこないけど、それなりにみんな知ってるらしい。そんなに広がってるって、知ってたか？」

「知らないな……でもふたつ下だし、学校もさほど光原の出身と離れてない。ありえない話じゃないんじゃないか？」

俺が相槌を打とうとすると、電話口でガサガサと大きな音がした。俺が携帯を少し耳から離れたその瞬間、いきなりスピーカーから大きな声が放たれた。

「斉藤！ 何そんなことでビビってんのよ！」

「は、灰原？」

俺はすつとんきょうな声を上げる。

「いまさらヨソの子が噂知ってたからって何？ そんなの大丈夫って大きく構えて……」

またガサゴソツ、と音がした。少しもめている声も聞こえる。

「……すまんすまん。でもまあ、凜の言う通りだよ。だって“何もなくていい”んだろ？ お前が焦ったりするのが、多分一番ダメだって。だったら何があってもばーっとしてろよ。光原さんがあやっぱり大丈夫かも、って思えるぐらいにさ」

俺が言葉に詰まって曖昧な返事をする、デート中だから切るぞ、
と言って貴司は電話を切った。

言われたことを飲み込むのに少し時間がかかったけど、なんとか
理解して、納得した。なるほど、と思った。

それにしてもなんか、男前だな。貴司も灰原も、どっちも。

未来にもちよつと伝えておこうか、と思ってもう一度階段を下り
たが、居間には未来はいなかった。また階段を上り、未来の部屋の
ドアを二回ノックして、返事を待たずにドアを開けた。

「入ったぞ」

返事はない。未来はすでにパジャマに着替えてベッドのへりに座
り、上半身はベッドに横たえている。

「どうしたんだ、疲れたか？」

俺が少しだけ無理をして笑い、そう言くと未来は上半身を起こし
た。うつむいたまま少し足を開いて座り、手を足の間に置いた。

「用事？」

明らかに落ち込んでいる。

「いや……貴司にあのこと電話したらさ、怒られたよ。『大したこ
とでもないのにお前がそんなに焦ったら、光原さんも不安になるだ
ろうが』って。それもそうだよな、って思ったから、伝えにきた。
それだけだから、眠いならメシまで寝てていいぞ」

未来は答えずに黙り、うつむいたまま立ち上がってゆっくり歩き
出した。なんだよ愛想ないなあ、と思った、でも。

俺の隣を通り過ぎるのかと思ったところでいきなり、直立してい
る俺に体ごとたれかかってきた。どうしたんだよ、と両手で抱き
とめる。左側の鎖骨と肩の間あたりに額をびったりつけて、やつぱ
り表情は読み取れないままで未来は言った。

「どうしてかな」

何がだよ、とか俺が割り込んで言う前に、未来は続けた。

「ねえ、どうしてかな。あんな明るくて、優しくて、キレイで、い

い人な漣さんがさ、どうしてこんなことになるのかな。そんな噂、流されるのかな。ひどいよ、そんなの……」

二度鼻をすすって、未来の肩は震え始める。

「事实は、あるにはあるんだ。取りようによつては、でも」

未来は泣き出して、涙が俺のＴシャツの前側、腹のあたりにこぼれてシミを作った。ねえどうして、と小さくまた、つぶやく。

「光原が悪いわけじゃないって、判っただろ？俺たちはきっと、それだけでいいんだよ。貴司の言う通りな」

しばらくして未来も落ち着いて、だけどそのままの姿勢で俺は右手で、昼間より少し強くまた、未来の頭を撫でてやった。しっかりと結わえてあつた昼間より、少し髪が柔らかかった。

やがて頭から右手を離し、左手も一度、下におろす。そして両手で未来の肩をたたき、しっかりな、と言った。未来はようやく泣き顔を上げて、少しだけ笑った。

顔は洗つとけよ、と部屋を出て行こうとしたが、呼び止められた。

「和也」

「なんだ」

「また、遊びに行こうね」

そうだな、と俺は答える。未来は左手の甲で涙をぬぐって、今度はいつも通りに笑った。それを見て俺も笑い、部屋に戻る。

椅子に座って、一日のことを思い返してみた。

光原の笑顔はまだ目の奥で眩しいままで、あの笑顔があるんなら俺も笑ってなくちゃいけないな、そんな風に思った。

4・君が見せた笑顔（Her bright aspect）（後書き）

この作品も少しスロースターターかもしれませんが、僕の悪い癖です。

ここまでお付き合いいただけたのなら、出来れば次も、そして最後まで読み通していただきたいと押しつけがましくもお願いしたいところです。

5・歩くような速さで（Not knowing what to say）

終業式が終わったにもかかわらず補習なんかやって全員学校に集めやがる。大丈夫か、御崎高校……というのは貴司の弁だが、テスト後二日の休みをおいた後三日間補習と銘打って普通の授業だ。しかもテストが返ってくるぶん、普段より憂鬱さは色濃い。

「思いっきり遊べる最後の夏よ！ 遊ばなきゃ損！」

両手を腰に当てて、灰原がそう高らかに宣言する。

「だからさ、誰も反対してないじゃん」

耳元でうるさいなあ、と俺は机に伏せたままで答える。

補習一日目、昼休み。夏休みを目前に控えた期待感と補習という無益な存在に対する疑念が微妙に混じり合う、独特の雰囲気醸し出す教室。

「まあまあ、テストがちょっとくらい悪かったからってそうスネンなって」

「日本史だけはそうはいかないんだよ……」

午前中の四限すべてでテストが返され、三限までは思ってたほど悪くないという感じだったのだが、四限で返ってきた唯一と言っていい得意科目の日本史が落とし穴だった。

「でも斉藤くん、今回は結構難しかったじゃない」

「そうなの？」

励まそうとしてくれる“いつものメンバー”の中で俺以外に唯一の日本史選択、対馬のその言葉まで灰原が遮る。こいつだけは妙にテンションが高いまだ。

日本史の鴨志田先生のテストは難易度が低いことも手伝って九割台が出ることもそこそこあったし、八割を切ったことも一年の時から通じて一度もなかったのに、今回は七十二点。平均点が七十点強だというから、ほぼピツタリだ。得意科目だからといって侮ったのが良くなかったのか、でもそれにしても逆にいつも俺の日本史の答

案を覗いてはすごいすごいと言っていた対馬は八割台に乗せていて、そのせいでそんな励ましも素直には受け取りがたい。午後からは数
学も返ってくる。

「まあ、その辺まで含めてもう、盛り上がっちゃうしかないのよ」
灰原の論理は強引にもまた、そこに帰着した。

トイレに行つて戻ると、灰原が俺の席に腰を下ろしていた。

- ・ 海
- ・ 夏祭り（神社）
- ・ 浦安のねずみ王国
- ・ 山
- ・ 空
- ・ 北欧

寄つていくと何やら机に色々と書いてある。ちょっと待てそれ俺
の机だしシャーペンも俺のだし、しかも何だよ、特に後ろのふたつ。
「どうもありきたりねー」

「そうか？」

俺のそんな相槌を灰原は気にも留めずに続ける。

「やっぱり浦安のねずみ王国かしらねー」

「でも凜、浦安のねずみ王国って遠くない？ だって浦安にあるん
だよ？」

光原がそう口を挟む。どのくらい光原は乗り気なのだろうか。

「でもさ、浦安のねずみ王国に行つたところで結局貴司とふたりで
行動するんじゃないの？」

俺としては茶化したつもりだったんだけどどうやらそれは凶星だ
つたようで、俺がもうひと言ふた言付け加えると灰原はいきなり、
トイレに行くと言つて席を立てていった。

俺と光原と対馬が半ば呆然と出て行つたほうを見つめていると、

貴司がおずおずと口を開いた。

「……なんかゴメンな」

「私、凜にあんな一面があるって気づいたの、結構最近なんだけど」と、対馬。

「ときどき、ちょっと疲れたりしない？」

光原、結構言うなあ。

「うーん、でもまあ、好きだからねえ」

物怖じもせずにそんなことを貴司が言うので、俺たち残りの三人は腰砕けになってしまった。発言がイメージでできなかったわけではないけど、それにしてもサラッと言つてのけやがる。

光原は言葉に詰まっているし、対馬はなんだか恥ずかしそうにしている。まったく、誰が收拾つけるんだよこの雰囲気。

「まあ、浦安のねずみ王国については再考します。……それぞれに予定もあるだろうし、みんなで行くとなかなか限られてくるよね」

少し待ったけど灰原が帰ってくる風がないので貴司が話を進め始めた。結局、みんなで行くのは神社の夏祭り、あとはまあスケジュールが合えば街にでも繰り出そうか、ということであつという間にカタがつき、ついたところに灰原が戻ってきた。そして貴司が決定事項を伝え、ふたりの時は素直なのにね、と再び場を凍り付かせたところで予鈴が鳴った。

そうか、次は生物で席も替わるしな、と俺が机に消しゴムをかけたつつ顔を上げると、言うまでもなく貴司は灰原に蹴られていた。化学選択の光原はすでに移動をすませたのかいなくなっていて、同じく化学選択の貴司も逃げるように教室を出て行った。

「ねえ凜、木田くんってやつぱりすごいね」

貴司が出て行ったのを確認して、対馬が灰原に話を振った。

「……私って、性格悪いのかなあ」

灰原はそれには答えずに、独り言のようにそうつぶやいた。そん

なことないよ、と対馬がなだめる。

「そうかな」

「そうそう。いつも楽しいよ」

……なんか、今日の灰原は一輪車に乗れそうもない。

灰原は翌日にはそれなりに元に戻ったが俺のテストの悪い流れはなかなか元には戻らないようで、補習二日目の午前は古典がついに五割を切ったという大失態を筆頭に、またも思わしくない結果となった。

「和也、死ぬな」

今日も今日とて机に突っ伏している俺に、今日は貴司だけが構ってくれている。

「死ぬかも」

「どうして……どうして和也がこんな目に……」

「テストが悪かったからだよ」

ふたりでそんな会話をしながら、結局いくらか持ちなおして弁当を食べた。

「斉藤くん、ちょっと」

弁当を食べ終えたあたりでちょうど光原が教室に入ってきて、俺を呼んだ。

「今日放課後体育館裏、大丈夫？」

「オッケーオッケー。もう休みに入っちゃうしね」

学校での光原はやっぱりちょっと遠慮がちに落ち着いていて、でもその少しもじもじした感じも、それはそれで悪くない気がする。

「あ、あと……有働先生が呼んでた」

「えっ？」

「ほら古典、失敗したって言ってたけど、それじゃないかな」

でもわざわざオチをつけて、俺のテンションも落ち着けてくれなくていいんだけど。

職員室の入り口で、待ちかねたように先生は立っていた。

「おう、来たか斉藤。その第二面談室だ」

先生はおそらく見た感じ年齢は三十そこそこで、背丈は普通程度。授業の時は必要以上に男しやべりで、そのせいか運動会などで着るジャージが異様に似合っで見える。まだ結婚はしていないそうで、男っ気のあるタイプにも見えないが、本当のところは誰も知らない、というのが真相らしい。

「何で呼ばれたか、自覚あるか」

鍵穴に鍵を差し込んで回しながら、先生は聞いてきた。はい、と答える。こういう時まで男しやべりなのか……怖いなあ。

「そっち側に座れ。クーラーつけてくるから」

そう言っただ度面談室を出ていった先生は程なくしてやたら大きなクリアファイルを持って戻ってきて、座ってそのファイルの俺のページが開かれたところ、ようやくクーラーがやる気のない音を立てて風を送り始めた。

「今回は、どうした？」

まだ順位が返ってきていないのに、先生はそんなことを言う。こりゃ、先に覚悟しとけよ、ってことが。

「勉強のしかたが甘かったんだと思います」

「そうか。そう思うんなら、そうなんだろうな。全体的に少しずつ、落ちてるからな。ま、次はやれよ、としか言えないよな」

それから先生は、うーん、と俺の成績表と思しき紙に目を通して言った。

「日本史はどうした？ ガタツと来てるじゃないか」

「それは……得意だからそこそこでテスト受けたら、っていう」

むー、とうなる。コメントが貰えないのが一番不安だ。

「あとは、分かっているとは思うが私の古典だな」

「はい」

そうとしか言えない。中学の時から興味も持てずさぼり倒してき
たツケなのか、高校に上がってからはたまのまじめに勉強したとき
も平均さえとれたためしがなく、しかもそんな中でも今回は最悪だ
った。

「古典は……嫌いか」

「はい、少しだけ」

先生のひどくからつとした人柄は、答えにくい質問も正直に答え
させる何かを持っている気がする。反射的に答えてしまった。

「今日はそれで呼んだようなものだからな。斉藤、授業は聞いてそ
うなのに……家では勉強しないタイプなのか」

確かに授業は聞いてノートもちゃんととるけど、そうなのかな。
と考え込むと、先生は返事を待たずに続ける。

「ちよつとでも頭に残ってたらテスト前日に訳だけ見ておくのでも
だいぶ違うぞ。嫌いでもいいから、点はとつとけ」

古典を教える先生にあるまじき、と言っているような男らしい発
言だ。

「勉強しろとか、あまり言わないんですね」

「お前みたいな根がマジメな奴は、点が取れるとやり始めるからな」
そういうのって俺に直接言っているものなのかな、なんて思っ
ていると、先生はばさつとファイルを閉じて、言った。

「まあ順位はそこまで落ちてるわけじゃないから心配するな。これ
を機に気合い入れてやっていけば、まだグツと伸びるぞ」

「はい」

なんとなく、こういうのがいい先生なのかな、と思った。

「それとだな、あとひとつ」

背もたれに寄りかかったり寄りかからなかったりして体をゆらゆ
らさせていた先生は、そう言って重心を前に移し、少しだけ身を乗
り出して言った。

「なあ、光原と仲良くしてるのか」
えーっと。

「はい、そうですけど」

あつ、また言っちゃった。

「いや、あいつな。朝いつも予鈴が鳴ったところ教室行くだろ？ あれってな、私らの職員朝会ギリギリまで私としゃべってるからなんだ。知ってたか？」

「いえ……」

仲がいいとは思っていたが、それは知らなかった。

「去年の秋口からずっとだな。光原は去年の私のクラスだったんだが、クラスになじめてない感じだったから呼んでみたら、今でもあんな感じだよ」

「そうなんですか」

「あんな噂があるだろ……それで一時、女子ともうまくいってなかったりもしてたみたいなんだ。でもまあ、その辺は灰原のおかげかな。そうかと思えば今年になって、お前とか木田とか。もう大丈夫そうだな、とは思っているんだが」

先生の口から呪いの話が出てきたのが意外で、俺がその旨を告げると先生はふふつ、と笑って、だけど何も答えてくれなかった。そしてしばらく黙った後で、困ったらいつでも何でも相談しろよ、とだけ言った。

「若者がひとりで悩んでたって疲れるだけだろ。もっと大人を頼れ。歳だけはまがりなりにも食ってきてるんだからな」

女の人とは思えない、独特の言い回し。

「先生もそこまで歳いつてないでしょ、でも」

「何言ってるんだ。あたしゃもう、三十六だぞ。四十路一直線だ」

……。

本当に、読めない人だ。

教室に帰った頃に予鈴が鳴って、午後の授業は成績のことで呼び出しをくらったばかりのくせに久しぶりに居眠りをしたりしながら、なんとか乗り切った。

放課後は光原と約束通り体育館裏で会って、有働先生の話をしはらくした後、灰原の話になった。

「ねえ斉藤くん、最近凜、ちょっとおかしいと思わない？」

「なんだかキヤラ変わってきた気もするよね」

どうしたのかな、と光原はつぶやいて、口をつぐんだ。この時間はちょうど日陰になる体育館裏に、生ぬるい風が吹き抜けた。

「なんか、張り切りすぎてゐるのかもな」

「仕切るの好きそうだもんね」

張り切りすぎている気がするの、本当だ。だけど最近それがひどくて、ちよつとみんなをまとめるのにやつきになつてゐるような感じもある。最初の繋がりか呪いだつた俺や光原を、そして光原とはそのまた繋がりである自分の彼氏、貴司を、仲良くしていく上でひずみ起きないように、と頑張つてゐるのかもしれない。

昼休みの先生の話も考え合わせれば、それが一番もつともらしいように思える。

「もつと楽にしてもいいとは思うけどね。友達なんだから、つて思えば、背負い込んで欲しくはない」

「凜はマジメだからね。小学校の時なんかずっとクラス委員やつて、中学でも生徒会にいたらしいから……そういうところ、あるのかも」

だけどやつぱり昨日の昼休みは空回りが過ぎたんじゃないのかな。結局何も、解らなかつた。

でも灰原がクラス委員だ生徒会だつてのは、なんとなく予想通りだつたけど。

その後夏休みには連絡して会おう、と半ば再確認にも近い形で約束をして、いつも通り一時間で、俺たちは別れた。電話一本できつと毎日でも会えるのに、夏休みになると発生するそのひと手間が妙に重そうに思えて、俺は物心ついてから初めて、夏休みなんか来なければいいのと思つた。

だけど当たり前のことだが夏休みはやってくる。

最終日のホームルームで成績表が返されて、先生の言った通り意外にも順位が落ちていないことに少しだけほっとした。

そして夏休みに入ったその日に、何の因果か風邪を引いた。

なんだか体が疲れているような気がしたのでエアコンのタイマーをいつも通り一時間にセットして早めに寝ようとしたが、体が火照るような感じがしてなかなか寝付けず、タイマーのほうもあと三十分、あと三十分と延ばし、設定温度も結局二度下げてしまつて、元々風邪気味だったのがそれで決定打になつたらしい。

「和也ー、熱はどうだった？」

「三十八度一分」

母親は夏休みの間だけ普段パートのない日の昼間にもパートを入れてしまったので家にはいない。父親の単身赴任に伴つて一大決心をして仕事を辞めたというくらい普通に働いていた人で、家でばやっとしているのは性に合わないらしくやたらと何か働きたがる。まあパートだし、と思つていたがこの前自分で税金を申告して払わなければならぬと言つていたからそれなりには稼いでいるらしい。

「食欲はー？」

「ない」

「じゃあ寝てたほうがいいんじゃない？」

必要以上にがちゃがちゃと音を立てながら未来が前夜からのぶんの食器を洗っている。そのせいかいつもに増して語尾が間延びして、頭痛も手伝つてかいくぶん耳につく。

「そうするよ」

そう短く答えて部屋に戻つたが、さほど眠れていないはずなのに明るい部屋ではなかなか寝付けないもので、現代文の授業で強制的に借りさせられた図書室の本が机の上に置いてあつたので手に取り、読みたくもないのにぱらぱらとページをめくりつつベッドに寝そべ

つてみたりしていた。

そんなのにもいい加減飽きたころ、ちょうど十時になったといういいタイミングで未来が部屋に入ってきた。こいつ、いつからノックしなくなったんだっけ。

「和也、ヒマでしょ明らかに」

「そりゃそうだよ」

とりあえず俺の学習イスに座って、未来はいきなり長居の体勢だ。俺がもう一度本に目を落として黙っても未来は未来で黙ったまま右の膝だけ抱いて膝頭にあごを付け、床に着けた左足を軸にして左右に六十度くらい、ゆるーらゆるーらと回っている。

グヴヴ……

それから三、四分してだろうか、そんなよく分からない感じの沈黙を破ったのは、俺でも未来でもなく携帯のバイブ音だった。俺の携帯かとも思ったが、未来がすぐにポケットから自分の携帯を取り出した。しばらくディスプレイを見て、口を開く。

「あ、和也。澪さんにお見舞いに来てほしかったりする？」

下世話なこと考えないで、放っておいてくれればいいのに。

「ほら」

見せびらかすように突き出された未来の携帯のディスプレイには何やらメールが表示されていた。

差出人は“みおさん”。どのタイミングでアドレスを交換したのか、俺は知らない。

うそ！？ 大変だね。昨日は普通にしてたのに。

大丈夫そう？ 私も特に用事ないし、今も家にいるから、行っちゃったりしてもいいかな？

俺はにらむように目を細めて（頭が痛いからだ）その文面を読み終えた。

文字ばかりのシンプルな文面。これまでに知ってはいたけれど、必要最小限しかメールのやりとりはしてこなかったから、まだ慣れない。女の子のメールって、もっとこちゃこちゃしたものだと思っていたのだが。

「なあ、お前は最初に何て送ったんだ？」

「うーん？　『お久しぶりです。和也が三十八度の熱を出したので心配してあげてください』って」

携帯を閉じながら、未来はなんでもないことのように答える。

「なあ、どうしてそんなことするんだ？」

「来てほしくないの？」

俺が言葉に詰まると、未来は勝ち誇ったようににやあつ、と笑った。

「決まりね。さあ和也、片付けしなくちゃ。澪さん来ちゃうよ？」

来て欲しいなど、ちよつとだけ思ったことは懺悔する。

が、しかし……なあ、ちよつと。

宣言通り、未来はわやわやと俺の部屋を片付け始めた。

昨日帰ったままで放つてある鞆を机の下に入れることから始まり、適当に机の上の本立てに立ててある教科書類を手際よく大きさに別け並び替えていく。プリント類や収まりきらない教科書は手提げの紙袋にしまい、積んであったマンガ雑誌と一緒にすっかり納戸として使われている父の書斎に持っていってしまった。

「どうしてこんなに物が多いかなあ。元気になったら持って戻るのよ」

言いながら、シュシュツ。ニオイすつきり。

自分の部屋を目の前で消臭されるのは、あまり気持ちのいいものではない。

ひとつ空気抜きに開けてあった窓をもうひとつ開けて風を通し、消臭芳香剤独特の匂いも消散した。そんな素晴らしいまでの外ヅラ作りが終わったころ、チャイムが鳴った。

寝転がったままでいた俺は立ち上がったが、そういえば自分は病人だと思い直して窓をひとつ閉めただけでまた横になり、待つことにした。

寝転がった時の衝撃でまた少しだけ、頭が痛んだ。

光原が部屋に来るまでに、思っていたより時間がかかった。

閉じられたドアのほうからきやつきや、という未来の声は聞こえてくるが階段を上ってくる音はなかなか聞こえず、俺はやきもきしながらベッドの上で上半身を起こしたり倒したりしていた。

それもいい加減頭が痛くて止めたところにようやく足音が上がってきて、俺はタオルケットの中で体を硬くして待った。

コンコン。

「斉藤くー……」

澄んだノックの音ふたつの後、ドアのすぐ向こうにいるはずなのに妙に遠くから聞こえるような声で光原が俺を呼んだので俺は体を起こしたが、その声を遮って未来ががちゃっ、と情緒のない音を立ててドアを開けてしまった。

「ちゃんと起きてるんだから」

妹よ、お前には日本人の心というものが足りない。

「おはよう、でいいのかな」

「こんにちは、よりはおはようのほうが言いやすいよね」

「いつも言ってるからね」

そんな感じのまったりした、体育館裏での話しはじめみたいなテンポで俺と光原の会話は始まった。未来の元気のいい、少しきいきいした声が嫌いなわけではないが、こんな状況だからやっぱり、光原の落ち着いた声が耳と頭に心地いい。

「じゃあいつも言えないから、こんにちはにしようかな」

「うん、じゃあ……こんにちは」

俺たちのそんな時間のかかる挨拶に苛立っているのか、光原の二

歩半ほど後ろで未来はやきもきした表情をしている。

「意外にすつきりした部屋ね」

軽く周りを見わたしてから、光原は言う。

「“意外に”？」

ほんの冗談のつもりだったのに光原はやたら恐縮して、なんか男の子がきつちりしてるってイメージが持てなかったから、と細く答えた。俺が微笑み返していると、とうとう未来は我慢の限界だという風にしゃしゃり出てきた。

「あーもう、澪さん。部屋はあたしが片付けたんです、みつともないから」

そして光原が、そうなの？ と尋ねてしまわない間に部屋を出て行ってしまった。

「そういうことです」

ばつが悪くなって俺が頭をかきながら言つと、光原はもう一度、優しく笑った。

それからいくらか病状について話した後、十五分ほどいつもよりさらにゆったりしたペースで俺と光原は他愛もない話を続けた。俺は熱を出したとき決まって死んだ自分を客観的に見て悲しみ続けるという悪い夢を見るので、今朝方もそれを見たという話をした。光原はいつもではないがだんだんと指がなくなっていく夢を見るという。そして、でも同じような夢を病氣するたびに見るという人を自分以外に知らなかった、というので意見が一致した。

「やつぱりみんなあるはずだよねえ」

「俺もそう思うんだけどなあ」

「ねえ、ほんとに」

でも俺は、まなじりをずっと下げたままでいる光原の笑顔の優しさに、悪夢さえ溶けていく気がした。前髪が伸びてきたからなのかそれとも暑いからなのか、少しヘアピンで髪を上げているのも、なんかいいな、と思った。

「それ——」

がちゃん。

「零さん、紅茶入れたから飲もうよ。和也は休んでないといけないんだし」

これ以上ないほどにむかつくタイミングで未来が登場した。

「あ、そうね。ごめんね、私ったら」

しどろもどろに謝った後、光原はまたまなじりを下げ直し軽く首を傾げ、まるで「しょうがないわねえ」とでも言うかのように気持ち肩をすくめた。

未来に手を引かれて部屋を出ていくその姿は、背丈の違いも手伝っていくぶん母娘のそれにも見えた。

ふたりが出て行った後、程なくして俺はうつうつとし始めたらしい。深くはないが、眠りに落ちていたようだ。そこまで自分の寝覚めを意識している人はあまりいないかもしれないが、俺は目覚めたときまず意識だけが戻る。そして意識だけで夢の中から戻ってきたことを確認し、確認が出来しだい体も目覚めて起き上がる、という感じだ。その作業にさほど時間はかからず、目覚ましなどを使わずに自然に目覚めたときの寝起きは悪いほうではない。

「ひゃんツ！……」

そんな感じでいつも通り体を起こしたのだが、隣でいきなり光原がそんな驚いたような声を上げたので俺のほうも驚いてしまい、現状把握にいつもより時間がかかった。目を開けたときにはベッドの脇に腰かけていた光原は、俺が完全に意識を取り戻すころには立ち上がって二歩下がっていて、少し顔を赤くしているように見えた。

「えーと俺、起きないほうがよかった？」

「いやそんな、ちよつとびっくりしただけ。あのっ、私もう帰るから、だから、えーっと、ごめんね。私が来たいから来ちゃったみたいになって、結局何もしてあげられなくて。……じゃあお大事に、ゆっくり休んでね」

光原はやたら焦りながら部屋を出ていった。
結局何も、ってことは、もともと何かしてくれるつもりだったのかな。

うまく目覚めることに失敗した俺の頭は、そんなことをぼつと考えていた。

それからすぐ未来が、これ遷さんが持つて来てくれたのよ、と大きめのコップに入れたスポーツドリンクを運んできた。光原は大きいペットボトルで持つてきてくれたらしい。さすがにエアコンを点けなかったからかひどく汗をかいていて、そのスポーツドリンクは染み込んでいくようで気持ちよく、飲み干したところには体も少し軽くなっていた。汗の染み込んだシャツでは居心地が悪くなったのでそのまま立ち上がり、空のコップを持つて未来と一緒に一階に下りた。

ソファーに腰かけてテレビを点けるとそこでやっと昼を過ぎていることに気付いて少し焦った。チャンネルを回しているとちょうどサングラスの司会者がお決まりのセリフを言っていた。

「なあ、未来。お前朝めしと昼めしどうしたんだ？」

「朝は早起きしたからお母さんと食べたよ。お昼はさっき、遷さんとそうめん食べた」

「光原と？ 光原が茹でてくれたのか？」

「へへへ……わかる？」

「当たり前だ」

ちよつとだけ気合いを入れて立ち上がり台所のほうへ行くと、皿も鍋もザルも、そして紅茶のカップも綺麗に洗ってある。

「洗ったのは？」

「一応、ふたりで」

「そうか」

何か自分も空腹を感じるには感じたが、結局そのままなんとなく

部屋に戻ってしまい、なんとなく汗の匂いの残るベッドに横になった。そしてすぐにまた眠り込んでしまった。

枕元に少し、いい香りがあった気がした。

結局目を覚ましたのは夕方、階段を下りていくと母親が帰ってきて料理をしていた。だいぶん気分もよくなったので熱が下がっているか測るつもりでいたのだが、母親が明日は休みをとったからゆっくりしなさいなんて言うてきたのでやめてしまった。どうせ明日も安静か、なんて思いながら母親の中年っぽいねちっこい語尾の話をしばらく聞いていたのだが、どうやら母親は俺がそうめんを茹で、食器を洗ったと思っているらしい。未来がどうやらそう伝えたようだった。

スポーツドリンクのことも追及されたので、それは未来が買ってきた、と言っておいた。

翌日は本当に終日部屋に幽閉されたのでずっと漫画を読んでいたところ、昼ごろに灰原からメールがあった。明日空いてたら遊ぼうというもので、さすがに明日は出られるだろうと思ってそのまま同意の返信をした。そして立ち上がり着ていく服を選んで椅子の上に置いた後、はたと思いついて熱を測ったら平熱だったのでまたベッドに戻って漫画を再開した、そんな一日だった。

そして夜十一時ごろに寝たのだが、さすがに寝すぎだったのか六時半には目を覚ましていつもするように携帯をチェックすると、日付が変わったところに灰原から時間と場所を指定したメールが届いていた。十時に駅前、か。

階下を下りていくと何やら料理をしているような音が聞こえてきた。何かしら食べ物の匂いもする。台所に顔を出すと、未来が母親と一緒に朝ごはんを作っていた。

「あら、早いね」

「昨日も早く寝たから」

「熱は？」

「昨日のうちに下がってるよ」

俺と母親がそんな会話をしている間にも未来は味噌汁用なのだろうネギを必死で刻んでいた。母親はそちらのほうもチラチラ見て、そう、そう、気をつけて、などと言っている。

「どうして未来がネギ切ってるの」

「この子も味噌汁ぐらい作れないと将来大変でしょ」

「料理ができる女子って思ってるほどいないと思うよ」

「ええ？ でもできて損はしないんじゃない？」

未来は危なっかしい手つきで、一心不乱といった感じにネギを刻んでいく。少し口を尖らせ、目を細めている。

「この子も何を言い出すかと思えば『料理できるようになりたい』って……好きな人でもできたのかしら。和也がいなるとき困るからなんて言い訳して」

未来はそこでやっと、顔を真っ赤にして手を止めた。

「んもう！ お母さん、ちょっとは黙っててよ！」

母親はそこで洗濯が終わったことを告げるメロディーがちょうど鳴ったのをいいことに逃げていつてしまった。仕事をしているからなのか、ああいう感性は若いよな。

後を任された俺だけど、もうほぼ出来上がっていたので特にすることはなかった。

「そんなにたくさん切ってどうするんだ」

俺がそう言うと、未来はまた顔を赤くして、そっか、と言った。

「なあ、母さんには俺がそうめん作ってたって言ったのか」

母親が物干しに上がったのを確かめて、俺は未来に尋ねてみた。

「言った。めんどくさかったから」

「スポドリは？」

「聞かれなかった」

包丁を置いてまな板を流しながら、だけど口は尖らせたままで未

来は言う。

「あれは俺が、未来が買ってきてくれた、って言った」

それには特に反応を示さずに、未来も聞き返してきた。

「あのさあ」

「なんだ」

「和也と澪さんって、付き合ってたの」

俺は食卓の椅子を引いて座ろうとしていたが、ちょっとした動揺もあってか椅子に足を踏ませてしまった。小さく声を上げてしまったが、何とか平静を装って座った。くそっ、地味に痛い。

「付き合ってたは、ないよ」

未来は表情を変えなかったが、意味深に溜め息をひとつついた。

「じゃあさ」

予想できない質問ではなかった。

「じゃあさ……好きなの？」

ただ、そこまで考えが及んでいなかったただけだ。

5・歩くような速さで)Not knowing what to say)

公開のために読み直しながら、自分の文章力・描写力の無さに辟易中です。

この章の展開は映像的すぎて更にその傾向が顕著。少しゆっくり読んで……って、遅いか。

「好きなの？」

「好きなの？」

「好きなの？」

まだ、未来のその声がリフレインしている。

俺は一瞬迷った後に「わからない」と答え、未来にまたひとつ溜め息をつかせた。

「好きなの？」

会話はそれきりになってしまつて、久しぶりに母親と三人で少し気まずい食卓を囲んだ後、俺はついぶん早く家を出てしまつて、コンビニで時間を潰したりもしたが九時半には駅前に着いてしまった。

学生は夏休みの時期とは言つても今日は平日で、まだ七月下旬。

行き交う人の波は思ったほどではなく、同じくらの年ごろの奴が割合としては結構いる。このくそ暑いのに密着して、または手を繋いで歩くカップルも、いくつか見かけた。

好きつて、こういうことなんだろう。

俺にはよく解らない。

まず最初に現れたのは灰原だった。九時四十一分、それでも結構早い。

「おはよ」

「ああ、おはよう」

「斉藤だけ？」

「まだ時間あるからな」

灰原は普段まとめているセミロングを下ろしていて、なんだか変な感じがした。水色系のＴシャツに半袖の上着、そして下は白のスカートで、これも普段の印象と違っている。そういえば灰原の私服を見るのはもちろん初めてで、多分こうしてふたりになることもこ

れまでなかったはずだ。

「カラオケ行く予定なんだけど……大丈夫？」

「何が？」

「ほら、風邪引いてたんでしょ？」

「誰から聞いたの？」

光原から聞いたんだろう、とは思っていたけど、一応聞いた。

「貴司から」

あれっ。

あいつの情報収集能力は計り知れないな。未恐ろしい……未来からだろうか、まあいいか。

「大丈夫だよ。もう治ってるし、喉には来てないから」

「そっか」

ちよつと光原のことが引かかった。未来のせいかな、少し動揺している自分を感じる。

話すことがなくなって、時計を見た。九時四十七分。もうそろそろ、誰か来ていいころだろう。

「なあ」

「なに」

何もせずにただ待つことの退屈さが、俺に口を開かせる。

「貴司のこと、好きか」

俺は大した意図なくそう聞いた。灰原は少し顔を赤くしたように見えた。

「何よ、友達の彼女取るうっての？」

補習の時に見たのと同じ、焦ったような顔だった。声も少し上ずっている。

「聞いてるだけだよ」

「そりゃ、好きに決まってるじゃない。……どうしたの？ いきなり」

「どこが好きなんだ」

俺は怪訝そうな顔をして尋ねた灰原には応えずに、もうひとつ質問を続けた。

灰原は少しの間黙って、そして言った。

「わかんない……優しいけどおしゃべりで、いつもヘラヘラしてて……好きにならなかつたら、嫌いになつてたかも」

どういふことだろう。やっぱり、俺には解らない。けどもう、それ以上聞くことはしなかった。

「なあ、好きってどういうことなんだろうなあ」

俺は真面目に聞いたのに、灰原はどうしたのよお、と茶化して、答えてくれなかった。

九時五十二分、対馬が現れた。対馬は髪型こそいつも通りだったがジーンズ姿で、どちらかというと灰原より対馬のほうがスカートのイメージだったこともあってこれも少し意外だった。そしていつもしている眼鏡を、今日はしていなかった。

おはよー、と少しオーバーアクション気味に手と手を合わせて灰原と挨拶した後、対馬は俺にもにこっと笑いかけ、おはよつ、と言った。俺もおはよう、と返す。

俺たちくらいの年頃なら四、五年で顔立ちが変わっていけないことなんかまずなくて、だけど眼鏡を外したぶんだけ、いくらかは大人びた顔立ちの中に小学校のころの面影が見えた気がした。

「さ、行くわよ」

まだ三人なのに灰原がそんなことを言い出して、俺はひどく焦った。

「ちょっと待てよ。まだ……」

「今日は三人だけだよ？」

対馬までそんなことを言い出す。

「え、ちょっと、なんで？」

「決まってるじゃない。遷とのカンケーを聞き出すのよ」

少しあごを突き出すように、灰原はカンケー、と強めて言った。そ

んなことでさっきまでよく、涼しい顔でいられたものだ。

さあさあ、とふたりは俺を導いていく。キヨスクの前に立ち、携帯で話をしている大学生くらいの男の人が、ちらっとこちらを見た。この状況をうらやむ人もいるかも知れないが、俺は未恐ろしさのほうに先に立った。

せーの。

「今、いちばん歌ってあげたい曲を歌ってください」

何をたくらんでいるか知らないふたりが出してきたお題は、そんな無理難題そのものだった。

「歌ってあげたいって、誰に」

「言わせるの？」

「知らない」

じゃあ考えとしてね、灰原はそう言った後慣れた手つきで二曲予約した。空き時間に表示され続ける名前だけは聞いたことのあるアーティストのクリップが止まって、一曲目がすぐに始まった。

聴かない俺でも知っているほど定番の、女性アーティストの曲だった。軽く振り付きで歌う灰原（遊び慣れてるなあ）をぼんやり眺めながら、光原のことをくそ真面目にイメージしてみる。二曲目にゆったりした調子の男性バンドの曲が始まったあたりで、ふと浮かんだ曲があったので検索をかけてみて、登録されていると分かった。でそれを転送した。

だけど結局、“歌ってあげたい”というキーワードには、ピンと来ないままだった。

曲が終わって採点が行われている間に、さっきまで歌っていたばかりのふたりは知らない曲なんだけど、私も知らない、ハードル高いかもよ？ ラブソング？ ねえラブソング？ などと好き勝手言っていたが俺は特に返事をしなかった。点数はまあまあ高かったようだけど、ふたりは特に気に留めていない様子だった。

トゥモロー <ザ・モスキートーズ> 作詞作曲……

そう大きくテロップが表示されて、イントロが始まった。同時にふたりが黙って、俺の顔を見る様子が視界の端に引つかかったが画面から目を離さずにいた。

僕はさがしていたのかな

なびく後ろ髪だけ見て 君を

風が吹いてくれないと

君の姿は見えないね

握りしめた右手をすぐにほどいて

僕の中の君は僕をけなすんだ

言葉も交わしたことのない君

でも その幻影もすぐに消えていく

「やっぱり知らないや」

「でも、結構上手いよね」

知らないのは当たり前だ。むしろ、登録されていること自体が意外だった。

従兄に誘われて一度だけ行ったライブハウスで、偶然出会ったような曲だから。

誰もが背負う十字架を カルマと呼ぶのは容易くて

だけど名前をつけたその時 人は忘れる それは降ろせる

この世のすべてがカルマなら 僕は君だけの十字架になろう

せめて闇の中でも 明日の後ろ姿が見えるように

君といつまでも離れないように

カラオケの音で虚勢されてはいるが、それでもゆったりと力強い
ロックナンバー。

歌っていて解った、これは“歌ってあげたい”曲じゃなかったか
もしれない。

だけど確実に“聴いて欲しい”、もしかしたら“聴かせてあげた
い”曲だ。

闇を忘れた青い空

なびく後ろ髪はそのまま 君は
空だけ見つめているんだね
後ろの僕には気付かずに

狂いきつた僕の脳みそが何故か
知らない君を思い出すんだ
顔さえ知らない君だけど
その君を ずっと探してた

サビに向けて盛り上がる曲にあわせて、俺はすうつと目を閉じた。
例えば灰原に見られたりなんかしたら茶化されてしまいそうな仕
草だけど、ふたりとも画面を見ていて、気付いていなかったように
思う。

街にあふれる悲観主義 ドグマと呼ぶには多すぎて
だけどひとつ拾いあげたら 僕は忘れる 明日は来ること
僕が背負った十字架は 揺らくことない existence
君という存在さえ この背中で離さずいられるように
君といつまでも離れないように

明日のことなんて そのまた明日のことなんて
僕には見えないけれど

僕の目が悪いせいじゃないよね だから

夜空に消えた黒い影 イデアにするのは僕自身
だけど君の背中に届けば 僕は手にする 明日への切符
君と歩いていけるなら 僕の空には意味がある
痛みや終わりまでも いつか最後に愛せるように
君といつまでも離れないように

君といつまでも
きつといつまでも

途中からすっかり黙っていたふたりは、曲が終わったと確認して
拍手をくれた。

ラストの部分で我に返って、光原と結びつけてとやかく言われる
のではないかと心の準備をしたが、意外にもそれは全くなく、灰原
が何かを解ったようにうなずいただけだった。

「じゃ、またあたし行きまーす」

そしてそのまま、完全に仕切り役に納まっている灰原が四曲目を入
れる。

俺と対馬はしばらく拍手を送っていたが、ふと対馬が歌本をめく
り、ねえねえ、と隣にやってきてあるページを俺に見せてきた。

「これ、小五のダンスで踊った曲。覚えてる？」

小五の夏休み明けに俺のいたクラス（貴司はその時は別だった、
ちなみに翌年は三人一緒）に転入してきた対馬の坂下小学校で最初
のイベントが秋の運動会だった。正直その時まではまだ転校生の扱
いだったが、その運動会が終わったところにはクラスにもなじみ、そ
の翌月の席替えで同じ班になって色々と話すようにもなったので、
俺の意識としても対馬は変わったような覚えがある。

「覚えてるよ」

「歌える？」

「歌おうよ」

俺と対馬がそんな会話をしていると、マイクを通した声で灰原が割り込んできた。

「ちよつとそこ！ いちゃついてないで半分ぐらい聞いてよお！」
聞いて、俺は笑った。三人でカラオケつてのがちよつとだけ無理があつたんだよな、と思った。

対馬はまた灰原の隣に戻った。聞いてるよお、と言いながら。
あんまりやりやすい状況ではないけれど、気を遣われたのかな、
と思つてなんだか悪い気がしたから、もう思い切り楽しんでやることにして対馬が持ってきた曲の他にもう一曲、予約をした。

結局時間いっぱいまで遠慮することなく思い切り歌った。一番歌つているのに声の勢いが変わらない灰原にもやたらハイトーンボイスが出る対馬にもびっくりした。

そしてカラオケボックスから出た後、もういい時間になっていたのですねにファストフード店に入った。カラオケボックスの会計でもぼつちり仕切っていた灰原がここでもてきばきと三人分の注文をとり、金勘定をした。まったくもって頼もしい奴だ。

レシートをあらためながら歩く灰原について、俺と対馬はトレイをひとつずつ持って二階に上がっていった。一階はほぼ満席だった。二階の人影はまばらで、そのぶん少し広く感じられた。

「あそこにするね」

導かれるままに窓側の席にトレイを置いて、座る。

さすが灰原というべきか、それとただの偶然か水道も近くて、
明るいのにも差さないいい席だった。近くに人もいない。

手を洗った後、三人でハンバーガーやらポテトやらをぱくつく。
一番しゃべっているはずなのに灰原は食べるのも早くて、その上対馬はあまり注文しなかったので普通に食べているにもかかわらず俺が一番食べるのに時間がかかった。

「ねえ斉藤、結局私、あの曲の意味わかんかった」

「俺もあんまり、考えてなかった」

対馬がちよつと、とおそらくトイレに立つと、灰原は少し声のトーンを落とした。窓の外をじっと見ている。俺はその灰原の、机の上に置かれた手をじっと見ている。

「ねえ、朝言つてたことなんだけど」

「何？」

「ほら、『好きって、どういうことだ』ってやつ。私ちよつと考えてみたんだ」

いつ考えたんだ、なんてつつこまない。相槌も打たないで、ただうなずいた。

「“好き”ってのは、相手に惹かれて、その人と一緒にいたい、その人をもっと知りたい、って思うことなんじゃないかな……」ってのは、ダメ？」

「いいと思うよ」

「それですつと一緒にいられて、その人のことは少なくとも自分がある程度満足するまでは知った、ってなったときに、まだ惹かれてるか、ちよつと冷めちゃうか。惹かれてたら、それが“愛してる”」

灰原にしてはかなりまともな意見だ、なんて言ったら蹴られるだろうか。

「灰原は貴司のこと、“愛してる”の？」

「まだわかんない。多分違うよ。だってまだまだ知らないことあるし、今はまだ“大好き”かな」

いや、きつと蹴られないだろうな。今なら多分、冗談で流してくれるだろう。

ふふふつ、と笑った灰原は、じゃあ、と続けた。

「斉藤は澪のこと、“好き”なの？」

本日二度目のこの質問。俺が一瞬たじろぐと、ドンピシャのタイミングで対馬も戻ってきた。

「さあさあ」

対馬も状況が飲めた様子で、黙ったまま座ってストローをくわえた。

「なあ、答えなきゃダメか？」

「当たり前でしょ。それじゃあ何のために今日こうしてるかわかんないじゃない」

結局、そういうことなのか。

「解らないんだよ」

今朝未来に出したのと同じ答えを、俺は出した。当然灰原は食いついてくる。

「一緒にいたい、とか知りたい、とか思わないの？」

「お前の案を採用するわけじゃない」

「でもキライなわけ、ないでしょ」

対馬が口を挟む。当然俺は、そこには同意する。

一瞬三人とも沈黙した後、灰原がもうひとつ、質問をしてきた。

「斉藤が持つてるなんとなくの感じでいいから答えて。じゃあ、好きじゃないの？」

俺は多少、はっとした。

「逆から行こうよ。好きじゃない、って言い切れないなら、もう好きなのかもしれないでしょ？」

灰原はそう言い放って、挑戦的に俺の目を見ってくる。対馬は黙ったままで、少しだけうつむいている。

核心を突かれた気分だった。

光原。光原、遷。

背が高く美人のクラスメイト。初めて話してからひと月半、今はすっかり仲もいい。

熱を出したら、見舞いに来てくれた。俺の料理も、ほめてくれた。呪いの噂がある。何よりも本人が、いちばんそれを信じている。

でも、気丈に振る舞っている。けどそれもたまに、崩れそうになる。

よく謝る。よく礼を言う。そして最近、よく笑う。

かたく目を閉じながら一瞬、首だけで天を仰いだ。

閉じたまぶたの奥で、光原が切れ長の目を細め、優しく笑った。

あの笑顔は、少なくとも好きだ。そして多分、つまりはそういうことなんだろう。

「好きじゃないわけ、ないじゃんか」

それを聞いて灰原は、少し表情を緩めた。そして、だけど聞いて、とまた口を開く。

「漣はね……ほらあの娘、あの通り必要以上にカワイイからさ、その……浪野にも告白とか、されてたんだって。あんまりしゃべってはくれないんだけど小学校の高学年になってからいなくなっちゃった、って言うてる人はみんな、そんな感じみたい。それで結局漣がいちばん、それも何度も傷ついてきたわけでしょ？ 私たちだってそれを目の当たりにしたから、今日こうして斉藤を呼んだの。でもね……なんだか心配ない気もした。好きってなかなか言えなかったのは、漣のことまでちゃんと、考えてるからかも」

言い終えて灰原は、ごめん自分でも何言ってるかわかんない、と謝った。

別にそんなことないよ、ありがとう。俺はそう礼を言う。

対馬はとうとう口を開かなかったが、どことなくいつもより優しい顔をしていた。

ファストフード店を出ると、灰原が服選ぶから付き合っ、というのでなんとなく同意してついて行った。

灰原は俺や対馬に意見は求めるがあまり聞き入れる様子はなく、少し引き回されている感もあった。

「そちらさんはどうですかあ？」

灰原がさつさと別の売り場にいつてしまいふたりで追いかけようとしたところで、くるくるした茶髪の店員に捕まった。

「いや、私は今日は……」

「付き添いですかあ？」

「まあ……」

俺はよくぞまあこんなに巻いたものだとその店員の髪の毛を眺めていたが、店員が俺のほうにも話を振ってきたので少しうろたえた。「そちらのお兄さんはあ？」

「俺もその、付き添いで」

まあ若い女性用の服しか置いていないような店だし、少し冷静になれば俺は浮いている。

「三人さん、どういう関係なんですかあ？ お友達？」

「いや、子分みたいなもんです」

えー、と言つて店員は笑い、なんとなくの流れでようやく俺と対馬は脱出を果たした。短い時間で、ひどく消耗した。

気付くと灰原を見失つてしまつていて、俺と対馬は適当にしゃべりながら探した。

「こういうとこの店員つてみんなあんな感じ？」

「いや、あの人はちよつと極端だったかな」

売り場を覗き込んだりきよきよしたりしながら対馬は灰原を探している。相変わらず眼鏡をかけていないその横顔にちよつと思ふところがあつたので、尋ねてみた。

「なあ、対馬つて最初、あんな感じのしゃべり方じゃなかった？」

えー、と驚くような表情を見せて、対馬は答える。

「私あんなに語尾伸びてなかったよ？」

「いや、語尾じゃなくてアクセントが関西系だったつーか」

対馬は少し首を傾げ、考えるようなしぐさを見せてから言った。

「でもうち、おったん広島やから、やっぱりちよつとちゃうわ」

「それだ！」

「いや、ずっとこつちにいて直つちやつたから、なんか違うかも」
もう一度首を傾げて、対馬は少し頬を染める。

よく解らないけど、隣を歩く対馬がやけに小さく感じられた。

「んもう、ふたりして迷子にならないでよ！」

「物言いがベタ過ぎるぞ」

右手に紙袋をひとつ提げた灰原が、程なくして見つかった。結局ぐるっと回って、すぐにもとの売り場に戻ったというのが本当のところらしい。

そして少し早い時間のようにも思えたが、そこで三人別れて帰った。

帰りぎわ対馬が「あの曲、CDで持ってるなら貸して」と言ってきたので、わかった、と返しておいた。

「おかえり」

「おかえんなさい」

家に帰ると何故か未来と一緒に貴司がいて少しどきつとした。

「おう、帰ってきたか。ちょっと走りに行こうぜ」

貴司は完全にそのつもりで来たようで、かなり動きやすい格好をしている。

未来としゃべっていたのだろう、貴司は食卓にいて未来はソファにいたが、食卓にはカップがふたつ置いてあった。

「わかったよ」

一応陸上で長距離なんかやってるから夏休みだからといって全力でサボるわけにはいなくて、できるだけ体力を維持、強化しなければならぬ。まあ弱小の部活なのでグラウンドもあまり占有できず、学校に行つて練習してもどうだか、というのもあって、集合をけられれている日は少ない。だからまあ自主性に任されているという言い方もできるが、体力が落ちるとサボったのがばれるので、昨日の夜も実は少しだけ部屋で、腹筋を試みたりしていた。

着替えて準備をし、カップ片付けとけよ、と未来に言つて貴司とふたり、玄関を出る。

足回りを軽くストレッチしている間に、貴司は口を開いた。

「きょうは おたのしみ でしたね」

「なんだよそれ……っーか、知ってるのかよ」

「まあね、発案が俺だから」

ちよつと驚いたが、何とか抑えて表には出さずにおいた。

「で、好きって言えた？ ちゃんと」

「何がだよ」

「光原さんのことだよ」

ストレッチが終わって、貴司はその場でびよんぴよん跳ねている。

「誘導尋問気味だったけど、ちゃんと言っただよ……多分」

俺が言つと貴司はそうか、と安心したように言つて、走り出した。
俺もそれに続く。

しばらく走つて水分補給をしている時に、俺は聞いてみた。

「結局何のつもりだったんだ、今日は」

「凜が、お前が光原さんのこと好きなのかどうか気になる、ってメールで言ってきたから、俺は直接聞き出しちまえ、って返した。で、そこからはトントントン決まって、今日に至った、ってこと」

買ったペットボトルを半分弱飲んでポケットにしまおうとして、
やつぱ入んねえ、とぼやきつつ貴司は明快に答えていった。

「未来ちゃんにも聞かれたぞ？ まあ確信はないけどそうかもね、
ぐらいにしといたけど」

「助かる」

「まあ次は夏祭りらしいから、明後日だな。帰った頃か夜にまた、
メール届くと思うぜ」

俺も光原さんも、その時はちゃんと集まるだろうから、と貴司は
つけ加えた。

貴司はまだ何か言いたそうにしていたが、俺は行くぞ、と走り出した。

6・僕だけの気持ち (The easier it is, the harder

前半戦終了。見放さないでください。乗りがかった船です。

7・わたしたちの“友達”(You are my friend, but

生まれたときからこの町に住み、引越しもしたことがない俺にとつて夏祭りといえば今日集まることになっている学校の近くに位置する沢ノ橋神社の夏祭りしか知らない。もともと大きな神社で、これぞと言わんばかりの山に森が隣りあっていたりする。年に一度この時期に開かれる祭りではあるのだが何のための祭りなのかまともに知る人はほとんどおらず、ただ祭りとなるとどこからこんなにというくらいたくさんのお店と人が集まってくる。

光原の家から向かうと我が家の近くを通ることになるから誘って一緒に行こうかとも思ったがなかなか連絡をとるふんぎりがつかず、結局今、未来と一緒に自転車をこいでいる次第だ。

「ねー和也、自転車つて置くところあるの？」

「ちよつと離れたところなんだけど、公園つつ切れれば近いから」

未来は現地で友達と合流するらしい。こんな時までつれて歩くのもどうだかし、まあよかった。

おおかた普段学校に行く道すじをたどり、途中で曲がって公園に隣接する自転車置き場にたどり着く。予想通り空いていて、楽に置くことができた。

がちゃん、とスタンドを立て、抜いた鍵をポケットに押し込む。

俺はＴシャツだけを変えたいつものジーンズ姿で、未来は今日は珍しく白を基調としたスカートをはいたりしている。いつもよりちよつと落ち着いて見えて、そうかたつたふたつしか変わらないんだよな俺と、なんて思ったりしていた。

そして公園をつつ切って進み、待ち合わせ場所である外側の鳥居の下につくと黒い浴衣姿で灰原が立っていた。長めのセミロングといった長さの髪を結い上げて、すっかり和風に仕上げている。

「おす、またお前だけか」

「そうねえ。そちらは？」

妹の未来だよ、友達と待ち合わせてるらしいんだけどここまでは一緒に来たから、と軽く俺が説明すると、未来は黙ったままでおっかなびつくりお辞儀をした。

「妹？」

「うん」

もう一度聞かれた俺が短く答えると、灰原は未来のほうへ寄っていった。

「やーん、かわいい。ホントに斉藤の妹お？」

俺に向けたのか未来に向けたのかよくわからない冗談めかしたその問いに未来は俺にもなかなか解らないくらい微妙にむすつとしたが、灰原に頭を撫でられてそれもすぐ笑顔に変わった。まったくこいつ、いくつになっても好きなんだな。

「えー、何年生？」

「中三、です」

えー落ち着いて見える、高一でもタメでもいいよお、と意味不明の譲歩をしながら灰原は未来から手を離し、俺のほうに向き直った。「遅いわねえ……」

そこで未来はあたしもう行くから、と逃げるように行ってしまった。正直賢明な判断だろう。

お辞儀を繰り返しながら去っていった未来を見送って、俺は言う。

「今日はみんな来るんだろうな」

「今日はさすがに、ね。でも貴司は、私と」

それって残るメンバーは、と俺が聞くと、大丈夫よお、と灰原は笑う。

「男ひとり女ふたりはきついつてこの前体で覚えたばかりなんだが？」

「貴司が事情を話して児玉くん呼んでるみたいだから……あつ来た」

亮が？ と俺が聞き返す前に灰原は身を乗り出して手を振った。

結構突拍子もない話のような気もするが、何食わぬ顔で亮は現れた。「ちやーす」

「おう」

「あれ、まだお前らだけ？」

どこことなく面倒くさそうな感じで頭をかきながら亮は言う。顔は格好いいのに本人にその気がないのが残念よね、というのが灰原の弁で、一歩間違えればモテそうなのに今日も髪はボサボサだ。

「そう。もう来ると思っただけど……」

そんなやりとりから少しして、気まづくならないうちに浴衣ではなくいつもの格好をした光原と対馬が一緒にやってきた。対馬は今日は、眼鏡をかけている。灰原は濡が浴衣じゃなくて残念ね、と俺の耳元で言っ、ふたりに呼びかけた。

「おい、ふたり一緒に来たの？」

「うっん、そこで会ったの。私はバスだし」

「混んでなかった？」

「混んでた」

そんな会話の後、結局そのまま灰原を除く俺たち四人は出発させられてしまった。光原と対馬は亮が来るということは知らされていたようなので、少し戸惑ってはいたようだがすぐに状況を飲み、空気を読んで出発した。

四人並んで雑踏の中、出店を見ながら歩いていく。

「でも、どうして兎玉くん？」

「貴司にうまく使われたよ。らぶらぶしたいだけなんだろう？ ま、別に誰かと行く予定は無かったからいいんだけどさ」

光原と亮がそんな会話をする。ふたりは小中と同じ学校に通ったはずだが呪いの件もあってもともと仲がいいとは思えない。だけど亮は人がいいし、貴司が連れてきて相談まがいの話をした時そこまで呪いを怖がっている素振りもなかったから、その辺を感じ取ってどこことなく話しやすいのかもしれない。

でもやっぱり、光原も明るくはなったのかな。

「どしたの斉藤くん、難しい顔してる」

そんなことを考えていると、対馬がちょっと顔を覗き込んで尋ね

てきた。

別に何でもないよ、と答えると、対馬はふうん？　と曖昧な相槌を打つ。

「ねえ冴、わたあめ食べようよ」

そしてそのままその光原の呼びかけに応じて、対馬は行ってしまった。

それを目で追ってから、次いで歩き出そうとした時、つんつんと肩をつつかれる。亮だ。

「なあなあ、お前どつちかと付き合ってるの？」

「ねーよ。つーか何でそんなこと聞くんだ」

「だってありえねーじゃん」

亮はそう言って少し大げさに笑い、また言った。

「お前、意外とモテるのな」

「それもねーよ」

「いや普通はさ、灰原の身勝手でお前ら三人になるんでさ、それで俺が入るつつつたら、お前に警戒心抱いてたらいくらかは安心するもんだろ？」

そんなものだろうか。まあ俺は少なくとも安心したが。

「でもあいつら結構戸惑ってたじゃん。それ、お前が安心できるってことじゃないの？　モテてんの、それ」

「いや、でも」

「なあ、俺バツクレていい？　あそこに友達いるからさ」

そう言って亮が軽く指さした先には、なるほど学校で見たことのある顔がいる。多分亮のクラスの奴だろう。でも、だけど。

「呪いが怖いからか？」

「ちげーよ。俺、差別っぽいのが嫌いだし、しかも大丈夫だってのはお前が今証明してくれてるだろ？」

そう言って、亮は一瞬ウィンクした。自然な流れの中でウィンクができてしかもそれが許せるのはこいつぐらいのものだろう。

「しかも俺、彼女いるしさ」

「嘘だろ？」

「嘘だよ。じゃあ楽しんでこい」

飄々と亮は行ってしまった。しばらく目で追っていたが、友達の集団に一瞬で馴染んでいる。光原とも普通に話せていたけど、でもやっぱり何か、あの中でのいるほうが楽しそうだ。これで、よかったのだろうか。

「「斉藤くん」」

わたあめを手にもったふたりが俺を呼ぶ。

「あれ、児玉くんは？」

「友達いたからって、行っちゃった」

俺が言くと、光原はふうん、と言い、対馬は首を傾げた。

「なんか、よくわかんなかったね」

せめてもう少し焦ってもらえないだろうか。くそう、貴司と灰原がいたら絶対合流してやる、なんて思いながら、再び歩きだしたふたりについて行った。なんとかうまく、真ん中は避ける。

絶対こういうの、性に合ってない。

それからしばらく、三人で出店を回った。

ふたりはノリノリで射的をして結局うまくいかずに、俺もやらされたけど当たってもギリギリで倒れないというかえって大人の残酷さを痛感させられる結果に終わったが、やけにふたりは喜んでいて、そして俺はフランクフルトを、ふたりはかき氷を食べて、「どうして私はブルーハワイか」とか、「なぜりんご飴はあんなに食べにくいのか」とかいう本当に他愛のない話をして、だけどやたらと俺も楽しかった。思っていたより光原がはしゃいでいた気がして、少し意外に感じた。

「さあて」

三人とも食べ終えて、座っていた出店の切れ間から俺は立ち上がった。

「そろそろ引き返す？」

事実、進んできた方向の出店はひと通り見て突き当たりに来ており、全て回ってみるにしてももうやめにするにしても引き返すべき所まで来ている。

そうね、と光原が言う。ふたりも立ち上がって、歩き出す。

この状況から逃げたかったわけではないが、貴司いねえかなあ、と探していた俺は、知らず知らずのうちにふたりの半歩先を歩いてしまっていた。

事件は、その時起こった。

向こうからやって来た大学生くらいの集団と、俺たち三人は少し交錯した。

大丈夫かな、とふたりのいる左うしろを振り返ったその瞬間、腹のあたりに衝撃が走る。

その衝撃は痛みとなつて手足の指先まで突き抜けて、息が詰まつてできなくなつた。

俺は激しく咳き込みながら、さっきとは違う出店の切れ間に駆け込み、そしてへたり込んだ。

ふたりとも思い思いのことを口走りながら駆け寄ってくる。

「斉藤くん、斉藤くん？」

「どうしたの、ねえ……ねえ？」

もう少ししてやっと衝撃が収まる。まだ多少息は切れたままで、俺は答えた。

「多分みぞおち、突かれた」

自分でもまさか、と思つた。

「さっきの人たちかな」

光原が語尾を上げずに聞く。俺は解らない、と答える。

「大丈夫？」

「……もう、平気」

ようやく完全に治まりつつある痛みを、大きく息を吐いて散らし

た。

ケーサツとかに言わなくていいの？　と言う対馬をもういいよ、と制して、俺は立ち上がる。

「私、飲み物でも買ってこようか？」

気付くと、ひどく汗をかいていた。その光原の問いかけに俺は反射的に、お願いするよ、と答えていた。

「ここで待ってて」

光原はそう言って軽く駆け出していく。当たり前だが、俺と対馬がふたりで残される。

ふうと落ち着くと、改めて「なぜ？」という疑念が湧き出てきた。どう考えても解らなくて、一瞬女ふたり連れだったからか？　なんて考えも浮かんだが、すぐにかぶりを振った。ふたりは何も、悪くない。

「ねえ大丈夫？」

ねえ、ともう一度付け足して、対馬は本当に心配そうだ。

「もう平気だつてば」

事実汗はひどかったが本当に痛みは治まっていて、その上ふたりがあまりにも心配してくれるので怒るところの話ではなく、もうこのまま終わらせてしまいたいというのはあった。

「……ねえ、落ち葉ってまだ残ってるんだね」

俺が座っている辺りを見て言っただろう。下に目をやると、半分土になっているような落ち葉が、もたれた木の根元で地面に混じっている。

「こういうところは放つたらかしだらうからな」

「そうだね」

もしかしたら対馬も、同じ気持ちだったのかもしれない。

祭りの灯りが遠く、囃子はやけに小さく聞こえる。

俺の口を動かすのは、この非日常の空気だろうか、それとも。

「落ち葉と言えばさ」

知り合って六年、あの出来事からは、五年弱だろうか。

その出来事が負い目となって、それがまだ、俺も解らないような心の奥底に引つかかっていたのだろう。

「俺、ずっと謝りたかったんだ」

そしてまたあるいは、小さな子供のようにはしゃいでいた対馬に、懐かしさを覚えただけなのかもしれない。

7・わたしたちの“友達”(You are my friend, but

作品全体としてのクライマックスというわけではありませんが、7
ゝ9章(本来1章にまとまっていた)には特に力が入っています。

力が入りすぎて文章が、特に語りが長くなりがちですがそういうものとして諦めてください(苦笑)。

「覚えてるか？ 俺が落としたあの……落ち葉とか集めたりする」

「ああ、鋤簾？」

「たぶん、それ」

それは多分、よくあるひとコマだった。

六年四組で人気のある掃除場所といえば体育倉庫で、先生もなかなか見に来ないし掃除自体も比較的楽だし、昼休みグラウンドで遊んで近いところにあるし、何より暗くていろいろな物があつて秘密基地感覚で楽しくて、じゃんけんでそこを勝ち取った班長はとにかくヒーローになった。

俺の所属していた班は通算で三回当たった。運は良かったと言っている。その中で一度、対馬と同じ班のときにも当たった。

やたら高さのある体育倉庫ははしごで上るつくりの三階まであつて、俺みたいなちよつと頭のゆるい奴にとってはそれは楽しくて仕方なかった。そしてその三階から掃除の途中、俺はその、鋤簾を落とした。

それは二階に引っかけた跳ね、下の壁に立てかけてあつた竹馬に直撃、しゃがんでちり取りを使っていた対馬にぶつかった。

珍しく真面目に掃除をしていたときのこと、それはいつも誰かがする作業だった。あれは確実に、事故だった。

ただ、その事故を起こしたのは、俺の不注意だったから。

とつさに発した俺の声で上を向いた対馬の、その鼻の上のほう、両目の間よりは、少し下。はつきり見えた。はつきり覚えている。顔に当たるとしたら比較的幸運な位置だろう。目じゃなかったし、硬いところだ。

だけど血が出ていた。少なくとも、傷にはなつたわけだ。

五時間目に大幅に遅れてきた対馬の傷には、大げさなガーゼが貼

ってあった。

「冴ちゃん、跡にならないといいけど」

誰が言ったのだろう、そんなセリフもはつきりと覚えている。

そして大げさに心配する対馬の友達のせいでなんとなく謝るタイミングを逃し、俺は今でもものうのうと、対馬の隣にいる。

「大丈夫なのに、全然」

「すぐわかる、ってことは、意識のすみにはあったんだろ」

対馬は黙ってしまったが、俺は構わず続ける。

「その眼鏡も……」

「それは、違う。跡は見てもほとんどわかんないの。だから大丈夫、そう言っただけで対馬は薄い眼鏡を外した。薄暗いというのもあるが、正直解らない。」

「そう、よかった。本当にごめん。ずっと言えなくて」

「私のほうこそ、ずっと覚えててくれて嬉しいよ。ありがとう」

そして、斉藤くんってば大げさよお、と対馬は笑う。心がすうつと、軽くなる。

なったのに。

「そうだ。見た目には多分わかんないんだけどさ、触ったら多分、解るよ。触ってみる？」

対馬はそんなことを言い出した。

「……っ！？ 触っ？」

「いやっ……いや、なんでもないの。ほらこのあたり、ちょっとだけ、ね」

大げさに慌てて発言を撤回した対馬は、少し俺に顔を近づけてまた眼鏡をとり、傷の位置を指し示した。

灯りから離れて薄暗かったからか、対馬の言う通り見たくらいじゃ解らないからなのか、結局傷跡は俺の目には映らなかった。

「慣れちゃったせいもあると思うけど」

俺が夜空を見上げながらそう口を開くと、対馬はなに？ と首を

傾げる。

「やっぱりその眼鏡、あんまりしっくり来ない」

振り向いて見た対馬の目元で、長いまつげが少ししばたかれる。でもかけないと困るときあるし、コンタクトは体質的に合わないらしくて、という返事までに少し、時間がかかった。

「ごめーん、遅くなっちゃった」

それからまたもう少し経って、光原が戻ってきた。

「こういうお祭りって、なかなか普通の飲み物って売ってないのね。ラムネならあったんだけど、冴は炭酸飲めないでしょ？」

「いいのに、私のことなんか」

「そういうわけにもいかないって」

結局外の自販機まで行っちゃったから、と光原は抱えてきたペットボトルを一本ずつ俺と対馬に手渡し、自分のペットボトルのふたも開けた。

「ありがとな。ごめん、気、つかわせちゃって」

「ん……私なら大丈夫。斉藤くんはどう？」

微笑みに少しだけ深刻な調子を混ぜて、光原は尋ねる。俺がもう落ち着いたから、と言うと、光原はもう一度、笑顔になった。

平気だよ、と示すために、すつくと立ち上がる。

目で合図して、三人でまた歩き始めた。

すぐに貴司と灰原を捕まえることができて、口では邪魔くさく言っていたけど、ふたりともなんだか嬉しそうにしていた。

それからまた、今度は五人でしばらくあちこち回り、そして誰が言い出したわけでもなくぼちぼち帰るか、という雰囲気になった。

「じゃ、またね。また多分、呼ぶと思うから」

最初と最後はやっぱり灰原が仕切って、そしてみんなも思い思いの別れの挨拶で続いた。

灰原は歩いて来れるほど近くに家があるらしく、貴司は自転車を

置かせてもらっているのだという。時間差で来たのは作戦だった、と貴司がさらつと言い、灰原に蹴られかけていた。光原はバスが出ちゃうから、と取り急ぎもう一度挨拶をして駆けていき、貴司と灰原も並んで歩いていった。

「対馬は自転車だっけ」

また対馬とふたりきりになってしまつて、ちよつとぎこちなくなつた俺は、知っているのにそんなことを尋ねたりしてみた。

「そうだよ、公園のところ。斉藤くんの自転車もあつた気がしたんだけど」

「あたり」

どちらからともなく、公園のほうへ歩き出す。ふたりきりで並ぶとなおさら、対馬は光原よりずっと背が低くてなんだか落ち着かない。

灯りの少ない公園は、だけど祭りの人の波を逃れた親子連れが遊んだりしていて、少しだけにぎやかだった。俺も、そして対馬も特に何も言わずにそんな光景を眺めながら歩いていった。

「ねえ、ごめんね、さつき」

もうすぐ自転車置き場に着くというところで、ようやく対馬は口を開いた。

「何が？」

どちらかという心配もらしてもらい、苦し紛れに昔の話もほじくり返した俺だから、どちらかという自分のほうに負い目があったつもりだったので素直にそう聞き返した。

「触つて、なんて変なこと言つて」

「冗談くらいでそんなに謝らなくても……まあ、びっくりはしたけど」

自転車置き場に着いて、ポケットから鍵を取り出して差し込み返し、ロックを解除する。

スタンドを蹴る前になんともなく後ろを振り向くと、対馬はそこに立ったままだった。

「違うの」

見たこともない複雑な表情で、対馬は斜め下を向いてうつむいていた。

「冗談じゃ、なかったの」

「ごめん。そんなに傷のこと、気にしてたんだ」

俺がおどそう尋ねると、対馬は違う、違うの、と言ってうつすくまり、顔を覆った。

「私が斉藤くんに、触って欲しかっただけ」

しばらく俺が何も言えないでいると、対馬はゆっくりとまた立ち上がった。

「対馬……？」

「私、やだ、私、わたし……」

「対馬！」

俺がそう強く呼びかけると、対馬はびくつと体を震わせた。我に返ったような表情になる。

「あれっ、私っては何言ってるんだろ」

「なんでもいい。どんな話でもいい。俺はちゃんと聞くから、だからちゃんと話してくれ」

もう一度強く言って、対馬の目を見る。対馬はさっ、と軽く目を逸らし、またうつむいた。さらに灯りのまばらな自転車置き場に、沈黙の風が吹き抜ける。

対馬が唇を噛みしめて、わかった、と言うまでに、また少し時間がかかった。

「私ね、こっちに引っ越してくるまでに三回、引っ越して転校してたの。最初は幼稚園の時で、はつきり覚えてはないんだけど大泣きしてたんだって。兵庫に引っ越したんだけど、小学校に入って半年

くらいで大阪、二年生の夏に広島。毎回お父さんは『もう引越しないから』っていうんだけど、またか、またか、って。そのたび寄せ書きとかもらってさ、お別れ会とかして……シャレにならないよね。携帯もないし、手紙書いてまでテレビやマンガの話、しないでしょ？ 年賀状とかだって一年経てば来なくなるし、本当にお別れになっちゃうんだもん」

近くにベンチがあつたので、俺と対馬はそこに座った。端と端なんかじゃないけど、電車だったら平気で人が座るくらいの距離は保っている。

「だから私ね、こつちに引越してきた時もすごいスネてたの。広島にいたのが長くてさ、ちゃんとクラスでうまくやってた。親友って呼べる友達も、いたつもりだった。でもやっぱりみんなと、お別れ」になっちゃったの」

クラスの朝の会で自己紹介をしたときの対馬のことなんてうすぼんやりとしか覚えてないけど、だんだんクラスに馴染むにつれて印象が変わっていった覚えはなんとなくある。

「お父さんもお母さんももと大阪の人でさ、関西弁に広島も混じってわけわかんないしゃべり方だったから、ちよつと私、からかわれたりしてたでしょ。それにスネてたのも重なって、もう五年生つてのも、あつたのかな。友達もあんまり……できないっていうか、ぎこちなくて。学校つまんないな、って思ったりもしてた」

少しずつ、ゆっくりと噛みしめてから吐き出すように話す対馬の表情はひどく大人びて見えて、過去を懐かしく、そして愛おしく振り返っているようでもあつた。俺の中にあつた昔の思い出にも、少しこれまでと違う色がつく。

「でも人間ってさ、そんなにずっとスネてられないじゃん。なんとかそれでも友達とうまくいくようになってさ、それでなまりも直そうと思っただけど、直そうとすると余計にまたからかわれるの。」

『男子ってみんなコドモ！』って、友達は言ってたけど」

「まあ良く聞く話だけだな」

「でも、みんなそういうわけじゃないじゃん。……十一月の席替え、私はつきり覚えてる。斉藤くんたちとはじめて、一緒の班になったの」

五、六年と担任の先生が同じだったのだが、その先生の席替えのやり方というのが少々変わっていて、男子だけ、女子だけを教室に残しそれぞれで好きに席を決めさせ、後で“対面”させるというものだった。座席によって六人ずつに班が決まるから俺はいつも同じふたりと班を組んでいた。そのふたりとは六年に上がるときのクラス替えて離れてしまったが、六年になっても二年ぶりに同じクラスになった貴司ともうひとりと、同じように一年間通した。結局のところどの班も男女別に三人のグループが出来上がっていて、組み合わせの問題だけだったようにも思う。

「で、何かのとき……給食、だったかな。私が『そんなに变かなあ？』みたいな感じで聞いたら、斉藤くんは『解るから大丈夫、直しても直さなくても一緒』って言うてくれたの。覚えてる？」

「覚えてない」

聞かれていたのなら多分そう答えていたと思う。俺の友達はおおかたどこか抜けていて人のしゃべり方なんてさして気に留めない奴らだったから、そういうことを言いやすい雰囲気もあったのかもしれない。

対馬は、覚えてないかあ……とオーバーアクションで言って、また続けた。

「ちよつとマヌケな話かもだけど、気付いたの。こういう人と友達になれば楽しいんだ、って。六年になつて同じクラスになれて嬉しかったし、同じ班にも何度かなれた。あんなこともあつたけど、本当に傷も大したことないし、斉藤くんは、ある意味恩人だから」

覚えてないのにそんな、と俺は恐縮したが、対馬はそのまま続ける。

「しばらく校区のこととかも解つてなかったから、またしばらくして同じ中学に進めるって知った時も、嬉しかった。中学では一度も、

同じクラスにはなれなかったけど」

「クラス多かったもんな」

俺の相槌にうん、と返して、対馬はさっきまでよりも少し長く、間をとった。

「でも、びつくりしたよ」

何が？ という感じで隣の対馬を見る。視界には入っているだろうが、対馬は夜空を見つめたままにいる。

「毎日話してる間じゃなくて、あんまり話せなくなってから、好きになんかなっちゃうんだよ？」

だんだん思考が重たくなってきて、焦点もなんだか合わなくなる。好き、誰が。対馬が、誰を。

俺を？

「いつからかわかんないけど、ずっと好きだったの。中学の間にもね、何度か言おうとした。でもね、違うクラスで話す機会がないってのもあったし、それに」

だしぬけに話を止めた対馬のほうをぱつ、と見ると、何かをちょっと考えているような、思い出しているような表情だった。しばらくそれを続け、俺が目を切って夜空に向き直ったところ、対馬はおずおずと口を開く。

「中学に入ってすぐな、うち、なまり直してしもたから……好きなんよ、ってのと好きです、ってのは、なんかえらい、勇気が違ってくる」

丸っこい感じのそのなまり口調は、なぜか俺の心に必要以上にりと響いて、少し俺の中身に痛みを生じた。

「直すのはさ、なんか拍子抜けするくらい簡単でね、でもそれが、そうやって足かせになった。『直さなくていい』って言ってくれた斉藤くんへの、小さな負い目。この傷と、ちょっと似てるかも」

不覚にも少し、対馬が俺に告白する光景を想像してしまった。多分、断ることはなかっただろう。

全く脈絡のないところから告白されてオーケーした、そんなことも中三のころにあった。ひと月くらいしか持たなかったし、あんまりおおぴらになつたわけでもなかったから、もしかしたら対馬も知らないくらいかもしれない。

「でもね、諦めたの。結構、最近」

だけどその想像の中での対馬は、なまり口調でやんわりと、昔のままのあの感じで話していた。

「光原のことか」

「諦めた……つもりだったの」

ちらつとまた対馬をうかがうと、今度はうつむいている。

「漑と斉藤くんが近づいて、しかも斉藤くんの口から好き、って言言葉、聞いてもね、私あんまりシヨックとか受けなかった。うすうす解つてたからじゃなくて、思えたからなんだ。“斉藤くんとは友達でいいんだ”、って」

そう言つて対馬はへへへ、と笑つた。突然だったのばつ、と顔を向けたら、この状況になつて初めて目が合った。

「告白されると、思つてた？」

「……ちよつとだけ」

「返事とかも、考えた？」

「それも、ちよつとだけ」

「聞かせてよ、それ」

せつかく考えてくれたんだから、ムダにしたくないじゃん？――

――対馬はそう言つて立ち上がり、座つたままの俺の正面に立つた。

「さて……と。ずっと好きでした、付き合ってください。はいどうぞ」

対馬は早口で言つて、やたら恥ずかしそうに顔を押さえた。俺も何だよそれ、と笑つたが、多分周りが明るかったら、顔が真っ赤だったのがバレたはずだ。

「えーと、ごめんなさい。付き合えません」
「それだけ？」

「好きな人が、いるから」

「よく言った！」

俺のその一言を、対馬はそうやってほめてくれた。
もともと大人びた顔でもないけど、につ、と笑ったその顔は、昔のままだったように思う。

「しっかし」

自転車置き場までまた戻りながら、すっかりいつもの口調で対馬は言った。

「斉藤くん、まんまと告白させちゃうんだもん。まいっちゃう」

「したくなかったの？」

「したかったけど」

言って対馬は、んもうつ！ と俺の二の腕を軽くはたいた。ひどく楽しそうだった。

「この前三人で出かけたのも、凜と木田くんの手引きだったんだよ。木田くんは斉藤くんに気持ちを決めさせるだけのつもりだったらしいけど、凜は私のこういうことも全部、知ってたから……最近凜が妙に張り切ってたのも、多分私のため」

「貴司からはそれなりに話は聞いてただけど……灰原は、もっと頑張ってたわけか。あいつらしいね」

「そうだね。で、そういうわけだから、漣に早いところ、好きって言っちゃいなさいよね」

「うん。でも、対馬は本当に、それでいいの」

一瞬で少し、対馬はしゅんとなる。またうつむいた。

「そんなこと……」

「ごめんな、ずっと気付けなくて」

自転車置き場に置いて、俺が立ち止まってそう言つと、対馬は自転車を出しながら答えた。

「でも、これでよかったんだと思うよ」

「どうして？」

「気付いてたら多分、私たち付き合つてた。でも、陽子ちゃんみたいになつてたよ、きつと」

陽子ちゃん。立花陽子。俺の付き合っていた人の名前。

知つてたんだな、やっぱり。

「そうかな」

「だって、友達だったのが告白ひとつで好きな人になんて、なれないでしょ？」

立花のことを引き合いに出されると、どうもうまく言葉が出ない。好きになろうという努力は、自分には何の意味もなさなかった。

「で、高校生になつて、漣と知り合つた。もし私と何かあったら、好きにはなつてなかったかもよ？ 本当に好きな人見つかつて、よかったでしょ？」

「そう……だな」

「そういうの、運命って呼んじゃっていいんじゃないの？ 斉藤くんつてば今も昔も優しいから、そういうのに巡り会えたんだよ、きつと」

対馬は言つて、自転車にまたがった。

次に会うときは、ほんとに友達だからね。

CD貸してくれる約束、忘れないでね。

帰る方向は同じはずで、それからすぐに俺も帰つたのに、その対馬を見かけることはなかった。

8・わたしたちの“友達”(Even if you are only my

サブタイトルが変わらず3つ連続するのはそれぞれ考えるのが面倒だったわけではなく、かなり気に入っているフレーズなのでこれ以外をこの場面で使う気がしないだけです。多分。

その証拠に、これらの英字部分が実は一番時間をかけてます。いろいろ考えたあげく原案に戻したという始末で空費された時間が。

9・わたしたちの“友達”(Distance)

家に帰ると、すでに帰っていた未来が出迎えてくれた。

「おかえり、和也。遅かったね、どしたの？」

「ん、別に」

そんなころ、ポケットに入れていた携帯が鳴った。

取り出してみると、亮だった。

前に番号とアドレスを交換したきりになっていたから、連絡をとるのは初めてになる。

「もしもし」

「あ、俺だ。児玉だ」

「うん、どしたの？ 謝罪？ 俺あのあと結構大変で……」

「悪いことしたなんて思ってたねえよ！ それより、さ」

そこから少しもったいぶって、しばらくしてから亮は言った。

「俺さ、あの後浪野、見かけたんだ」

えっ、と俺は言葉に詰まる。

「そのことについてちよつと話したいからさ、明日会おうぜ。できれば貴司も呼んでさ」

「ああ……そうするか」

どちらにしろ殴られたことも伝えておくべきだろうし、俺は同意した。

さほど遠くに住んでいるわけではないのだろうが互いの家はわからず、話し合いの結果またしても佐野塾の前で待ち合わせることになった。

用件を済ませるとすぐ電話を切って、ソファに座りこむ。

頭の中がごちゃごちゃしていて、体がひどく疲れていた。

「あ、そうそう和也」

未来の呼びかけに俺は、ああ、とくぐもった声だけで応じる。

「あたし、明日澪さんちに遊びに行くよ」

俺の脱力感を感じとるでもなく発せられた未来のその返事を聞いてやっと、明日にでも光原に好きと伝えようと思っていた自分の決意を思い出した。

ちよつとのこととで萎えてしまいそうな気持ちなのに、何もかもが俺の邪魔をする。

翌日、昼過ぎ。

「おす」

俺が佐野塾に到着したときには、貴司も亮もすでに来ていた。

「こうやって集まったのに、なんかうきうきしねーな」

「まあ、な」

そんなベクトルが下向きの雑談をしばらくした後、おもむろに亮が切り出した。

「多分、見間違いないと思うんだ」

「どんな感じ？」

まるで名前を口にしてはならないかのように、遠回しに遠回しに話が進む。

「怪しかった。人相は変わってなかったけど、表情が陰しくて、しかも制服着てた」

「連れは？」

「俺が見た限りでは、いなかったよ」

話が終わってしまわないうちに、俺も切り出した。

「俺、人混みに紛れたとき、誰かに腹、殴られた」

ふたりがひどく驚いたような顔をこちらに向ける。はあ？　へ？　と声もあげた。

「ど、どんな風にだよ」

「わからない。相手は見えなくて、すれ違いざま、って感じだった」
「大丈夫なのか？」

「みぞおちだった。完全に入ったけど、休んでたら落ち着いた。だ

から対馬と光原は、少なくとも知ってる」

そうか、と貴司は言う。

「あんまり結びつけて、考えたくないな」

亮も最低のトーンで、そんなことを言う。

「でも制服の奴は、見なかった気がする」

「だけどそれも、確実じゃない」

貴司がなぞるように言った。

ふたりはそれから、ひたすら何かあったら言う、何かあったら言えと繰り返した。

半分はそんなことはないと思っているのだろうが、きつともう半分は、本気で言っているのだろう。

正直、ありがたかった。

呪い、という言葉の口に出してこなかったこともやっぱりありがたくて、だけどその意味を思うと少し、心がチクツと痛んだ。

「なんか暑くね？」

「まあ小学生じゃないんだし、外で立ち話つてのはなかったよな」

ふたりがそんなふう話題を変えて、心と雰囲気少し晴れる。

「パーッと遊びに行くか」

「ごめん俺、金欠」

祭りでいらない見栄でも張ったのだろう貴司がそんなことを言うて、亮とふたりでツツコむ。わりいわりい、と軽く謝る貴司は、いつも通りの憎めない貴司だった。

「平日だから、カラオケだったら安いんじゃない？」

「でも、移動はチャリな」

「どんだけ使ったんだよ」

そんな感じのやりとりの一方で亮にどつかれている貴司は、俺と亮の注意をそらすようにあつ、と言った。

「手口が古くさいぞ」

「違っつて、マジだよ。あれ、光原さんと未来ちゃん」

未来ちゃん？ と尋ねる亮に、ああ妹だよと答えていると、貴司はおーいおーいと向こうに手を振っていた。未来がそれに気付いてふたりはこちらに歩いてくる。

「タカシさん、和也も。どしたの？」

「ん、ちよつとな」

俺がそう答えると、未来は光原に少し耳打ちした。

「えーと、あの、あのね」

未来の知恵入れか、それに応じて光原が口を開いた。

「これからうちでクッキー焼くんだけど、来ない？」

見ると、そのための買い物帰りだったらしくいろいろ入ったスーパーの袋を手に提げている。

光原は言い切ると、もともとみんなにあげるつもりだったんだけど、焼きたてもおいしいし、と付け加える。

貴司と亮に目配せして否定の表情が見られなかったので、お言葉に甘えることにした。

「なあ、光原性格変わった？」

光原の家に向かって歩き出すころに、亮がこつそり俺に尋ねた。

「本当は、ああいう奴なのかもしれない」

俺がそう答えると、亮はほおー、と間延びした返事をして、二度うなずいた。

未来に手招きされて、俺と亮も急いで追いかける。

さっきまでの不穏な話はどこへやら、会話をひたすら楽しんでいくうちに光原の家に着いた。

「じゃ、やりますか」

「よーし」

光原と未来はエプロンを身にまとい（あ、未来がしてるエプロン、この前俺にくれたやつだ）、キッチンでそう気合いを入れる。

俺はカウンター越しに中を覗いていて、貴司と亮は食卓のイスに座

って体をこちらに向けている。

「光原はさ、よくこういうこと、するの」

「いや、あんまり。冴とは二、三回したことあるんだけど」

俺の質問に答えながら、光原はボウルを取り出している。

「未来ちゃんは一？」

いつの間にかすっかり馴染んだ亮が、例の間延びた声で未来に尋ねた。

「んー、しますよお。和也が。あたしは助手」

あ、バカ。それは言わないようにしてたのに。

「へー、お兄ちゃん優しいじゃん。すごい」

亮がニヤニヤしながら言う。

いや俺はその、と言いつつ訳を始めようとしたが、光原が口を開いたのでそれは頓挫した。

「すごい、じゃあなんか困ったら助けてもらえちゃったりする？」

「零さん、ダメでしょ？ この前は和也に料理作ってもらったから今日は私が、って言うってたじゃん」

俺がまあ少しなら、と答えようとしていたのを、今度は未来がそう遮った。どうやらわが妹は、口が軽いらしい。

光原は少し頬を染めてうつむいて、後ろからは貴司と亮が好きに冷やかす。

俺が小さく舌打ちしかぶりを振ると、ふたりと未来からどつと笑いが起こった。

クッキー作りというのはそこまで見た目にこだわったり他のものと組み合わせたりしなければ意外と手軽なもので、作り始めから全工程を終えて焼き上がりの第一陣を食べられるようになるまでに合計二時間はかからない。底抜けに明るい貴司におしゃべりの未来、当意即妙に茶々を入れる亮にすっかり楽しそうな光原というメンバーだから長く感じたには感じたがそれに飽きることはなく、楽しか

った。

「……いただきまーす」

光原がいれてくれた紅茶と一緒に、シンプルな形のクッキーを口に入れる。

市販のクッキーとは違う柔らかい、焼きたて特有の感じが広がった。

「おおっ」

「うめー」

貴司と俺が口々に感嘆の声をあげる。未来は満面の笑みを浮かべ、光原は少し恥ずかしそうに口元をかいている。

「焼きたてはやっぱ、違うな。んー、居合わせてよかった。ありがとうがたや」

的を射たことを言うようで、でもどこかピントのずれた亮の発言にみんなで笑って、またしばらく、おしゃべりは続いていた。

「じゃな」

「また連絡するから」

多めに焼いたというクッキーを食べ尽くすまで会話は続いて、そしてやっとそれがひと段落したところに貴司と亮は立ち上がった。俺にそう声をかけて、光原に繰り返し礼を言い、未来にも礼を言い挨拶をしてふたりは玄関のほうへ去っていく。

結局ふたりは光原に聞かれないタイミングもあっただろうに浪野の話や俺が殴られた話には触れず、避け続けていたような感じもあった。意識していたのか無意識だったのかは解らないが、最後にそれがちよつとだけ、引っかった。

それから最後の片付けに入り、俺はやつと手伝わせてもらえた。ほとんどすることはないようなものだったけど、ボウルをゆすいで拭き、しまったりした。

そして片付けも終わり、三人でひと息つく間もなく、未来は言っ

た。

「あ、あたし自転車に来てたんだった。漣さん、帰りますね」

光原が、未来ちゃんは最初自転車に来てて、一緒に歩きで買い物に行った帰りに斉藤くんたちと会った、と説明してくれている間に未来は身じたくを済ませ、挨拶をそこそこに帰ってしまった。

なんだよあいつ、と思っていたら、光原が口を開いた。

「気、利かせてくれたのかな、みんな」

その言葉の意味を一瞬で受け取った俺は、はっとして光原を見た。光原はまた紅茶入れるから座って、と言って、キッチンに入ってしまった。

紅茶が入れられるまでの数分間、俺の胸は高鳴りっぱなしだった。光原の言ったことがあまりに積極的で衝撃だったのもあったけど、何を伝えたらいいかそれほど考えてもいないのに決意した告白のできる状況にいきなり突入してしまってテンパっていたのも、その高鳴りの大きな原因のひとつだった。

光原が紅茶を持ってきて、机の上に置く。俺は落ち着かなくてひと口紅茶を含み、まだ熱かったのですぐにまたソーサーに戻した。

俺も光原も何も言わずに、閉じられた窓の外でヒグラシだけが力ナと鳴いている。お互いに何も言いたくないわけでも、何も言うことがないわけでもない。逆に言えば、早く言いたいことを言ってしまいたいのに、その言葉が出てきてくれない、明らかにそういう、もどかしい雰囲気沈黙。

破ったのは、光原だった。

「ねえ、斉藤くん」

俺が光原の側のカップを見つめていた目線を上げると、光原は続けた。

「斉藤くんはこれまで、中学生とか小学生のときとかに、好きな人って、いた？」

必死でどう言おうか脳みそを回していたのにそんなことを聞くも

んだから、俺の思考は完全にストップし、その質問に引っ張られた。

「よく解らない。いたのかもしれないけど、はっきりしない」

思い当たる人がいないわけではない。だけど今となってはその気持ち“好き”だったのか、解らなくなっている。

少なくともその気持ちは、今、目の前にいる光原への“好き”には、勝てそうもない。

「でも」

俺がまた続けると、光原もぴくつ、と顔を上げた。

「中三のころに付き合ってた人には、“好き”、って何度か言った」

光原はあまり驚く素振りもなく、柔らかな表情のまま目で続きを促した。

「告白されて、付き合った。断る理由が見つからなくて、これから好きになればいい、って思った。ちよつと頑張つて、好き、って口に出してみた。だけど、無理だった」

「嫌いだったの？」

「嫌いじゃなかったよ。ただ、異性として好きにはなれなかった。ひと月くらいで別れて、別れてからもっと仲良くなったよ。友達として、な。すごくいい奴だった」

表情を真顔に戻して、光原は黙った。声がなくなると、とたんにヒグラシがうるさい。そしてその声が違うセミの声に変わったころ、ようやく光原は口を開いた。

「私ね、“好き”っていう言葉が、すごく怖かった。これまで呪いで消えていった男の子たちは、みんな私のこと、“好き”って言った。好きっていう言葉の意味が解つたのは本当につい最近で、それまではただ、怖い言葉でしかなかったの」

窓のあたりに羽音がして、時間を間違えているのかハトが少し鳴いた。

俺がちらつと窓のほうに目をやると、光原はまた話を続けた。

「でも私は、今回は大丈夫って思うようにしてる。斉藤くんも大丈

夫だつて言つてくれた。今の私は大丈夫だつて。だから私、今こうしてる。斉藤さんと、ふたりきりで。それがすごく楽しくて、気持ちよくて、だから今度は、別のことが怖くなった——でもさっきの話聞いて、それも消えた」

さっきの話。好きな人の話。立花陽子の話。

必死で俺が手繰っている間にも、光原の話は進む。

「だから、だから私、決めたんだ。今回は、斉藤くんには、自分から言おう、って」

心臓の鼓動が、一瞬止まった気がした。

まさか、と気持ちが生身構える。

「男の子の友達や未来ちゃんみたいに、ってわけじゃないけど、私も斉藤くんのこと、下の名前で、呼べるようになっていたい」

「えっ……」

「好きだよ、斉藤くん。……すごく」

「ええ、ああ、うん、……俺も」

おどおどしきりの俺とは対照的に光原は俺の返事にも動じる素振りはなく、さらに続ける。

「前に未来ちゃんと遊びに来たときに私、お前、って呼ばれるのが慣れてなくてドキツとするって言ったよね」

俺がひと口含んで以来手を付けられていないカップがまだ、申し訳程度にささやかな湯気を立てている。

「でもね、気付いたの。有働先生も、私のことずっとお前って呼んでる。今になって思えば、ドキツとしてたのは……斉藤くんだから、だったのかも」

「あ、ああ」

なんとも情けないことになったなあ、と思った。

だけど、それで良かったのかもしれない。好きと言われることが怖かったなんて言われたらもう、そう思うしかないだろう。

「でも明日からは、私のことも名前で呼んでね」

「わかった。俺も、好きだから。今日俺も、言おうと思ってた」

やっとの思いで、俺はそれだけ絞り出した。

何か大きく変わったものがあるはずなのにやっぱりいつもの雰囲気に戻って、いつもの笑顔でいくつか約束をした後、俺は今日のところは帰ることにした。

家に着いてすぐ、自室で貴司に電話をかける。

コールが始まってあまり間のないうちに、貴司は出た。

「おーす、どうした？」

「いや、報告しなきゃいけないことがあってな」

何だよ何だよ、と俺のものものしい口調に貴司は過剰反応する。でも俺は、いつもよりは少なくともどっしりと構えて続けた。

「俺、光原に好きって言ってもらった」

「で？ それで？」

「俺も好き、って言った」

おおおお、と貴司はやたら大きな声を電話口で上げて、その後小さく、やっとかよ、と付け加えた。

へへへ、と俺は笑う。

「で、どうするんだよ」

「明日また、改めて会う」

「会って、どうすんの？」

「決めてない。でも……」

その時は呪いのことなんて、すっかり頭から抜けきってしまっていた。

浪野のことも殴られたことも、そしてこれから先どうなるか、ってことも。

「次からは光原のこと、下の名前で…… 漣、って呼ぶ」

灰原が、貴司が、亮が、未来が、対馬が、俺にけしかけた“好き”。

光原と俺が、遠回りしながら辿り着いた“好き”。

その“好き”しか、少なくともその時は、心の中になかった。

9・わたしたちの“友達”（Distance）（後書き）

ちなみに作者として僕が一番思い入れのある人物は対馬冴だったりします。主人公でもヒロインでもなく。

その次は妹の未来ちゃん。

……ギャルゲシナリオのオファーお待ちしています（論理の飛躍）。

翌日、俺は初めてひとりでその家を訪ねた。

チャイムを鳴らすとぱたぱたと足音がして、ドアが開く。

「いらつしやい、和也くん」

「お、おじゃまします」

昨日の約束を事もなげに果たしてみせて、光原は――……いや、

澪は俺を招き入れた。

「澪」

「なに？」

俺も一度口に出しておきたくて呼びかけると、澪はいつもより力の抜けた、聞きようによつては少し甘えたようにも聞こえる声で返事をした。

「ひと晩経つてみて、どう？」

他人が聞いても解らないくらい不親切で、しかもちよつと意地悪な質問。

「あんまり実感つて、ないかな」

だけど澪は小首を傾げながら、なんでもないことのように答える。実感、か。

立花とのことはあつたけど、自分の中では他人と比べて異性とそういう意味であり縁のない生活をしてきたように思う俺としては、あんな形で澪と知り合つて休みの日にまで会うようになったこと自体まだ実感していなかったりする。だけど昨日のことはそれにもまして実感がなく、それどころかそんな大したこととも思えなくて、みんな言っていた通り、もしかしたらそれよりずっと前に、俺の気持ちは決まっていたのかもしれない。

「さい……和也くんは？」

「俺も、あんまり」

俺がそう答えると、じゅうたんに座つた澪は、そういうもののなの

かな、と言いながら両手を横について脚を伸ばし、体重を後ろにかけて天井を仰いだ。少し伸びたのかもしれない後ろ髪が真っ直ぐに背中垂れる。

昨日より少し可愛く見えたというのは多分気のせいじゃないけど、それは秘密にしておくことにする。

今日はふたりで図書館に行つて、夏休みの宿題でもすることになっている。貴司にはせっかくなのになんで、とちよつとバカにされたけど、いまはそれでいい。

あまり難しいことを考えずに、とりあえず漑に会いたかったから。

とりあえずお茶を飲みながら、漑は今日行くことにしている御崎中央図書館について話してくれた。今よりもつと土地の安い時代に地域の文化水準向上のために助成金が出たとかで建てられた図書館で、規模としては大きかったが今では多少縮小されてその部分が学習室に充てられたらしい。個別の自習室ではないからそこまで静かではなくテスト勉強などには向いてないかもしれないけど、一緒に宿題をするにはちょうどいいかもしれない、という。小さい頃に何度か行ったことがある気がするが、もちろんというか、そこまでは知らなかった。

家でやつても同じだろうに、と思つてしまう部分もあるが、多分そうした部分が漑の真面目なところで、そういうのもなんかいいなあ、と思つたりしていた。

それから家を出て、自転車での移動になった。

図書館までは意外と長くかからず、ただ普段ひとりだったり俺より体格のいい貴司とだったりでしか自転車で走ることはないから漑のペースにそれとなく合わせるのに多少腐心した。

そういえば以前単なるクラスメイトとしての漑が自転車をこいでいるのを貴司と見かけたときに、貴司は確か「是非とも立ちこぎし

て欲しい」なんて言っていたけど、今日になって何となくそれが解った気がした。車通りも少ない道を並走しながらちらちら覗くじつと前を見つめて安全運転の貼り付いた澪の横顔は、そのまっすぐな感じが何とも言えない感じだった。

「なによ和也くん、こっちはっかり見てる」

「や、なんでもないよ」

「んもう、前見てないと危ないよ」

言いながらこちらを、澪もちらりと見る。風で流れるセミロングも、なんかいい。

「わかってるって」

まあ制服だしスカートだから、貴司はただ風が吹けば桶屋が儲かる感じで言っただけだったのかもしれないが。

「和也くんは古典が苦手なんだっけ」

少し手をつけてみてやっぱり放棄している他の教科とは違い、開いた形跡もない俺の古典の宿題を見て澪は聞いた。

「うん……でも何で知ってるの」

学習室には昼過ぎの微妙な時間というのもあるかもしれないが日本の未来は大丈夫かというくらい人がいなくて、中学生と思しき女の子がひとり何か必死に本を見ながらノートを書いていて、あとは小学校三、四年くらいの男の子が三人、自由研究でもするのだろうか理科系の本を並べてつつきあいながらぼそぼそやっているだけだった。

「テストの後へこんでたじゃん。それに有働先生もちよっと、グチってた」

そういえばよく話しているんだし、朝もいつも話してるって先生も言ってたな。

「うーん、かなり早い段階でつまずいちゃったからね」

「文法がわからないの？」

「文法とか単語はぼちぼちんだけど、訳を読んでも何が言いたい

のかよくわからないって感じ」

そんな簡単な質問がしばらく続いた後でいくらかアドバイスをもらい、俺はそのまま古典に、漑は数学に取りかかった。

有働先生とはタイプが違うだろうが漑もなるとしたらいい先生になれそうで、だけどこんなお姉さんが家庭教師だったりしたら日本男児は勉強どころではないだろう。その点は、俺が保証する。

でも時間が経つにつれ、全く集中力の切れない漑に引っ張られるかのように俺もだんだん集中していつて、結局貴司の言うところの色気がない感じになってしまった。宿題が進んだからそれでいいとも思っけど。

「できたの？」

ひと段落ついた俺に漑は聞いた。

「それなり」

「わかった？」

「いつもより、ね。ありがと」

俺がそう礼を言うと漑は少しはにかんだような表情を見せた。

「あと、古文なら現代語訳で読んでみるのもいいかもね。図書館だから結構あると思うよ」

照れ隠しするように漑がそう付け加えたので、探してみるよ、と俺は言っただち上がり、閲覧室に通じる階段へ向かった。

漑はやっぱり古典が好きなのだろうか。だとしたらそれはもともたらないのか、それとも有働先生の影響だろうか。面談の時の先生の口調から言っただ、先生が漑の、ある意味でよりどころになっていたのは間違いないだろうから、きっとそうかもしれないな。

そんなことを考えながら、階段より少し前から続いている手すりに手をかけて階段を下りようとする。

中一のころにボーツとしていて階段を七、八段落つこちたのがきつかけで、手すりにつかまらないと何気なくでも階段を下りることができなくて、例えばさっき漑と上ってきた時も情けないながら手

すりにつかまってきたわいで、
下りなら、なおさらで、

どんつ。

だけどその行為にあまり意味がなかったことを、俺は思い知ることになった。

三分の一を下りきらないうちに突如背中になにかがぶつかるような感覚があつて、手すりにそわせていた手を握る間もなく俺は小さな叫び声とともに階段を転げ落ちた。

階下でうずくまる俺をすぐに職員のひとりが見つけて駆け寄ってきて、漣も階段を駆け下りてきた。

「大丈夫ですか!？」

職員のその呼びかけに俺はすぐ立ち上がり、身体の無事を確認する。

「ええ、多分」

どこでどう受け身を取ったのか痛む部分はたくさんあるが、大きなケガはないようだった。少し体をはたきながら立ち上がる。

「和也くん!？」

「いや、大丈夫大丈夫。ごめん」

駆け下りてきた漣にそう声をかけた。一瞬でひどく憔悴したような顔が安堵の表情に変わる。

周りにはまばらに人だかりができていて、俺は大丈夫です、と言ってお辞儀をした。振り向くと、安心したように散っていく人影を焦点の合わない目でただ見つめている漣がいる。

その視線の先にいた小学生と思しき男の子は、俺と漣をちらりと見て走り去っていった。

「高橋くん……?」

何か嫌な想像があつたので、漣のその小さな言葉にも、そして背

中にぶつかった感覚のことも口に出さずに黙っていた俺に、漑は「めんなんでもない、と責められていないのに言い訳した。」

それから三十分くらいをまた学習室で過ごしたが明らかに漑は集中できていない様子で、俺のほうも現代語訳の平家物語を眺めてはいたがずっと漑のほうばかり窺っていたので祇園精舎の鐘の声どころではなく、なんとなく暗い感じのまま図書館を出ることになった。弾まない会話をしながらペダルをこぎ、自転車を走らせる。

「なんかごめんね」

例によって佐野塾の前に到着し、自転車をふたりしてとめたところで漑は言った。

「何が？」

「私が誘ったから、あんなことになって」

「そんなこと言ってたら何もできないだろ？」

「でも」

「大丈夫だって。ほら俺、ピンピンしてる」

そう言っただけ俺は、手足を大げさにばたつかせて見せた。

「……ありがとう」

右の太ももが、少しだけ痛んだ。

「ありがとう、じゃねーよ」

でもそれから、じゃあね、と言った漑の心の痛みのほうが、ずっと強く俺に響いた気がした。

家に帰りついてドアを開け、いつも通り未来がおかえり、と言うのを聞いてそこですっと肩の力が抜けた。自分がそんなにもこわばっていたということに気付いて驚いていると、未来が尋ねてきた。

「ねえ和也、どこ行ってたの」

「ん、図書館」

答えながら、ソファに腰かける。ちょっと伸びをして目をやると、未来はにたーっ、と笑って言った。

「誰と？」

「み、光原と」

「ふたりで？」

「……まあ、そう」

俺が一度うつむいて、未来の顔を窺いながら言つと未来は少し肩をすくめ、ははは、と笑った。

「やっと、付き合い始めたの？」

「うん」

「好きになったの？」

「うん」

「好きって、言えたの？」

「うん」

新聞のテレビ欄を眺めながら、本当に何気ない調子でとんとんとぶつけられる質問に俺は短く答えていくことしかできなかった。

「あ、リモコンとって」

「うん」

未来はリモコンを受け取ると、テレビをつけてチャンネルを回しながら、そっか、と言った。

「俺が思ってた反応じゃないな」

「何言われると思ってたのよ」

「ほらもつと、えー本当に？　とか、とてもじゃないけど釣り合わないーい、とか」

ソファーに座る俺が足を伸ばせばギリギリ届くくらいの所に座椅子で座っている未来はぴくりとも動かず、画面に視線をとどめたままと言った。

「言わないよそんなこと。だって……お似合いだと思ったもん」

普段面白いお笑いタレントや意外と美味しかった新しいスナック菓子の話をしているときよりずっと、平坦な口調。

「そ……」

「和也は和也だけど、あたしの自慢のおにいちゃんだよ」

だからおにいちゃんはやめろ、と言おうとして、だけど軽く振り向いて見た未来の横顔があまりにマジメだったから、俺はそれきり何も言えなくなった。

そしてしばらくは夕方のニュース番組をふたりで眺めて、未来はいつものように世の中の芸能人や代わったばかりの総理大臣をおおざっぱに批評していたが、またしばらく黙った後で平坦な口調に戻って言った。

「ねえ和也」

「何だよ」

「いいこと教えてあげよっか」

俺は曖昧な返事しかしなかったが、未来は構わず続けた。

「この前和也が熱出してさ、澪さん来てくれたじゃん。で、和也寝ちゃってたじゃん」

「そうだな」

「和也が起きたとき、澪さんすぐそばにいたでしょ？」

「うん……そうだったよな、確か」

「あの時ね」

さっきのになーっ、とは違う、どこことなく楽しそうな笑顔で未来は言った。

「澪さん、和也にキス、してたんだよ」

思考停止。平静を装おうとするまでもに少し、時間がかかった。

「いやー、見ちゃいけなかったかなーって思ったし、多分澪さんは誰にもバれてないと思ってただろうし、言うべきじゃないかなー、とも思っただけど、付き合い始めたんだったら、いいよね。あつでも細かくどのあたりにしたのかとかは見えなくて残念、ドアが開いてたから廊下からね……」

確かにびっくりするほどすぐそばにいたし、ひどくうるたえてい

たと寝起きながらに記憶しているけど、でも。

俺がまたしても何も言えずにいると、ひとしきりひとりで盛り上がっていた未来はやがてまた真顔に戻る。

「本当か、それ」

ようやく俺が聞くと、未来は黙ってうなずいた。

「そっか、でも……」

「和也っ」

何故か言い訳を始めようとする俺を遮って、未来は言う。

「漑さんのこと、守ってあげてね。漑さんもきつと、“和也に”そうして欲しいと思ってるはずだから」

妹だてらに、こいつは。

言い終えて未来は立ち上がり、あたしのことも誰か守ってくんないかな、なんて言いながら階段を上っていった。

その背中を見送った後すぐ、俺は携帯を手にとって漑に電話をかけた。

明日もまた会おうよ、と約束を少し一方的にとりつけて、でも声のトーンはいつもと同じに戻っている漑にも気付いて、俺は少しほっとしながら細長い溜め息をひとつついた。

だけど、次の朝だった。

朝七時過ぎというかなり早い時間に漑から珍しくメールが来ていたことに、九時過ぎに起きて気付いた。

『朝早くごめんなさい。せっかく約束したけど、今日は会えません。ごめんなさい。また、私から連絡します』

寝ぼけなまこで文面をなぞって、意味がとれるなりぱつと目が覚めてがっくりきた。

昨日の未来との話に触発されたつもりはないのだが、とにかく今日は会いたかったから。

『うつん、大丈夫。気にしないでいいよ、また会おうね』
色々考えてみたけどそんな返事しかできなくて、そのメールにも返事はなかった。

漑を疑うわけではないが、昨日漑が口走った“高橋くん”という名前が会えないとなると気になり始めたので、『話がある』と何度か亮にメールを入れた。でもずっと亮は寝ていたらしく返事が来たのは昼過ぎだった。

『すまん、本当に申し訳ない。完全に寝てた。話つてのは、貴司も交えてしたほうがいい感じか？』

“高橋くん”について、何の確証もあるわけではない。

顔見知りの子供だと思っでしまいたい気持ちは十二分にあっただ、やはり俺は肯定の返事をせざるを得なかった。

貴司には俺から連絡するよ、と亮は返してきて、それから四十分ほどしたところに我が家のチャイムが鳴る。はい、と出ていった未来が驚くほどふたりのテンションは低くて、いつもへらへらしているぶん、俺まで参っでしまっそうになった。

そして俺の部屋に入り、三人で思っ思いに座り長話の体勢に入る。
「付き合っ始めたところなのにいきなりかよ、っで思ったよ、正直」
漑と俺のことは貴司からすでに聞っでいたという亮が、あまり景気のいい話ではないことを察知して言った。

「俺らだっで、悪い方へは考へたくない」

「俺だっでそうだよ、自分のことなんだし」

そのひと言で場をさらに暗くしてしまっ俺は、沈黙を破るためにとりあへず本題に入ることにした。

「まず亮に聞きたいんだが、高橋、っで名前に聞っ覚え、ないか？」
「よくある名前だろ、どうしてその名前が出てきたのかから教へてくれよ」

あまり間をおかずに、貴司が口を挟んだ。亮は黙っでうつむいて

いる。

「わかった、じゃあ話す」

「頼む」

亮はほとんど口を動かさず、うつむいたままで言った。

「昨日俺、漣と図書館、行ったんだ。勉強しに」

漣、というところで少しためらった俺に、ようやくちよつとだけふたりは笑った。でもすぐ、元の表情に戻る。

「まあ勉強教えてもらったり宿題したりして、古文は現代語訳で読んでみるといいかも、って言うてくれたから下りていつて探してみようとしたのな。そしたら、階段から落っこちた。人の気配はなかったけど多分、というか絶対突き落とされた」

「背中を、か？」

広げた両手を胸の前で押し出す仕草をしながら、貴司が言う。

「どん、っていう衝撃は、間違いなくあったよ。で、下まで十段くらいかな、転げ落ちた」

「ケガは？」

「右足のももを少し打ったけど、大丈夫だ。人間って、結構受け身とれるもんなんだな」

同意くらいはせめて欲しくて言ったのだが、ふたりが何も言わないので俺はそのまま続けた。

「で、職員の人も来てくれて、漣も気付いて走ってきてくれて、でも突き落とした奴は見つからなくて、でも俺まだ、っつーか突き落とされたのは今初めて話してるから、だから普通に心配してくれたただだったんだけど、同じように集まってきてくれた知らない人たちの中の、多分小学生の男の子をぼつと見つめて、『高橋くん……』って、漣が言ったんだ」

それだけ、と小さく付け加えてしばらく経って、言いにくそうに亮が答えた。

「残念だが、多分予想通りだ。高橋ってのは一応、光原の呪いが小三の時に消したことになる奴の名前だ。見た目はどんな感じだ

「たか教えてくれ」

「よくは見えないけど、三、四年生くらいだとは思った。うつろだったけど目は大きくて、ちょっと女っぽい顔立ちだった」

亮は両手で顔を覆って、大きく長く息を吐く。思い当たる節があるのだろう。

「それで、テンションは下がったけどそれからまあまあ普通の雰囲気と一緒に帰って、俺が家に帰った後で電話して今日も会って約束したときはまあ元気だったんだけど、今朝やっぱり会えないってメール入って、返事はしたけどそれっきり」

「光原さんも感じてるよ」

貴司が口を開く。

「凜も言ってたんだ。制服姿でひとり歩いてる奴を祭りで見かけた。って。そう言われれば浪野っぽかったかも、って。俺は見なかったけど光原さんが見てる可能性もあるわけだし、そもそもその高橋つてのに心当たりがあればそれだけで結論は出せる」

「だからとりあえず、自分のせいだと思って今日は断った、って、考えられる話だよな」

貴司と亮に言われて、改めて自分でも出しかけていた結論にたどり着いた。

「じつとしてるつもりか？ 昨日は『また明日』って、言ってたんだろ？」

亮は、さらに言う。貴司はいつもの笑顔に戻って、少しあごをしやくった。

「うん、でも、やっぱ……」

「行きたいんだろ？ ついてってやるよ。いなかったらいなかったで、ちゃんと用事でもできたんだ、って、それでオーライじゃん」

じゃあうん、頼むよ。亮にそう言つと、世話焼かせんなよな、と嬉しそうに言った。

「そつえばさ」

貴司が出し抜けに言ったので、俺と亮はぱつ、とそちらを見た。

「未来ちゃんには言ってるの？ 光原さんのこと。呪いの噂は知ってるんだよな」

未来はさっきまでの俺たちの異様な雰囲気のせいかやって来るどころか部屋のドアの前を通ることも多分していない。当然かもしれないし、別に不自然でもないのだが。

「付き合ってる、ってことは昨日言った。呪いとかの話は、こつちからはほとんどしてない」

初めて澁の家を訪ねた日に、俺に泣きついた未来のことを思い出した。

「ちゃんと伝えたほうがよくないか？ 不安にさせるのは不本意かもだけど、もう心配はしてるだろうし」

「そうかもしれないな。和也や光原の身のこと、もうふたりだけの問題じゃない」

強く言うふたりに、俺も強く同意する。

「じゃあお前らが光原さんち行くんなら、俺がそのへん話しくよ」「助かる」

「で、凜にも全部、今晚にでも話しく」

まだ話してなかったのかよと意外に思ったが、とりあえずは同意しておいた。

「対馬には俺が話すよ、直接」

俺がそう言ったところで三人で立ち上がり、俺の部屋を出た。

階段を下りた後でぼつとテレビを見ている未来を貴司が呼ぶ。

返事をして立ち上がった未来をちよつとちよつと、と話し込む体勢に持ち込む一方で（こういうことは妙にうまいんだよなこいつ）、俺と亮はよろしくな、と家を出て、自転車にまたがった。

ピンポン。

何を考えているのか何も考えていないのかよく解らないところは亮も貴司と同じで、到着して息つく間もなく亮はチャイムを鳴らし

た。

「おいちよつと、いきなり」

「ためらってたら何もできなくなるよ」

絶対バンジージャンプや高飛び込みが得意なタイプだろう、だなんて思っていたら、意外にもすぐにためらいなくドアが開かれた。

「はい……って、え？」

おーす、といきなりフランクな挨拶をかました亮にか、その後ろの俺にかは判らないがとにかく漑は驚いていた。

「えーと、どしたの？」

「和也が来たといって言ってたから、連れてきた」

「ちよつと、はしより過ぎだつて……ほら、いきなりだったから何かあったのかな、って気になっててさ」

漑は一気に毒気を抜かれたようになって、何やら言いにくそうに答えた。

「いや、ちよつと……何かつらかったつていうかなんていうか」

「そういうときのための彼氏じゃないの？」

「あ、えつとそれは」

「和也が来て、嫌だった？ 嫌だったなら、俺が謝る」

「別に嫌なんかじゃないし、どつちかっていうと、あの」

「じゃあオツケー、後は和也が頑張るだけじゃん」

さっきまでとはうって変わった笑顔で漑のひと言ひと言を遮りつつまくし立てる亮に完全に漑は押されていて、核心を突かれ本音を引き出され、顔も真っ赤になっている。そしてそれを気にとめる様子もなく、亮は俺の背中をばんと叩いて去っていった。

なんだか妙におかしくなって、漑とふたりで大笑いした。

天才は、意外と俺たちの近くにいます。

「入って……座ってて。紅茶でいい？」

俺を迎え入れてそう言った漑は笑顔ではあるけれどどこことなく疲れた顔をしているように見えて、やはり体調でも悪いのではないか

とも思ってたが、キッチンで作業する姿はいつもと変わらないように見えた。

もはやいつも通りといったしぐさでカップとソーサーをテーブルに置き、自分も座りながら、なんかごめんね、わざわざ来てもらって、と言った。

「どうして？」

「だって、余計な心配かけちゃったのは私だし」

「だったら俺だって階段から落ちたりもしたしさ、ほらこの前だっ
てお見舞い、来てくれたじゃん。そうめんも、茹でくれたんでし
よ？」

「うん……」

「ちよつと何か体調も悪そうだけど、大丈夫？」

漑は困ったような顔で少しうつむいた後すぐに顔を上げ、少し苦笑いした。

「児玉君があんな感じで、和也くんも来てくれたからもう、どうでもよくなっちゃったんだけど」

そこまで言ったところで髪を軽く触りながら黙ってしまふ。俺はどうも耐えられなくなって、言ってしまった。

「俺が階段から落ちたことと、何か関係ある？」

「な、いやえーと、関係、あるのかなあ。わかんない」

「高橋くん、つてのには？」

「聞いてたの？」

だんだん漑はイスの上で小さくなっていく。

「聞いてた。亮からもいろいろ聞いた」

「和也くんも、そうなんだと思ってるの？」

しばらく黙ったあと、そんな飛躍した質問。だけど意味は、はっきり解る。

「思ってるよ」

「あのね、私」

そのとき、いつか体育館裏で見たのと同じように、漑の切れ長の

目から涙がこぼれた。

「眠れなかったの。私のせいだって、思ったから……心配で、心配で！」

「落ち着いてくれ、な。俺はほら、大丈夫だから」

テーブルに少し乗り出して、そんな言葉をかけてみた。

わあっと泣き出すかと思ったが、その言葉が効いたのか湊はすぐに落ち着いた。

「昨日ね、まさか、って思ったの」

落ち着いてからまたしばらくして、湊は話を始めた。

「でも普通ならあんな風にいきなり、階段から落ちたりなんてしないよね」

「そう……かもしれない」

「和也くんが階段から落ちて、私が走ってって、大丈夫だって言うてくれたときは本当に安心したけど、高橋くんがいて、こっち見て……結びつけないわけには、いかないでしょ？」

「祭りのときは」

「見たよ、浪野くん。ジュース買いに行ったときに」

嫌な予想は、えてして当たるものだ。

「浪野くんも、こっち見てた。怖かった。昨日の夜思い出して、また怖くなった。和也くんにこれ以上、何かあつたらと思うと、私……」

白い手から伸びる長い指が、きれいに整った湊の顔を覆う。また泣き出しそうな目が、半分だけ隠される。

「大丈夫だよ」

「大丈夫じゃないよ！ お腹殴られて、階段から落とされて、痛かったでしょ？ これからもっとひどいことが起こるかもしれないんだよ？」

「大丈夫だって」

「どうして？ どうしてそんな」

「好きだから」

少しパニックになった感じの漑は食い下らない。

「でも」

「漑もあのとき、初めて話したとき、理由もないのに大丈夫って言うてくれた。どうなんだろう、って思ったけど、その大丈夫があったからこうやって、好きになれた。今では理由もある。好きだから、だいじょうぶ」

「好きって、そんなに強いのか？」

しばらく経ってまた落ち着いて、飲みごろを逃した紅茶を口に含みながら漑は尋ねる。

「わかんないよ、でも」

「でも？」

「俺の中では、好きがいちばん強い」

惜しげもなくそんなことを言ってしまう自分に気付いて、ようやくそこで俺は我に返った。

や、俺何言ってるんだろ。そう言っでごまかそうとしたけど、漑が先に口を開いた。

「好きだから、つらいのかもしれない。でも好きだから、一緒にいたいんだよね」

顔全体をほんのり赤く染めながら、はにかんだ笑顔。

好きな人の口から聞く“好き”は、多分本当に、この世でいちばん強い。

そしてしばらく、また昨日の階段から落ちる前に戻ることができた。

学校の話をして、料理の話をして、亮の話で少し盛り上がった。多分今は、それでよかったんだと思う。

「じゃあ、また明日。ゆっくり休めよ」

「ありがとう、そうするね。また明日連絡する」

まだいつもより早い時間だったが、澪は本当に眠れていなかったらしく安心したからか次第に眠そうになっていくので、四時前に俺はもう帰ってしまうことに決めた。本当はもう少し話していたかったけど、そんな思いも込めて強く、絶対、と明日の約束をした。

玄関まで見送られて門を出て、自転車に乗り込んで少し行ったあと、ふと思い立って携帯を取り出すと、貴司からメールが届いていた。

『未来ちゃんには話したよ。落ち着いて聞いてくれた。お前の口からも、大丈夫、って言ってやれよ。凜にも今晚、電話で話す。対馬さんには、よろしくな』

言われなくても思い出したろうが、対馬のことは思考の隅に追いやられていて、未来にもそして対馬にもどうやって言おうかという問題が俺の中に一気に持ち上がった。対馬には全部話せばいい。でも、何て切り出そう。未来にはただ、大丈夫だと言えればいい。でも、そんな話にできるだろうか。

そんなことを考えて帰りづらかったのと、対馬に今度CDを貸すことになっているのを思い出したこともあって、俺はなんとなく少し遠回りしてレンタルショップに寄ることにした。

自転車をとめて店に入り、アルバムのコーナーに足を運ぶ。さしてクローズアップされているわけでもないだろうからと、普通の棚に目を走らせる。

ザ・モスキートズ。

“さ”のところを探したけどなくて、そうか、と思い直してま行から“も”のところを探したけど、やっぱりなかった。シングルも、当然のごとくない。

他に目を引いたCDもないわけではなかったし、会員証もお金も財布の中にちゃんとあるはずだけど、なんだか気分が乗らなくてそのまま店を出た。

店を出てすぐに長い信号に引っかかったので、携帯を取り出してネットに接続し、検索をかけてみる。公式サイトではなく、たくさんバンドを扱う解説サイトがヒットした。

「メジャーデビュー後、すぐに解散、か……」

キキーーー……

どすん。

一瞬、黒い影が見えた。ブレーキ音が耳に残ったまま、体が一瞬、軽くなる。

視界が暗転し、周りがひどく騒がしくなった。

救急車のサイレンが聞こえる――

10・知らない空が巡る (An invisible ambivalence)

告白編も終わり、いよいよ呪いの謎が解き明かされ始めます。

その割には主人公とヒロインがいちゃいちゃし過ぎ？ …… それは仕様です。

11・固く結んだ絆は(I felt her trembling)

熱を出した時に見る、あの夢を見ていた気がする。

「気がついた？」

知らない、真っ白なベッドに俺は横たわっていて、反射的に病室にいるとわかった。

どうして。サイレン。ブレーキ音。黒い影。

「和也、和也ってば」

「うん？」

ベッドの横の丸イスに、母親が座っている。

「起きたのね。おはよう」

「……おはよう」

状況が全く飲めない俺に、母親は全部囁んで含めるように説明してくれた。

歩道で信号待ちをしながら自転車にまたがったままで携帯を見ていた俺は、無謀運転のミニバイクを避けようとしたステーションワゴンに突っ込まれた。跳ね飛ばされた俺は気を失いはしたけど奇跡的に、と言つべきかケガと言えば左肩の擦過傷、つまりかすり傷だけ。ただし携帯と自転車はもう、使い物にならない感じだという。

「結局仕事抜けて、三十分しないうちに駆けつけたんだけどね、まだ意識が戻らないんですか、って聞いたら、眠っているだけです、だって。あんたものんきなモンよね」

「だって俺、知らないよそんなの」

俺がそう言い返すと、母親はつかみどころなく笑う。遺伝子の神秘、未来に受け継がれているものがある。

「今日は検査で、異状がなければ今晚には帰れるって。なんか前がつかえてるらしくて、三時からになるみたいだけど。大丈夫だったら明日は昼から警察よ。一応話、聞かなくちゃいけないんだって」

「警察？」

「ちょっとごちゃごちゃした事故だったからね。大丈夫よ、和也は悪くないんだから。携帯とか自転車とか関係なくても、車が突っ込んできたらいきなり避けられないでしょ？」

俺が軽く笑ってうなずくと母親は、そんなに時間もかからないみたいよ、と付け加えた。

「未来は？」

「家にいる。和也の友達には自分が伝える、って言ってたから、きつとタカシくんか誰かと来るんじゃないの？ 今晚には帰れるから全然平気、とは言ったんだけどね」

真っ先に溇のことが浮かんだ。溇もきつと来るだろう。

また眠れなくなっていないといいが。

このあと朝ご飯が出て、終わったら先生がとりあえず傷のほうを診てくれるから、と段取りを説明していった後母親は、昼過ぎまではパートがあるから、と言いながら出ていった。そして去り際に、今晚には父親も帰ってくる、と付け加える。

明日からもとともと休みをとっていたんだけど、こんなことになったからね、と。

「キミ」

母親が出ていってすぐ、隣のベッドから声がした。

「キミキミ」

「……俺ですか？」

俺がそう返事をする、その声の主である三十代半ばといった感じのオジサンは、キミしかないじゃないか、と言った。四つベッドがあつてふたつしか埋まっていないのだと初めて知った。

「テレビカードいるかい？」

「え、いいんですか？」

「俺も明日には退院できるんだが、横着して買いすぎたんだ。今一枚半くらい残ってる」

オジサンはそう状況を説明したあと、ワタナベだ、と付け加えるように名乗った。

「あ、斉藤です」

「うん……斉藤くんは事故だろう？ ケガもあまりないみたいだし。俺は職場のバレーボール大会で準備運動中にアキレス腱切っちゃってさ」

言いながらワタナベさんは軽く立ち上がり、ほい、とテレビカードを手渡してくる。足が悪いんなら、と俺もすつくと立ち上がり、ワタナベさんのベッドの側でカードを受け取った。

「準備運動、ですか」

俺が軽く礼を言い終わらないうちにワタナベさんはベッドの縁に座り直した。俺も戻ってとりあえずまたベッドに乗っかる。

「準備運動というか、ストレッチの後のボール回しだね。本当に言ったよ、ブチッ、って」

「俺陸上やってるんで、そういうのマジで怖いです」

「へえ、陸上かあ」

一応高校球児だった、とぼそつと付け加えたワタナベさんは、よく見るとまあまあガタイがいい。

「まあ大丈夫だよ、まだ若いから。俺なんかもう四捨五入したら四十かあ、なんて思ってたら三日前には今度は三十六だよ？ しかもその誕生日を入院中に迎えることになるなんて」

「えーと、おめでとう、ございます？」

「めでたくないよ。ヨメももらえてないのに」

多少意外だった。そもそもまだ老け込んではいないし、感性も結構若そうなのに。

「話してる感じでは、すぐに見つかりそうな感じですけどね、いい人」

「そういうことがサラツと言えるんだったらモテるんだろうけどね」
「そんなものですか」

「人がせつかくほめてるのに」

「あ、すいませんありがとうございます」

につ、と笑ったワタナベさんの笑顔は、とても三十代には見えなかった。

「まあ準備運動でアキレス腱なんか切っちゃったらな。ただの笑いものだ」

言いながらワタナベさんはテレビをつける。俺もカードを挿して、スイッチを入れてみた。

夏休みに入って見られなくなった早い時間の情報番組で、こざっぱりした髪的女性アナウンサーが、少しのんびりした声で今日も全国的に晴れだと伝えていた。

それからしばらくして段取り通り朝食の後、笑顔のよく似合う七福神に混じっていそうな中年の医者が軽く肩の傷を診ていった。他に痛いところはないかと尋ねられたので特にないと答えたら、検査が大丈夫だったら明日からでも運動できると七福神スマイルで言ってくれたので、本当に大したこと無いのだと実感し自分の幸運さに胸をなで下ろした。しかも検査といっても事故で気を失ったから一応しておかなければならない程度のもので、引つかかることはほとんどないのだという。

階段の件といい何といい、逆に何かに守られている気分だ。

そしてテレビが三度目になる政治のニュースを流し始め、俺とワタナベさんが部活の話で盛り上がっていたころ、がちやり、とゆっくる病室のドアが開いた。

俺はちょうどドアに背を向けていて、女の子だぞ、とワタナベさんが言ったので、未来かな、と思って振り向いたが、現れたのは漣だった。

ワタナベさんと目が合ったのかよそよそしくお辞儀をしてから、漣は俺におはよう、と言った。俺もおはよう、と返す。

「未来ちゃんが昨日教えてくれてさ。でも大丈夫だし寝てるし、っ

ていうから今日にしたらんだけど……ちょっと早かったかな」

「ううん、そんなことない。ごめんね、わざわざ来てもらって」

「それ、私が昨日言ったセリフ」

漑がまなじりを思い切り下げて、吹き出すぎりぎりといった感じの笑顔になる。俺もつられて笑った。

そして母親から聞いた通りにいきさつと今後の段取りについて話してひと段落ついたところに、漑は飲み物買ってくるね、と立ち上がった。いや俺立てるし歩けるし、とついて行こうとしたが、まあ一応入院中なんだから、と俺をおさえて行ってしまった。

あー、と頭をかいている俺に、ずっと黙っていたワタナベさんが口を開いた。

「今の、彼女？」

「はい」

「大事にしてる？」

「自分なりに、ですけど」

聞いてワタナベさんは目を細めた。大人の顔だ。

「じゃあ今は、大事にしてもらったときな。明日からはまた、キミが大事にすればいい」

俺は妙に納得し、ワタナベさんを尊敬しながらも言葉を出せずにいるとワタナベさんは、ちょっと散歩してくる、体がなまって困るんだ、と言って病室を出ていった。広い病室にひとりきりになって、自分の側のテレビだけがただただ音を発している。

こういう気づかいが迷いなくできるのに奥さんはいないのか、とベッドに入り直しながら思うと、世界が少し不条理な気がした。

ほどなくして漑が病室に戻ってきた。手にはイオン飲料の青い缶がふたつ。

「あれ、さっきいた隣の人は？」

「んー、散歩だった」

アキレス腱切ってたけどもうほとんど治ってて、体がなまってる

んだってさ、と付け加えると、漑は缶の片方を俺に手渡して自分は丸イスに座りながら、ふうん、と言った。

「和也くん？」

ちよつと間があつたあとに、漑は尋ねた。

「なに」

「事故……怖くなかつた？」

どうして、と聞き返すと、漑はうつむいて黙り込んでしまう。

「いやさ、一瞬だったしさ、ケガもしてなくてあんまり痛みとかもなく、そもそもすぐ気失つたりなんかしちゃつたからさ」

あわてた俺はまくし立てるように言う。でも漑は、顔を上げない。

「違うの」

「どこが」

「呪いのことは、考えなかつたの」

垂れた前髪が目元を隠し、漑の表情はわからない。

一瞬だったんだよ？ しかも、さっきまで寝てた。怪しい奴がいたわけじゃない。つとめて明るく口に出してみた。でもやっぱり、漑は顔を上げない。

「でも私は、わたし……」

「昨日は眠れた？」

うまく形をなさない言葉を遮って聞くと、漑は少し戸惑うしぐさを見せて、答える。

「おとといよりは。……だって未来ちゃんがかすり傷だけ、気を失つただけ、今は寝てるだけ、って何度も、とにかく大丈夫だって言ってくれたし、和也くんも昨日、好きだから大丈夫、って」

「よかった。漑が俺のせいでまた眠れなくなつてたらどうしようかと思つ……」

「やめて」

さっき俺がしたように、漑は遮って言った。

「そんなに、優しくしないで」

「えーと、え？」

「和也くんがいてくれたら私はそれでいいのに、もうそんな、ごめんね、ごめんね、ごめんね、ごめん……」

言いながら漣は、やっと顔を上げた。そして俺の目を少し見てイスから下り、白いタオルケットの下に伸ばした俺の足元に立てひざでやって来て突つ伏した。泣いている。

「ごめん……泣くなよ」

近い側の漣の手を、両手を伸ばしてぎゅっと握る。形のいいすらつとした指が四本、俺の手の中に納まった。

お互いにもう何もいえなくて、また病室には控えめなテレビの音だけが響く。

にぎやかなCMの音が止まって、ちらりと目をやるとこの時間帯によく見るアナウンサーがお辞儀をした。少し安っぽく見える地方局のスタジオで、ローカルニュースが始まった。

昨日午後四時ごろ、みどり市風町の歩道で信号待ちをしていた男子高校生をハンドル操作を誤った乗用車がはねるといふ事故がありました。男子高校生は一時的に意識を失いましたが命に別状はなく現在は回復しておりけがも軽傷だということです。乗用車はその後

漣がぱつと顔を上げて目元をぬぐい、ふたりして画面に釘付けになる。その後電柱とぶつかりかけて止まった黒のステーションワゴンが大うつしになった。

——乗用車を運転していた男性にけがは無く、警察は男性の供述と目撃者の証言から対向車線から飛び出した無謀運転のミニバイクを避けようとしての事故と断定するとともに、ミニバイクを運転していた少年とみられる人物を捜索しています。しかし現在までに少年の行方はつかめておらず、ナンバープレートもなかったという証言も得られており——

「ねえ、和也くん」

そう言って画面から目を切り、振り向いた漣の顔は明らかにこわばっていた。

「ねえ」

「何も言わないで」

「和也く……」

「何も、言つな」

立ったまま小さく体を震わせている漣の目からはまた涙がこぼれていた。

ベッドの縁に座るように体を移動させ、そして裸足のまま病室のつるつるした床に立つ。焦点の合わない目で小さくかぶりを振っている漣に半歩踏み出し、両手を背中に回して強く抱き寄せた。

「和也くん……？」

「俺はちゃんと、ここにいる」

俺に二の腕を挟まれる形になった漣の両腕はそれに抗うことなくすぐに俺の背中に巻きついてくる。完全に体が密着し、肩から背中にかけて少し、涙のこぼれる感触があった。

夢いほどに細い漣の体は、だけど思っていたよりずっと、柔らかかった。

「俺はいなくなったりしないし、消えたりしないよ、絶対」

返事をしないかわりに、漣はもう一度強く俺を抱きしめる。

何もかも、漣そのものだけを見るんじゃないよ、漣が持つすべてを受け入れる準備が、俺はそのとき、できたんだと思う。

それからすぐに漣は帰った。いつまでもいてもいけないから、というのが言い分だ。

本当のところを言うともう少しでもいいからいて欲しかったし、漣も帰りたいたいというわけではなかったろうがそれはお互いに口には

出さなかったし、何より澪の不安がいくらかは消えたようだったから、まあいいか、と思えた。

明日会えるようになったらすぐ会う、と約束をして、携帯はない、と言ったら、私一日中家にいるから、なんて言いだしたときにはさすがに少しだけ驚いたけど。

澪を見送って少しして、ドアががちやりと開いた。

ワタナベさんが戻ってきたんだと思ってチャンネルを回しながら目をやると、有働先生だったのでまたもひどく驚いた。

「斉藤おはよう。くつろいでるな」

いつも通りの男しゃべりに、なぜだか少し安心した。

「ああ、えーと……はい」

「連絡もらって、大丈夫、ってわかってたけど来た。新聞にも載ってたぞ」

「ニュースでもやってました」

話しながら遠慮なく先生は隣にやって来て、よいしょ、と丸イスに座る。ジーンズだからいいんだろうんだけど、足を開くのはさすがにどうかと思う。

「ピンピンしてるな」

「まだ一応検査はあるんですがね」

「そうか、まあ大丈夫だろ」

そして先生はバッグから封筒を取り出しながら、それとな、と言う。

「古典なら間に合ってます」

「違う違う。まあ、それでもよかったんだがな」

「そ、そうですか」

先生は軽く組んだ足の膝のところに両手を片方ずつ乗せて、前に体重をかけた姿勢になった。少し距離が近くなって、もう一度それとな、と口を開きなおした。

「木田が来たんだ」

「貴司が、ですか？」

「浪野のことを知りたいってな。一昨日だ。それで取り急ぎ調べたんだが……」

先生はちよつと怒っているときにする、何やらめんどくさそうな感じの顔をした。

「転出の手続きがされていらないから資料は残っているはずなんだが見つからないんだ。私の書き込みがある指導要録は残っていたんだが、それ以上にちゃんとした資料はない。成績も全員の一覧でしか残ってなくてな、誰かが処分したのかとも思ったが……普通はとつとくものまでないんだ」

「どういうことですか」

「解らない。本当ならありえないことが起こっている。極めつけは面談だ。浪野の親と面談はした覚えがないんだが、私の筆跡で、した、と記録があつた。他の資料はもうなくて……それともうひとつ」

「まだあるんですか」

「全く同じケースがあとひとり、あつたんだ。光原だよ」

光原ですか、と俺が調子を変えて食いつくと、先生は目を一瞬軽く閉じて口の端で笑い、少し首を傾げた。先生も知ってるのかなあ俺と零のこと、と少し肩身が狭くなる。

「私は面談した覚えはないんだ。でも、メモ的なものだけ見ていくとなぜか今年も去年もしたことになる。私の思い違いかと思つたりもしたが……相手は熱心なお父さんだそうだ」

「お父さん……！？」

「おかしいよな。母親とふたり暮らしのはずなのに」

「そのお母さんも、なかなか家にいないそうですか」

「そうだよな、と先生は首肯する。」

「おかしい、おかしいよな。私には、解らない」

「呪いの噂と、何か……」

「関係はありますか、と言おうとしたら目で制せられた。」

「教師が率先してそんなもの信じるわけにはいかないだろう」

「でも」

「わかってる。その話——光原の噂と関係があるつもりで私も話したんだ」

苦虫を噛み潰したところか、噛み潰している最中の顔を、先生はした。

はあ、と曖昧に相槌を打つと先生はしばらくしてまた、今度は丸イスの後ろ側を両手で持って体重を後ろにかけ気味に口を開いた。

「私は御崎のOGなんだ。あまり言わないようにしてるんだが」

「そうなんですか」

「そう。二十年も前の話になるけどな。言わないのには、理由がある」

先生は上を向いて天井を見つめている。こういうのを遠い目というのだろうか。

「光原のことだ」

「またみお……や、光原ですか」

俺があわてて言い直したのに気付かないはずはなく、先生は少し表情を和らげてこちらに目をやり、無理しなくていいぞ、仲がいいのはいいことだ、とあごをしゃくつた。わあつ、と顔が熱くなる。

「まあ、それでだ。私がいた二十年前、一年生のときにあつたんだよ。似たようなことが」

俺は目を丸くして先生を見たが、先生は気に留めることなく同じペースで話を続けていく。

「クラスにいたんだ。同じ噂があつた子が。仲がいいって噂になった男子がな、ひとり消えたんだ。今回と同じように不可解な消え方だったのかはもう知ることはできないだろうが。でも私たちのころはそのひとりで終わってそこまでだった。噂だつて一年経って二年経って下火にもなった。でも私にとってあれは決断していい思い出でも、無視できる記憶でもない。私が光原に構いすぎるのも、そういうことなのかもしれない」

先生は難しい顔をして言い、さっきの封筒をやつと俺に手渡した。

「今はまだ見るな。それは私たちのころに出回ったもので、呪いの噂が文章にされてばらまかれたうちの一枚だ。それをどうするかはお前に任せる。だがこれだけは言わせてくれ。私は光原のこともまだ、単なる子供じみた噂として終わってほしいと思っているし、光原のことを信じてだっている。色々調べた、今でもな。それともうひとつ、万が一光原の身に何かあったら……」

「ありません。澪は大丈夫です」

せつかくさつき確かめたのにもう一度その可能性を提示されたくなくて、俺は遮ってしまった。

先生はあまり動くことなく続ける。

「強いな。お前といれば光原は安心だ」

言い切られてまた俺の顔は熱くなった。なんとまあ物怖じせず何でも言ってしまう人だ。

なんて考えているうちに先生は立ち上がり、さつさと帰っていきうとする。

「不安にさせたり不快にさせたりしたのなら申し訳ないが、今日は主にそれを伝えにきた。じゃあな、病院にいる間は一応大人しくしとけよ」

最後に、さつきのは最初はひとりで読んだぞ、と先生は付け加えて、ドアを開けて出ていった。

それを見送ったあとすぐ、俺は思い立って手に持ったままだった封筒を開いた。

中には封筒の大きさの割に小さすぎるB5サイズくらいの紙がしかも八つ折りが入っていて、開いてみるとなるほどそれらしい文章が印字してあった。

その女の子は、呪われています。

その女の子は、あなたを吸い寄せます。
その女の子に、あなたは吸い寄せられます。

呪いは、あなたを吸い込みます。

呪いはもう、あなたから離れません。

呪われたあなたを、世界は決して許しません。

いつまでも、いつまでも。

遠くへ、遠くへ、どこまでも。

いかにもひと昔前といった感じがするワープロだかタイプライターだかの粗い字体で、長くないその文章が間を開けて紙全体を使って刻まれている。コピーを繰り返したからだろうか文字はひどく読みにくかった。しかしこれが濁と同じ呪いだとなると、その呪いは昔から伝わってきた伝奇、つまり本当の、正統派の呪いではないことになる。しかも単なる思いつきの都市伝説にしてもどこことなく文章が稚拙な気がして、もしかしたら私怨かも、とも思ったが、だれどやっぱりやたらと不気味だった。

そしてその紙は、二十年という歳月を考えても必要以上に、しかもわざとらしくぼろぼろな気がして、もしかしたら先生もかつて呪いに傷つけられた過去を持っているのかもしれない、と一瞬だけ思った。

ワタナベさんも帰ってこないうちに、今度は貴司がやってきた。

次から次へと、入れかわり立ちかわりってやつだ。

「来てやったぞー」

「ヒマなのか？」

「ひでー言い草だな。まあ夏休みだからな」

「ヒマなんだな」

「夏休みにヒマな奴なんていねえよ。ヒマに見える奴でも、実は青春の無駄づかいに必死なの」

はん、と軽く鼻で笑ってやる。全身の力が抜けていく気がする。

「で、まあ来てくれたんだよな。大丈夫なのに」

「あらかた未来ちゃんから聞いちゃったから、具体的な話はもういいからな」

「そうか」

「で、これまでに誰か来たのか？」

自転車で一緒に通学することがなくなったから、なかなかふたりで話す機会もない。一緒に走りに行った日もあったけど、それも毎日じゃない。

「漑と、有働先生が来たよ」

「ふうん、結構来るねえ」

そのせいか、いつものようなテンポが会話にない気がする。貴司はなぜか少し無気力な感じで、そのことが俺に次の言葉を急がせた。「先生のところ、行ったんだって？」

貴司は少し俺の顔を見てから言った。

「行った」

「浪野のこと、先生から聞いたよ」

「そうか」

貴司の返事は、ひとつひとつがやたらと短い。

「なんだよ、ハキがないなあ。普通は見舞いって元気づけに来るもんだろ？」

そうか、そうだよな、と言って貴司は笑うけど、やっぱりその表情に力はない。

「どうしたんだよ、言ってみろよ何でも。元気づけるまでもなく俺は元気だし」

「じゃあ……なあ和也、和也はこれからどうするんだ？」

「どうする、って？」

「呪いのことだよ」

まだピンと来ずに俺がもう一度聞き返すと、貴司は随分時間をかけてから言った。

「和也自身は光原さんのこと好き、って気持ちが決まって、光原さんのほうも決まった。それをお互いに伝えもして……でも、それで終わりじゃないだろ？ まさか今回のことが呪いと無関係だなんて思ってないよな？」

「思いたいけどね」

「俺は俺なりに、噂を知ってる奴にも話を聞いてみたりして、あまつさえ先生にも話してみたりした。あの妙な紙も、見せてもらっただろ？」

受け取って今持つてる、と俺は答えた。

「どうしたら呪いは解けるのか、どうして呪いはかかるのか、全然解らないだろ？ ヒントも何も、まだない。だったらこのまま、死にはしなくても悪いことが続いていくんじゃない？」

「よせよ」

「でも」

反論しかけて、貴司はやめた。しばらくまたぼんやりした空気が流れて、性懲りもなくテレビの音だけが取り残される。

「俺さ、さっき漑と確かめたんだ」

しばらく考えて、俺は気持ちを言葉にする。

「まず聞くんだけど、貴司は俺が消えない理由は何だと思う？」

「それは……知り合いがたが違うからじゃないか？ 亮も言ってただろ、光原さんから声をかけたのは初めてだ、って」

その答えを聞いて、俺は例の紙をまた封筒から出した。

「本当なら消える奴は『吸い寄せられる』って……でも俺は、俺のことは漑が選んだ」

「どういうことだよ」

「もとから違うんだ。これまでに消えた奴よりはもっと、俺と漑の

繋がりは強いんだよ」

「でも、和也はこんなことになってるぞ？」

俺が答えをすでに用意していることを前提として、貴司は促すように聞いてくる。

「俺とのつながりもあつて漣に接することになったお前は、どうにもなつてない。亮だつてそうだ。普通のクラスメイトよりずっと、仲良くできてるだろ？ 先生も言つてたよ、噂は自然に下火になつていった、つて。だからもう誰も消えない。そんな楽天的にはいかないかもしれないけど、俺と漣がおおぴらに付き合つてたら、漣が本当は普通の人間なんだつてみんなわかつてくれるよ。そうなたときに、こんなことも起こらなくなるんじゃないかな」

貴司は中指で左目をこすりながら、口だけで少し笑つた。

「目からウロコ、だな」

「まあ確証はないんだけどな。で、漣と確かめたこと、つてのは、何があつても離れない、いなくなつたりしない、つてこと」

「でも例えば、もっと大変な“事故”があつたら？」

「何かあるごとに、俺は漣と解り合えてる気がする。だから今は、その“事故”も、まんざらじゃないんだよ。死んだりしないのが前提だけど、それは多分大丈夫」

「愛の力、つてやつか。むかつくなあ」

冗談の口調で本音を言う、いつもの貴司がやつと戻ってきた。これまでずっとしてきたように、ははは、とふたりで笑う。

「それとさ、結局俺、対馬には話せてないはずなんだけど、呪いのこと」

「ああ、それなら心配いらないよ。凜に頼んであるから。それと」
「ばん、と手を軽く叩いて、貴司は立ち上がった。

「もうすぐみんな、来るはずだぞ。未来ちゃんが連れてくるはず…」

…」

がちゃっ。

そら来た、と貴司は飛び上がったが、顔を出したのはワタナベさんで、貴司はぎょっとして小さくなった。ワタナベさんはまた、なんだかにやにやしている。

「あんまり笑ってるって怪しいですよ」

「いや、変なものもあるもんでさ、若者の集団がいるなあ、と思ったらキミの彼女も混じっててね、一度来たはずの病室の場所を忘れたって。どんだけ夢中で来たんだよ、って……おい、入っていいよお」

またドアが開いて、開いた向こうに未来がいて、対馬がいて、灰原がいて、亮もいて、そしてまた、漑もいた。

ワタナベさんの余計な演出をなじりながらも俺は五人を迎える。

みんながかける思い思いの明るくて温かい言葉と、また調子づいてきた貴司の言いぐさ。

ちよっとくらい隣の人を気にかけるよ、というワタナベさんの冗談も混じって、さっきよりももっと明るい、漑の本当に楽しそうな笑顔もあった。

漑とみんながくれたこの時間に、俺は胸が締め付けられるような温かさを感じた。

結局検査ぎりぎりまでみんないて、ワタナベさんも巻き込んでずっとわいわいやっていた。

それはもう、看護師さんがたしなめに来るぐらいだった。

別れ際に俺と漑は明日会う約束を再確認して、みんなに全力で冷やかされた。

それももう、看護師さんがたしなめに来るぐらいだった。

11・固く結んだ絆は（I felt her trembling）（後書き

余談。「すべてへ」というのがこの小説のタイトルですが、19（ジューク）の楽曲に同名の曲が存在します。

小学生の頃に聴いたことはあつたはずなので偶然ではなく、しかしそこから取ったというつもりありません。無意識というか、忘れていました。

気付いたときにはこの辺まで書き進めていたのではや変えようにも猛烈な違和感に苛まれ変えられず、どうせ素人だしとこのまま投稿、そして落選から掲載へ、という流れをたどって今に至ります。

でも権利者からの訴えがあればもちろん変更するつもりです（自意識過剰）。

12・十七年の“光原澤”(Merely because I love

そして午後五時過ぎ、退院するだんになって、母親と未来が迎えに来た。

たった半日の付き合いなのに、そして明日には退院するというのにやたら名残惜しそうに見送るワタナベさんは俺と未来に、駅前の塾で先生をしているから(どつりで俺らに混じっていられるはずだ)会いたくなったら入りなさい、そしたらうちの塾が儲かるから、なんて言ってきた。最後まで楽しい人だ。

多分行くことにはならないだろうが、会えないわけじゃない、という妙な安心感があつた。

意外と早い時間に退院できたから、と母親は帰り道に俺を警察に連れて行き、予定を前倒しして調書作成のための事情聴取を受けた。とはいってもさほど時間はかからず実質十分か十五分くらいのもので、六時台には家に帰ることができた。

家に帰ると、父親が何かごそごそやっている。

「ただいま、おかえり」

「おかえり、ただいま。久しぶりだな和也、大丈夫そうで良かった」
「うん、何ともない」

俺がそう返すと父親は、頭が良くなったりはしてないのかそれは残念、と言つて母親にたしなめられていた。

そして、たしなめ終わった母親が言つた。

「和也、いきなりで悪いんだけどね、お父さんとお母さん、明日から二泊三日で温泉めぐってくるから、よろしくね」

もう知らされていたのだろう、未来はため息をついてこちらを見て、苦笑いした。

ふと気がつくと、荷造りをしている父親は鼻歌なんか歌っている。

うちの家族には、どうも辛気くさが足りない。

夜遅くなって両親ともにもう寝てしまい、リビングで一緒に毎週見ている深夜番組を見ているときに、未来は言った。

「お父さんもお母さんも、もう少しゆっくりしてくれてもいいのね」

「でも父さん、三週間も休みとれたんだろ？」

「だけど……、と未来は口ごもって、そこで会話は途切れてしまった。」

両親ともにまだ三十代、実はハタチの学生結婚。

周りからひどく反対されて、でもその反対を押し切って結婚したのよ、といつか母親が話してくれた。

こんな感じの、緩んだうちの家族が俺は好きだ。

この環境で育ったからこそ俺は未来と仲も良くて、そういえば未来も俺と溼の背中を押してくれた。

画面を見つめてけけらと笑う楽しそうなその横顔に俺が、なぜかむやみにしみじみして感謝の念を送っていたことを、未来は知るようにない。

翌朝、ふたりで両親を見送ったあと未来が朝食をつくってくれた。フレンチトーストが作れるようになったのだという。作るというほどの手間ではない気もするが、そんなことはまあ言わない。

まだ両親のこと愚痴りながら作る手さばきには意外と危なげもなく、出来上がりもなかなかだった。

「けっこうやるじゃん」

「食べながらそうほめてやると、未来はへへん、と胸を張る。でもずんとしている。」

「どうしたんだよ、いきなり料理なんか」

「いいじゃない。こういうのは女のコの仕事なの」

「そういう考え方は損するぞ」

朝から食パン二枚分はきついんじゃないかなんて思っていたが、そんな話をしていたらいつのまにか平らげてしまっていて、ふと時計に目をやると八時半になっていた。

「和也」

「なんだ」

立っている俺の前に洗い物の手を止め、またしても本来俺のものはずのエプロン姿のままぴよこつ、と飛び出てきて、未来は言う。

「今日澪さんち、行くの」

「……行くよ」

俺がためらいがちに言うのと未来はにこつ、と笑って台所に戻り、特に何も言わないまま洗いものを再会した。

いつでも行っていていいのなら、今から行ってもいいかな。

一秒でも早く、という気持ちがあった。一秒だなんて、陸上をしているとき以外に気にしたことなかったのに。

急ぎ目に身じたくをして出発しようとする、未来に引きとめられた。

「和也、まだ早くない？」

「いいんだよ、別に」

未来は曖昧な表情で笑う。しょうがないなあ、とでも言いたげだ。そんな間がちよつとあって、俺は言った。

「行きたい、とか言わないんだな。予定でもあるのか」

「ないよ」

即答する。

「でもだって、あたしがついて行ったら思う存分いちゃいちゃできないじゃない」

「え、ちよつと、お前……」

「気、利かせてみた。えらいでしょ」

いかにも得意そうに言っただけのける未来の頭を、半分照れかくしもあって撫でてやる。

やっぱり、何とも言えない気持ちよさそうな顔をする。

「ありがとう。行ってくるよ」

「いやに素直ね……行つてらっしゃい」

車に気をつけてね、とあながちシャレにならないことを言ったが、なんだかおかしくて俺も未来も明るく笑った。

いつのまにか未来も、どこかしらでは大人になっている。

澪の家に着いてチャイムを鳴らしたが、ドアが開くこともなければ中ではたたと走ってくる様子もなく、しまったやっぱり早すぎたか、という結論に達しかけたころようやくゆっくりとドアが開いた。

「はあい」

なんとなく歯切れの悪い感じで、澪が顔を出す。

「おはよ、ごめん早かつ……」

「きやつ？」

どうやら本当に起きぬけに呼んでしまったらしく、澪はようやく我に返ったかのように声を上げた。

「あ、えーとその」

「や、ごめん。来ると思ってなかったから」

そして澪は髪をちよつと撫でついたり自分の身なり（紺のパジャマのワンピース！）と俺の顔を焦った様子で見比べたけど結局どうすることもできないまま、入って、と短く言った。

「待つててね、ちよつと」

俺をリビングまで連れていったあと、澪はそう言つて自室のドアを開けて駆けこんでいった。

悪いことしたかな、と思つたけど、そんな姿にうかつにもちよつとほだされたりもした。

少ししていつも通りの格好で澪が出てきたあと、これまたいつも通り紅茶を飲みながら病院でのことを中心に少し雑談をした。ワタ

ナベさんの話では、「一度行ってみなくちゃね」と妙なプレッシャーをかけられた。検査の時にまず簡単な質問から始めるので曜日を聞かれて、事故ではなく夏休みのせいで三日もずれた曜日を言って看護師さんを少し慌てさせてしまったと話すと澪は意外なほど笑っていた。事故の話を書かれないのに無理に合わせているんじゃない、という不安はそれで吹き飛んだ。でも、ポケットに入れて持ってきたあの怪しい紙の話だけは、どうしてもできなかった。

そんなこんなで十時を回って、お昼食べてくでしょ？ と聞かれた流れで一緒に昼食をすることになって、俺と澪は一緒に買い物に行くことになった。この前未来と行ったのと同じ感じだと言うが、貴司なら必ずこう茶化すだろう。付き合い始めから新婚さんみたいだな、と。

でもお互いにそれほど大きな趣味があるわけではないから、こういうことでも共通の話題とかそういうものがあるのはすごく嬉しいし、楽しい。

ふたりで献立を考えて買い物してふたりで作った料理はいつもと勝手が違って、お互い張り切りすぎていたのかもしれないが少し多く作りすぎてしまって、お腹いっぱいまで食べるはめになってしまったけど、それはそれで楽しかったりした。

食べ終えてテレビを眺めながらふたりで話していたが、ふとりビングのローテーブルの上に置かれていた本が気になったので見せてもらうと、最近話題になっている、ベストセラーの青春小説だった。

「へえ……こういうの、読んだ」

「キャラじゃないってこと？」

「いや、そういうわけじゃなくって」

わかってる、と言った澪の声が、妙に明るく部屋に響いた。

気をつかって明るく振る舞ってくれているのかな、と思い当たり、少し申し訳ない気持ちになる。

その本を俺が読み始めると、漑はどこからか数学の問題集を取り出して解き始めたけど、やっぱり図書館のときのようにあまり集中できていない様子で、何度も俺に話しかけてきた。会話が楽しければ楽しいだけ、心のどこかに違うものが積もっていく気がした。話したり読んだり話したり話したりしている間に四時が近くなつて、俺はふと携帯が壊れたから保証で新しいのが取り寄せられるまでの間に使う代替機を受け取りに行くように言われていたのを思い出し、その旨を漑に告げた。

「ごめん、結構ショップ遠いからさ、そろそろ帰るよ」

俺がそう言つて立ち上がると、漑は少し寂しそうな顔をした。ちくり、と心が痛む。

「そつか……じゃあ、今夜には電話できるんだね」

「そうだね」

そう言つてすぐに漑が作り直した笑顔は、さっきまでの元気な、過剰な笑顔とはまた違った感じの、いかにも作つたようなそれだった。

「じゃあ今夜、俺からかけるよ」

玄関まで見送りに来てくれた漑にそう言つて靴を履き、振り向く。またね、と言おうとしたとき、漑が突然俺のＴシャツの袖をつかんだ。

「ねえ、明日もまた、会えるよね」

「大丈夫だよそんな。約束したろ？」

漑はうつむいて、口をつぐむ。

「なあ、どうしたんだよ」

「もう少し……いて。まだ帰らないで」

こんなわがままを言う漑は初めてで、そのことへの驚きと動揺、そして何より漑を不安にさせたくないという思いで、俺はもう一度リビングに戻った。

漑は袖を放さないまま、ごめんなさい、と謝る。

いつものように明るく、謝るなよ、なんて言うことはできなかったけど、携帯なんか、いま澪といられるなら明日でもいい。

リビングに戻ったときようやく澪は袖を離して、ソファの真ん中に小さく、浅く座った。

俺はローテーブルの、さっきまでいた位置に戻る。

「ごめんね。私、おかしいよね」

「気にしないで。一緒にいたいんなら、一緒にいよう?」

今度はうまく言えた。澪はまた小さく、ごめんね、とつぶやいた。

「大丈夫?」

「大丈夫」

「何かつらいことでもあったの?」

「ううん、大丈夫」

「お母さんは、いつ帰ってくるの?」

さっきまでの反動か、沈んでしまった澪をなだめるためにいろいろと話す中で、俺はふとそんなことを聞いた。

俺じゃなくても誰かがいれば不安も和らぐだろうから、という思いだっただ。でもその言葉を聞いた瞬間、澪はひどく、ひどく絶望した顔をして、泣き出してしまった。

俺はひどくうつらたえる。

「え? ど、どしたの? なんか俺、やつちゃった?」

そばまで行って、隣に座った。どちらかは座ってローテーブルのところやソファの前にいるのが常だったから、ソファに並んで座るなんてのは初めてになるんだけど、今はそれどころじゃない。

「ねえ……ねえ!」

うつむいて両手で顔を覆っている澪の肩を揺する。しばらくしたあと、ぐちゃぐちゃの泣き顔をこちらに向けて澪はようやく、しばらく出すように言った。

「私……お母さん、いない」

驚かなかった、いや、驚けなかった。言っている意味が飲み込めなかった。

「詳しく……聞かせてくれる？」

それだけの返事をするのにも、俺はひどく時間を要した。

「お母さんは、いたの。お母さんだけは、いたはずなの」

少しだけ間があつてから、漑はうつむいたまま口を開いた。俺は横から覗き込む形になっている。

「おじいちゃんもおばあちゃんも小さいころに会ったことがある気がするだけで、他の親戚も知らなくて、里帰りとかも、なくて……でもお母さんは、仕事が忙しいからって家にいないことのほうが多かったけど、いたはずなの。でもね、和也さんと初めて話したころにね、いなくなった。連絡も、つかなくなった。いなくなったら、もともといなかったようにも思えてきた。だからすごく……怖かった」

話しているうちに漑は泣き止み、しだいに落ち着いてきたが相変わらずうつむいたままで、目もどこことなくうつろだ。

「たまにあつたお母さんへの電話もね、なくなった。自分で家のことはできるからね、そのまま毎日過ごしてた。そしたらこの前、お母さんのお給料、振り込まれてた」

見て、と電話の置いてあるチェストの引き出しから貯金通帳を取り出してきて、漑は俺に見せた。

名義人は……光原、怜。

めくったページには一週間前に、ちゃんとひと月前と同じ金額が振り込まれていた。

漑は元の位置に座り直して、だけどさっきより少し顔を上げて続けた。

「あんまりね、考えないようにしてた。でも最近、和也くんの身に悪いことが続いて、眠れなくなって、昨日もなかなか眠れなくて……」

…いろいろ考えちゃったんだ。そしたら、考えついた」

聞いてくれる？ と漣はこちらに顔を向けた。俺は黙ってうなずく。

「ん……あのね、私は呪いに生かされてるんじゃないかな、って。中学生のころまではそうでもなかったけど、高校に上がってだんだん家の中のことが自分でできるようになってね、お母さんにそういうことで頼る必要がなくなった。必要だから、お母さんがいた。今は私ができることが増えて、お金だけが入ってくるようになった」

ふと、先生に聞いた話を思い出した。

「先生は、お父さんと面談した記録が残ってる、って」

「多分その時は、私ができるだけ普通に生きていくために、お父さんがその時だけいたんだと思う。それで、つじつまを合わせるために、記憶からは抜け落ちた。知ってたはずの人が疑わなかったら、世界はそのまま流れていくでしょ？」

「そんなこと……」

「お母さんのことも言えなくて、おかしいって解ってるのにお母さんの話も普通にしてきた。私ずっと、和也ちゃんとみんなに嘘ついてたの。私、こんな私嫌い」

漣はまた少し涙を流しながら、かぶりを振ってうつむいた。

「そんな、そんな悪く言うなよ」

「でも、本当だもん。みんなにも迷惑かけて……」

「やめろよ。好きな人の悪口なんて、自分が言ってるのも聞きたくない」

漣は驚いたような顔をした。涙がまたひとつこぼれて、それっきりになる。

「今まで言えなくたって、今言ってくれたじゃん。いいよ、もう」
「おかしいって、思わないの？」

「思うよ。でも、俺も貴司も亮も消えたりしてないってことは、呪いは解けかけてるんだとも思わない？」

漣はうなずかずに、ありがとう、と言った。何もかもが詰まった、

ありがとうだった。

漣が落ち着くのを待って、俺は言った。

「俺も、漣に言えてなかったことがあるんだ。話して、いいかな？」
いつも通りのトーンで、漣はうん、とうなずいた。

「漣のと比べたら、ちよつと独りよがりな話かもしれないけどさ」

漣は黙ったままで、俺が体の横に置いている右手に、白い左手をそつと重ねた。

ちゃんと伝えられるかはわからないけど、どうしても伝えなくちゃいけないことがある。

「俺さ、この前の夏祭りの時、対馬に好き、って言われたんだ。知ってた？」

うつん、と首を横に振る漣にあまり動揺している様子がなくて、俺は少し安心した。対馬は吹っ切れたようだったので言っているかと思っただが違うようだ。やっぱり吹っ切れていないのか、それとも気をつかっていただけか。後のほうならずっといい。

「好きな人がいるからって、断った。もうとつくに漣のこと、好きだったから。まあ対馬は結構そのあたり、お見通しだったみたいだけど」

漣は曖昧な表情で、声を発しないまま少し首を傾げた。重ねあつた手が、少しだけ握られる。

「でも、万が一漣がいなかったら多分受けてた。オーケー、してた。対馬とは小学校のころからの付き合いで、昔は一番仲のいい女友達だった。中学入ってあんまり話さなくなったけど、それでも対馬以上に女子と仲良くなることって、なかった」

漣は黙って聞いていてくれている。言葉をひとつひとつ、ていねいに受け取っていているような、注意深げな表情だ。

「小学校のころの修学旅行でね、夜中好きな人を言うっていうベタなイベントが部屋であつただけけど、そのとき俺、対馬の名前を出

した。好きだつてつもりはなかったけど、好き、つてところに一番近い人なら、対馬だったと思うから」

「冴は……冴は、知ってたの？」

「知らなかったと思う。でももし知ってたんなら全部、俺の微妙なそういう気持ちまで全部、解ってたんだと思う。告白したくらいじゃ好きにはなれないでしょ、つて言ってたから。前言った、立花と付き合つてうまくいかなかったのと同じになるでしょ、つて。やっぱり対馬は全部、解ってたのかもしれない」

少し頬を緩めて冴は、重ねた手を少し滑らせ、指を絡めてきた。俺の話は、まだ続く。

「だけど冴がいてくれて、すごくよかった。立花はどっちかっていうとちゃきちゃきしたタイプだったから別れても仲良くいられたけど、対馬はそうはいかなかったと思う。いくらかはおとなしい感じだから、もつとぎくしゃくしてたと思う。好きな人にはなれなかったけど、大切な友達であることには変わりないから。それはきつと冴がいてくれたおかげ。俺が、光原冴っていう本当に好きな人に出会えたおかげ。好きな人に出会えたのは、呪いのおかげ」

俺たちを取り巻いている空気が、少し流れを変えた気がした。

「対馬と友達でいられること。貴司や亮ともつと仲良くなれたこと。灰原とちゃんと知り合えたこと。それに、こうして隣で冴といられること。全部呪いのおかげ……つてのは、ダメかな」

「でも、消えた人たちは」

「呪いが解けたときにどうにかなる、つてのは？」

それは楽観的すぎるでしょ、と冴は言っただけど、ちゃんと笑ってくれていた。

言いたいことは、きつと伝わった。伝わったなら、それでいい。多分もう冴と離れることはないだろう、そんな確信があった。

窓から外を見ると、もうすでに暗くなり始めていた。

「ねえ」

手を重ねたままで、漑は言った。

「今日はこのまま、一緒にいてよ」

言って、重ねた手を少し握ってくる。

即答はできなかったけど、俺はいいよ、とささやくように返事をした。

漑に電話を借りて、まずは貴司に電話をかける。漑は電気をつけてカーテンを閉めていきながら、手間かけてごめんね、と言った。

「はい」

相槌を打つ前に、貴司は出た。

「俺だ、斉藤だ」

「えーと、うん。何？」

漑のつもりで出たらしい。口調に少し温度差があった。

「今日帰らないことになった。そこで、手伝ってもらいたいことがある」

「なんかしゃべり方おかしいぞ……何についてだ？」

「今日は親がいないからさ、未来がひとりになるんだ」

彼女んちにお泊まりなのにシスコンか、と貴司は笑った。なんだからうまく反論できない。

「なんとかうまく言ってくれない？」

「うーん、凜に頼んでみようか。あいつの親、融通きくらしいから」

「頼むって、何を？」

俺が聞くと、貴司は何言ってたんだよ、という感じで答えた。

「凜がお前んちに泊まればいいじゃん。どうせ未来ちゃんだけなんだろう？ 解決解決。凜もそのへんの事情はわかってるし」

「そういうことか……でも、いいのかな」

「お見舞い的时候要に仲良くなってたみたいだし、大丈夫だと思うよ」「そうか」

「で、お前は亮んちに泊まることにしておく、と。俺んちだと親どうしのつながりがあるからな」

貴司のここまでの気の回りようには、本当にいつも脱帽する。機転が利く、を地でいっている。

感心しきりの俺に、あとさ、と貴司は付け加えた。

「そういうことしたいわけじゃないって解ってるけど、俺は別に行けるとこまで行っちゃっていいと思うよ？」

「うるせー」

ははん、と笑って、礼を言ったあと電話を切った。

受話器を置いた瞬間に、迷いがすべて消えていった気がした。

「ごはん、作るね」

漑はそう言ってキッチンに入っていった。手伝おうとしたけど、やっぱり断られた。感じなくていい負い目を感じているのかもしれない。でもそれだけじゃなくて、心が揺らいでいてとにかく何かしでいたくもあるのかもしれない。

「ということは、毎食自分で作ってたの？」

普通の会話をしようとして、そう俺は尋ねた。

「うん」

「そりゃ、上手にもなるはずだよ」

端から眺める手さばきは自分のそれよりもずっと良く見えて俺はそんなことを言っただけ、なんだか今度は俺のほうが空回りしている気がして、それに気付いて少し、俺の言葉は重くなった。

食事を終えてからの後片付けも手伝えずに、俺はソファに座ってぼんやりしていた。

俺はどうしてここにいるんだろう。それは、漑が引き止めたからだった。ここにいて、俺は何をすべきなんだろうか。

何もしなくても、ひとりであるよりは不安は和らぐ。でも、そんなことじゃない。

そんな風にぼんやり考えている間に、結局漑はほとんど言葉を発することもなく後片付けを終えて、ごめんね、と言いながらキツチ

ンを出てきた。今度は何がごめんなんだろう、と考えるひまもなく、
漑は俺の隣にすんとん、と座った。

一気に体がこわばる。手を今回は体の前に出していたからさつき
よりも近くに漑は座って、手を重ねられるようなスペースさえない。
硬直したままの俺に、漑は言葉をかけた。

「もう聞かないんだね、呪いのこと」

左を向いて漑の顔を見ようとしたが、あまりに近くてすぐに前に
向き直ってしまう。

「言いたく、ないんだろ」

「少し」

もう聞きたいこともないし、と思ったが、ふとあの紙のことを思
い出した。

「でもごめん、ひとつだけいいかな」

うん、と漑は力なく、だけど否定のニュアンスだけは込めずに返
事をした。ポケットをまさぐって、ぼろぼろの紙を取り出す。

「これなんだけどさ、先生のころにも似た噂があったらしくて、そ
の時に出回ったんだって」

紙を手渡された漑は、ゆっくりと開いて目を落としている。

「知ってた？ 心当たり、ない？」

「わからない……」

もしかしたら知っているかも、と本気で思ってたはいた。
だけど今はそれを、信じるしかない。

「ごめん、と小さく言って、漑はその紙をまた俺に手渡した。

「漑が謝ることじゃない」

「わかってる」

漑が座っているのとは反対側のソファに紙を置いて、また間の
悪い沈黙。

「ねえ」

破ったのは、またも漑だった。

「いちばん古い記憶って、いつのことが覚えてる？」

元気はなくても、暗くもない口調。少し安心して、俺は答える。

「どうだろうな、考えたこともなかった。でもなんか、未来が生まれたときのような気がする。俺が二歳のときだね」

「そう……私はね、わからないの。幼稚園のときの記憶もあるし、幼稚園に入る前のような気がする記憶もある。でもそれよりずっとずうっと前のことが、思い出せる気がするの」

「おなかの中とか、前世とか？」

漑は微妙に表情を変えて直接には答えず、言った。

「私は呪いとして、ひよつとするとずっと生きてきたのかもって、さっきの読んで思った」

「不安にさせたなら、ごめん」

「違うの。呪いがいつからあったとしても、光原漑は十七歳だから。もしかしたら、前世ってのも間違いじゃないかも」

俺は思考が追いつかなくなって考え込んだ、自分でもわかる、難しい顔をしている。

「さっきの紙にさ、あったよね。呪われた女の子があなたを吸い寄せる、って。私、自分でもどうして和也くんに声をかけて呼び出したのか、ずっと解らなかった。でも、ひよつとして私が呪いなんだったら、呪われているんだったら、それは呪いのせいだったのかもしれない」

何か口を挟もうとした俺だけど、漑はそれを遮った。

「でも体育館裏で初めて話したときに、私は変わった。自分の中に何が起こったのかは解らなかったけど、和也くんのことを知って、助けてもらうまではいなくても、私を変えてもらえる気がした。ふたりで話して、仲良くなって、こうして隣にいることは、全部私が、光原漑が、望んだことだったんだよ——」

はっとさせられた俺が完全に黙ってしまうと、漑はすうっと体を傾けて、俺のほうにもたれかかってきた。

「すき」

つぶやくようにそう言つて、漑はそつと目を閉じる。

「俺も、好きだよ」

その返事に言葉はなくて、少し間があつて漑は寢息でそれに答えた。

いちばん近くにある顔が、多少やつれているように感じた。ずつとまともに、眠れていなかったのかもしれない。

しばらくは左肩に漑の優しい重みと温かさを感じていたが、漑の眠りが深くなつていくにしたがつてだんだんと力は抜け、こちらにしなだれかかる具合も少し重くなってきた。何度か体勢を立て直そうとしてみたけどなんだか起こしてしまいそうでそれも悪い気がして、俺はソファアを下りて床に座り、漑には頭をクッションで支えて横たわらせた。

ふと、ソファアの下にタオルケットが一枚あるのに気がついた。

もしかしたら昨日もここでこうしていたのかもしれない。本を読んでテレビを眺め、寂しさと途方もない恐怖をごまかしつつ、こうして寝ていたのかもしれない、と思った。それを広げてかけてやると心地よさそうにくるまって、横に出ている右手をそつと握ると、言いようのない愛おしそうな顔をして、寝顔が少し微笑んだ。

こちらに向けられたその愛らしい寝顔を見ながら、俺は思う。

漑は本当に、呪われているのかもしれない。本当に、呪いなるものは存在するのかもしれない。

認めたくはないけど、それも事実のひとつの選択肢だ。

でも今、呪いではなく光原漑、俺の好きな光原漑としてここにいる以上、

こうして触れていれば確かに温かいし、気持ちよさそうに寢息も立てて、

ふとしたことで感情が動けば笑い、怒り、悲しみの涙だって流すだろう。

んう、と小さく寝言を言って、きゅっ、と俺の手を握る漑は、間違いない俺の好きな人。

近くで見れば見るほど、少し疲れていても相変わらず、吸い込まれそうなほど整った顔。

愛しい人のその唇に、そっと短く、キスをした。

甘酸っぱいとかレモン味とかそんな感じじゃなくて、ただただ切なくなるほどに、なぜだか甘ったるい味がした。

これで、おあいこだ――

漑もおそらくそれに気付くことなく、少しだけ反応は示したがそのまま寝息を立て続けた。

それから俺はただ、その寝顔をずっと見つめていた。

しかし、その時だった。

ぴいん、ぽおん、と静かな夜に似つかわしくない音が部屋に鳴り響いた。

チャイムだ。でも漑は目を覚まさない。

時計は、誰か人が訪ねてくるには非常識な、遅すぎる時間を指し示している。

ためらいもあつたが漑の手を放して、おそろおそろ玄関に向かった。がちゃん、とロックを解除し、ドアを開ける。

開けたそこには、男がひとり、立っていた。

「よお」

——浪野だ。

「遅くにすまない」

おおよそ普通の高校生は使わない、堅苦しい言い回しで浪野はまず、そう謝った。

でも、嫌味な感じはせず、かえって誠実な感じまでした。

「なんだよ」

「聞きたいことがあるんだ」

俺は口を開かず、疑いと怒り、そして少しの恐怖が入り交じった視線で浪野を見た。

「どうして、光原から離れない」

黙って見つめる浪野は長髪で、相変わらずの制服を少し着くずしていた。そういえばこんな感じの軽い奴だった気もするが、今俺を見つめているまなざしは真剣そのものだ。

「じゃあ先に、俺の質問に答えてくれないか」

「わかった」

「どうして、お前は消えたんだ」

最高に突っ込んだ質問をしたつもりだったのだが、浪野は動揺する素振りも考える素振りも見せず、すぐさま答えた。

「光原が求めていたのは、俺じゃなかったんだよ。人が何かを求める限り、どこかで他人の邪魔になる。だからすべての願いが叶うことはなく、お互いに傷つけあうことになる。それは俺とお前にも言えることだ。それに、光原の心の痛みは、ある程度お前も知っているだろうが、きっとそれは俺が今、こうしてさまようことで味わっている痛みと、多分同じなんだよ」

「じゃあお前は今、ずっと……」

まるで何かに操られているかのように、淀みなく長く浪野は話す。必死でその言葉のひとつひとつを受け取って、聞き返そうとしてみたけど、浪野はそれさえも遮って話し続ける。

「それは聞くな。今は知らないほうがいい。お前が消えない理由は、

お前が光原の求めていたものかもしれないから。呪いが消えない理由は、まだそれが確実ではないから。それを今、お前らは確かめているんだろう。その不確実なぶんだけ、お前に痛みが降りかかっているんだろう。……これが俺の答えだ。これ以上、俺の中には何もない。それでは聞かせてほしい。どうして、あんな目にあつてまで光原から離れない」

直立不動のまままで話す浪野の声は平坦で、トーンも低い。繰り返されたその問いかけの語尾も消え入る感じで、おおよそ何かを尋ねるときのそれではなかった。

でも俺には答えがある。聞かれるまでもない、そのために今を生きていると言ってもいい、漣の隣を歩くための答えが。

「もうお前だって、解っているんじゃないか？」

俺が前置き代わりに軽く問いかけると、浪野は一瞬、わずかに表情を緩めた。

「俺が求めているものも、漣かもしれないんだ。漣も、俺も、お前も、みんな本当は同じなんだ」

「……ありがとう、感謝する」

言い終えて俺が口をつぐむやいなや浪野はそう礼を言つて、背を向けて去つていった。

本当に俺も、漣と同じだ。立花も対馬も、俺に好きをぶつけた時の気持ちはどんな建前や理性のかさに隠れていても、本物だったはずだ。気丈かつ明るく笑つてくれたふたりの気持ちを俺は傷つけることしかできずに、それと同じ程度には解らないが俺も確かに傷ついた。その時のことを思うと今でも、心のいちばん脆い部分が崩れそうにうずいて仕方ない。

漣だって、それは同じだろう。それが、同じなのだろう。でも相手が“消えてしまう”ぶん、その痛みは人より強い。きっとそれが、呪いなのだろう。だから俺と漣の気持ちが本物になったとき、すべての痛みは治まり、呪いも解けるのではないだろうか。

「和也くん？ 和也くん？」

閉じたドアにロックをして、その場に立ちつくしつつそんなことを考えていると、どうして目覚めたのだろう、リビングのほうから早足でやってきた漣がそのまま、ためらうことなく俺に抱きついた。「なっ……？」

「何か、あつたの？」

押し殺したような声で漣は尋ねる。

「なんでもないよ、大丈夫だ」

その返答を聞いて、漣はいっそう強く俺を抱きしめて続けた。

「ん、でも……いや。いなくなっただかと思った。消えちゃったかと思った。怖かった、怖かった」

「ご、ごめん」

少し肩を震わせてさえいる漣に、俺はそうとしか言えなかった。

「怖かった……怖かったよう……」

そう言ってさらに強く抱きしめてくる漣に、俺はもう何も言わずその場でじっと体を寄り添わせていた。

俺も負けずにぎゅっ、と抱くと、なんだか泣けそうな気持ちがあふれた。

くたびれるほどにそうしていた後で、俺は漣の手を引いてリビングに戻った。

また一緒にソファに座ったけど、今度はさっきよりもっと近く、完全にくっついて座った。

「ごめんな、怖い思いさせて」

「うん、でも寝てたのは私だし」

口ではそう言いながらも体は離れない。触れた体もまだ、震えていた。

「ごめん」

漣は何も言わずにただ、こくり、とうなずいた。

「こんなに誰かと一緒にいたいって思ったの、初めて」

しばらく経ってようやく落ち着いたのか、いつもの調子に戻って
漣は言った。

返事をするのも野暮な気がして黙っていたが、漣は気にしない。
そのまま漣の言葉は流れていき、静かな闇に溶けていく。

あのね、私、和也さんと話したあの時まではね、呪いとは別のと
ころに光原漣がいるだなんて、信じられなかった。

気付いたときには呪いとして生きていて、私に普通なんてどこに
もなかった。

自分がどうしてここにいいのか、わからなかった。

友達はいたけど、噂からはかばってくれたけど、

目の前で男の子が消えたのを見ると、みんな少しだけ、離れてい
っちゃうから。

でも最近のは、高校に入ってからのは、違ってた。

浪野くんのことであっただけ、だけどそれで、凜や冴と仲良くな
ったの。

それでいろいろ話したり知ったりして、凜ののろけ話なんて聞い
たりすると特にね、

これまで自分にそんな感情がなかったことに気付いたの。

そんなの当たり前だよ。呪いが男の子を遠ざけて、それで光原
漣は、傷ついてきたわけだから。

でもね、それも変わったの。

初めて話したあの日にはとくに、和也くんのが好きだった
の、きつと。

すごく身勝手なお願いをしたのに、和也くんは優しくて、
だから私の好きは、どんどん、どんどん強くなった。

知らなかった。自分がここで生きてる理由をこんなにも、好きが支えてくれるなんて。

こんなにも、和也くんと同じ世界にいられてよかったって思えるようになるなんて。

みんなみんな、大好きになれたの。

凜——そんなことあるわけないのに、「呪いなんかない！」って言うてくれて、

あのひとことが私の支えだった……

冴——凜みたいにはつきりとは言わなくてもいつも笑っていてくれて、

私はこの人と友達なんだって、すごく思えて嬉しかった……
有働先生——何もいらない、って思ってたから最初はおせっかいにも思えたけど、

教室がちゃんと私の居場所になったのは、まずあの人のおかげ……

児玉くん——ちょっと不思議なところもあるけど、それも多分いいところで、

中学までの私を見てるのに、あんなに私によくしてくれた……

木田くん——凜とすっごくお似合いで、だけどみんなのこともちゃんと考えてて、

私にも普通に接してくれて、呪いじゃない私もいるんだって、思わせてくれた……

未来ちゃん——こんな私のことをしたってくれて、まるで可愛い妹ができたみたいで、

和也くんと一緒に優しくて、すごく私に元気をくれた……

そして誰より、和也くん……

私きつと、和也くんと出会ったために呪いを背負って生きてきたんだよね。

みんな大好き。大好き、大好き……。

大好きだよ、ねえ、和也くん。

世界で、いちばん――

そうか、好きって、こういうことだったんだ――

何度も口に出して、何度も遷の口から聞いて、何度も心で感じてきたけど、

やっと、この手でつかまえられた気がした。

すき、すき、ねえ、すき……

小さく小さくなりながらもずっと続けられるその言葉のひとつひとつに、うん、うん、とずっと俺は応えていった。

すき、すき……

うん、うん……

先に眠りについたのは、どっちだったんだろう。

気がつくと朝だった。よくは思い出せないけど、多分寝たのは日付が変わっていないころだったはずで、八時半という時間を見るに、ずいぶんとまあ眠っていたものだ。

俺はソファ―に寝そべっていて、遷はいない。キッチンから物音といい匂いがする。

「澪？」

ガスコンロの音で聞こえなかったようなので立ち上がって、キッチンに顔を出した。

「おはよ」

「あ、おはよう」

すっかり見慣れたにつこりした表情が、そこにある。

「和也くん？」

なに？ と返事をする。澪は手を止めないままで、言う。

「覚えてる？ 昨日の夜のこと……私が一度、起きたあと」

「覚えてないわけじゃないじゃん」

改めて思い出して、なんだか恥ずかしくなった。俺が左手の人差し指で口元をかくと、澪もそんな感じの表情に変わる。

「よかった、夢みたいだったから。言いたいこと言えて、和也くんが隣にいて、なんだかすごく、気持ちよくて」

「俺も、そう思う」

気まずさではない、どことなくむずがゆい雰囲気 flowed。

「朝だから、コーヒーがいいかな」

それを打ちやぶるように、すぐに澪が言う。

「そうだね」

なぜか今までずっと、そうしてきたような気がした。

そしてこれからずっと、こうしていけたらいいな、と思った。

食事はゆつくりと、いつもよりさらに他愛ないことを話しながらすませたけど、片付けの途中、時計をちらちらと見ながら澪は言った。

「未来ちゃんのこと、大丈夫？」

そうか。予定でいくと灰原が来てるんだっただな。

「うーん、どうだろ」

「帰っておいでよ。きっと心配してるよ」

そうしようかな……とまだ少し迷う俺に澪は、私は大丈夫だから、

と付け加える。

そのひとことで、俺は家に戻る決心をした。

「じゃあ、またね」

「またね」

玄関まで見送りにきた漣の顔は、差し込む光に照らされて明るく輝いていた。

「今度は、ええと……」

「そうだ。今日中に携帯もとってくるから、夜には電話できるよ」
「わかった。電話する」

「ばいばい、と手を振って、玄関をくぐった。」

もう半分昼間の日差しが、俺を迎えてくれた。

12・十七年の“光原澤”(Merely because I love

ここのサブタイトルも気に入ってます。

自分の作ったキャラクターに恋できるか。この作品の私的裏テーマであり、同時に恋愛小説を書く上での命題だと僕は認識しています。

……最近ある友人に「お前にはついて行けない」と言われました。
ロマンを追い求めて強く生きていきます、うん。

13・夢幻泡影(Please save me again)

家に帰りつくとなんだかにぎやかで、それもそのはず未来と灰原に加えて貴司までいた。

「ただ、いまー」

何となくおそろおそろな感じで声を上げると、三人ともが返事をした。

「「「おかえりー」」」

ハモっている。

未来と灰原はきやいきやい言いながらゲームをしていて、貴司がソファーでそれを見ている格好だった。

「心配するな。俺はさっき来たところだ」

「そんな心配はしてない」

第一声からそんな会話をしていると、灰原が画面を見たまま割り込んでくる。

「心配してたのは私たちのほうなんだけど」

何の心配だ。

「右も左もわからん十六、七の若者ですからな」

貴司も割り込んでくる。

「心配に及ぶようなことはなかったよ」

「うそぉー」

ふたりの下世話なセリフが、今日は妙に心地よかった。

「ちょっといいか」

未来と灰原のゲームがまだ続きそうだったので、俺は貴司を呼んで部屋に上がった。

窓を開けながら、まあそこにでも、と座らせる。

「夜中な、浪野が来たんだ」

「さてはそれがおジャマだったのか」

空気を悪くしないようにわざと選んだ言葉のようにも思えたが、俺は構わず続けて、来たときの状況、話した内容、その後の漣、と順を追って話した。

「ふうん……で、それからどうしたんだよ」

「ソファーでいろいろ話してたら、ふたりでそのままぐっすり」

「はは、と貴司は笑う。そして少し間があつて、言った。

「光原さんは大丈夫なんだな。でも、やっぱりまだ、終わりじゃない。緊張しなくてもいいけど、油断は禁物、ってな」

ああ、と俺は強くうなずいて、またふたりで階段を下りた。

下りていくと未来と灰原はようやくひと段落ついたようで、かわるがわる話しかけてきた。

「ねー、未来ちゃん強いよ？ 斉藤といつもやってんの？」

「たまに」

「凜さんだつて、昨日が初めてだったのに」

ふたりは本当に楽しそうで、少なくともずっと前からの友達くらいには見えた。

「ちよつとトイレ」

未来がそう言って立つと、トイレの戸がしまつたのを確認して灰原が俺を手招きした。

「ちよいちよい斉藤」

「何だよ」

なにになになに、と貴司もついてくる。

「今日は家にいるの」

「携帯のショップに行かないといけないけど、他に予定はない」

「漣んちには、行かないの」

「多分」

灰原はふんふん、と目を閉じて何度かうなずいた。

「夜もいるわけね」

ああ、と返事をする、と、貴司が灰原の斜め後ろに回って、にい、

と笑った。

さらに声のトーンを落として、灰原は続けた。

「未来ちゃんね、おにいちやんがいないとやっぱり寂しい、って言うたよ」

言って、灰原も貴司と同じ顔をする。

「ば、ばか。なに聞き出してるんだよ」

「未来ちゃんが勝手に言っただもーん」

でも考えてみれば、どちらかが家にいないなんてどれくらいぶりだかわからない。

未来も俺も今年修学旅行だが両方秋ごろで、前回の修学旅行、三年近く前になるのかもしれない。それが一日空けてだが二度もあったわけだ。

そしてすぐに未来が戻ってきて、同じタイミングで灰原が、もう帰るね、と言った。

未来は少し不平を言ったけど、すぐにふたりで二階に上り、どうやら片付けを始めたらしい。

「なあ和也」

意味もなく階段のほうを見つめていると、貴司が言った。

「できるだけ早く、またみんなで集まろう。一度だけ、光原さん抜きで」

「今度こそ全部話せ、ってか？」

「ああ。かといってほじくり返して光原さんを不安にさせるのもよくないし……なんかいろいろ、ありすぎたよ」

そつだな、と相槌を打つ。

客用の布団をしまう物音や笑い声、何かをちよつと落としたような音がしばらく聞こえてきたあと、ふたりが下りてきた。

じゃあまたね、と灰原は出ていって、貴司もそれについて出ていった。

ドアが閉まって、未来とふたりで残される。

「洗濯、したか」

「ほとんど洗濯物ないから、まだ」

とりあえず話を振ったが、それもそうだ。

「……ごめんな、いきなりで」

もう少し気の利いた言い回しもあったかもしれないが、さっきの言葉が引かかっていたのでできるだけ早く、と思って言った。

「いいよ別に。ひとりでも大丈夫だし、凜さんも来てくれたし」

そう言って、ちょっと口をとがらせる。少しだけすねているようなしぐさだ。

「楽しかったか？」

「うん」

でもまた、明るい笑顔に戻る。

わが妹ながら、まったくもってかわいいやつだ。

そんな感じでまた少し日常に戻り、昼までなんとなくテレビを見たあと久しぶりに自分で昼食を作った。野菜が多めに使えそうだったので、焼きそばにした。未来とふたりきりの食卓は、なぜだか少し懐かしかった。

後片付けまで終わると俺はすぐ家を出て、携帯のショップへ自転車走らせた。

手早くすませて帰るつもりだったのだが、意外と時間をとられた。基盤は生きていたから修理が終わるまでに使う代替機にアドレス帳を移せるのだが、それに同意が要ったのだという。

帰ると居間に未来はいなかった。部屋に戻ったのだらうと思って手にまだなじまない代替機を開いて、貴司の番号をダイヤルした。

ワンコールで貴司は出る。

「はい、どした？」

「いや、携帯とりに行ってきたからさ、もう通じるよ、ってことで」
ふんふん、と貴司は軽く返事をして、言った。

「あのさ、みんなが集まるの、明日の午前中でいい？」

「俺はいいよ、別に」

漑とはまだ約束してないから、と付け加えようとしたが、踏みとどまった。率先して冷やかされにいかなくてもいい。

「未来ちゃんは？」

「多分大丈夫だと思う。あいつヒマだし」

「おにいちゃんがいるんだもんな」

「うるさい」

へへへへ、と貴司は電話口でも顔が想像できるような笑い方をした。

「それでさ、集まるのお前んちでいい？ お父さんもお母さんも、明日の夜までいないんだろ？」

「ああ、そうしようか」

そして細かい時間の段取りを決めたあと、貴司は俺がみんなには伝えるから未来ちゃんにはよろしくな、と電話を切った。切れてしばらくはアドレス帳を眺めていたけど、漑に電話するのは夜で遅くないかな、と思って携帯を閉じ、階段を上がって未来の部屋に行った。

こんこん、とふたつノックをする。

「入るぞー」

うん、と未来は小さく口の中で返事をした。学習イスに楽に座って、マンガを読んでいる。

「エアコンつけてんのか。涼しいなあ」

「つけなかったらやってらんないよ。で、どしたの？ 用事？」

そんなやりとりをしながら、俺はベッドに腰かける。

「いや、あのさ。明日の午前中、みんなが集まることになったからあたしも？」

マンガから目を上げて聞いた未来に俺はうなずいて返事をした。

「うん。あと、漑抜きで」

「呪いの……話？」

未来はマンガを机に置き、言った。

「いや、そこまで暗い話じゃないけど、昨日もいろいろあったから」「そう。で、どこに？」

「ウチ」

未来は少し驚いていたが、すぐにうん、とうなずいた。

用事が済んだので出ていこうとすると、未来はまたマンガを開いて目を落とし、ばいばーい、と小さく言った。

ドアを閉めると暑さが襲ってきて、自分も部屋に戻って窓を閉め、エアコンを入れた。

寂しかったらしい未来があの調子なところを見るに、どうやら人間にはそこにいるだけでできてしまうことがあるらしい、と何となく思った。

ひどく手持ちぶさたになった俺は宿題に手をつけたりなんてしながら時間を潰し、少し涼しくなり始めたところにスーパ―に出かけたあと早めにミートスパゲティとサラダの夕食を作り、未来とふたりで食べた。

片付けを終えてすぐさま部屋に戻ったはいいが、漑の食事にぶつかっても、と思つて結局電話をかけたのは八時を過ぎたころだった。漑は開口一番、いつから通じるから解らなかつたから電話できなかった、とちよつと不平を言った。

「ごめんごめん、用事でもあつた？」

「ないよ。でも、しばらく一緒にいたから、ちよつと離れただけなのになんか、声が聞きたくなつて」

ふと、ひとりのソファで寂しそうにしている漑の姿が脳裏をよぎつた。やっぱり昼間、電話しておけばよかった、と思つた。

「ついこの間まで全然平気だったのに、なんかおかしいね」

「おかしくなんかないよ。これからはいつでも、かけてきていいよ。出られるときは絶対出るから」

澪は素直に、そうする、と答えた。

澪は家ではひとりだ。ひとりの家で、たとえ学校がある日でも二十四時間のうちの半分は過ごさなければならぬ。きつと寂しいし、それは普通じゃない。ひとりじゃない自分を見つけて、寂しさもそれについてきたのなら、それはきつと望ましいことだ。

そもそも、父親がいないという時点で俺にとっては普通じゃない。いくら単身赴任とはいえたまに電話をにかけてくるし、休みが取れば帰ってくる。そして俺には母親と未来もいる。澪は母親も行方知れずになつたくらいだから、きつと本当の澪の寂しさは、俺には解らない。

そして、呪い。澪は完全に、普通から見放された存在だったと思う。自分のことを好きだと言った奴が消えてしまう。だからそもそも男友達なんて作れなかった。頭数だけで考えれば、友達を作れる可能性が半分以下になる計算だ。俺にしてみれば想像もつかない。

「……和也くん？」

「ああ、ごめんごめん。何話そうか？」

「うーん……」

お互いの声をただ聞いていただけの、至極中身に意味のない会話。だけど付き合い始めのカップルにはそれが普通なのかもしれない。まあ、普通よりは少し強いかもしれないが。

そして、そもそも俺と付き合い合っている、という状況も、澪にとってはありえなかったことだ。ふたつの好きが重なれば、隣を歩いていける。まだ俺たちは高校生で、多分それが普通。

頭の片隅ではそんなことを考えながらも、話しているのは呪いなんかと関係ないテレビや料理のこと。きつとそれも、普通の会話。見放された普通を、俺がいて取り戻せているのなら、これ以上のことはない。

呪いを忘れられる日も、きつと遠くない。根拠はなくても、そう

信じることだけならできる。

ひとしきり話したあと、どちらからともなく電話を切った。
話しているうちに漣の声のトーンがどんどん明るくなっていくのがわかって、俺は嬉しい気持ちになった。

翌日、俺と未来は適当に朝食を済ませてテレビを見ながら時間を潰し、みんなを待った。

未来は楽にしていたけど、俺は結局何を話せばいいものかと悩み体を硬くしていた。

ぐちゃぐちゃと俺が考えて頭を抱えているところに、チャイムが鳴った。未来がとりあえずインターホンに出て、すぐドアのほうに行った。

「冴さんだよ」

俺も続いて立ち上がる。

未来が開けたドアから、右手を振って対馬が現れた。

「おはよ」

「おはよう」

あいさつをして上げて、未来が飲み物を出そうとする。大きいペットボトルでサイダーがあっただけど、対馬は炭酸ダメだからな、と耳元で小さく言って、アイスコーヒーを出させた。

「どうぞお」

自分は自分のぶんで注いだサイダーを飲みながら、未来はコップを持っていった。

ありがとう、と言ってコップを受け取った対馬の横顔が今までになく大人びて見えて、俺の心はちよつと揺れた。

「うーん、ちよつと早かったのかな」

手持ちぶさにアイスコーヒーを飲みほしてしまった対馬は、つぶやくように言った。

「そんなことないでしょ。ほら、もう時間だよ」

未来が言うので時計を見ると、たしかにもう、約束の十時半。三人も遅刻か。

「どうしたんだろ。寝てるのかな」

「凜は違うと思うけど……あ、木田くん起こしてるとか？」

「あり得るなあ……亮はどうだろ。あいつは普段昼まで寝てるらしいからなあ」

まずいねえそれ、と対馬はどことなく楽しそうに言う。

俺がもう一度時計を見たところ、未来が言った。

「あたし、アキラさんに電話してみる」

「おい、亮にもそんな普通に電話できるのか？」

俺は尋ねたが、未来は大丈夫だから、と言っただけで階段を上っていつてしまった。

「やつぱりそういうのって、おにいちちゃんとしては心配なの？」

未来の足音が止まったところ、対馬は今度は昔のままのいたずらっぽいやつで聞いてきた。

「心配って、えーと」

「児玉くん、顔のつくりはいいもんね」

「や、違うつて。そんなんじゃ……」

確かに未来もそういう年頃なんだ、とは思うけど、それを実感するよくな出来事はこれまであまりなかったから、俺のほうにもまあ、抗体がないのかもしれない。

「顔赤いよー」

「うるせー」

ふふふふふ、と笑ったあと、対馬は少し静かになってから言った。
「未来ちゃんもしあわせね。おにいちちゃんに大事にされて」

赤くなつた顔が戻らないのを自覚しながら、俺はああうつ、と歯切れの悪い返事をした。

「うらやましいなあ」

「え、ああ……なんかごめん」

遠い目をした対馬の微妙な雰囲気、さすがの俺も察知した。

「あ、謝らないで。言っただじゃん私、これでよかったんだ、って」

「うん……」

「私こそごめんね、また変なこと言っただけ」

そのひとりで、俺は我に返った。だから思っていることを言った。

「でも俺、対馬のことも大事だよ。だって俺たち、ちゃんと友達してるじゃん」

上の階から未来の話し声が聞こえ始めた。ずいぶんかかったな、やっぱり亮のやつ、寝ていたらいい。

対馬はゆっくり笑顔になった。窓から差し込む朝日に照らされたその横顔、鼻の上のほくに、俺は初めて小さな傷跡を認めた。

少し赤くなって、言う。

「んもう、フツた女の子にそんな優しくしないの。その分まで、惚れた女の子をシアワセにしないさ」

自分の照れを隠すかのように腕を組んで、未来がよくするようなしぐさで少し、対馬は口をとがらせる。

がんばるよ、とだけ、俺は返事をした。

未来が戻ってこないうちにチャイムが鳴って、貴司と灰原が来た。どうやら対馬の予想は半分当たっていて、普通にもたもたしている貴司を灰原が引っぱってきたらしい。戻ってきた未来も混じってそんな話をしていたら、思ったより早く亮も来た。

「ごめんごめん、おはよう」

「もうお昼です」

相変わらずヘラヘラしている亮を未来がそう出迎えた。亮のやっぱりボサボサの髪は寝起きの感じも醸し出していたが、いつも通りなのでその辺はあやふやだ。そして役者がそろったところで、またしても灰原と貴司が仕切ってそもそも四人分しかイスがない食卓を離れ、居間に向かった。

それでも家族四人そろうこともあまりない居間はやっぱり手狭だったが、ソファーと座椅子を総動員してなんとか全員話す体勢に入った。

どうぞ、と貴司があごをしゃくる。

普段はバカみたいにうるさい連中が、しん、と静かになった。

ホーホー、ホーホー。ホーホー、ホーホー。

空気の読めないハトが一羽、どこかでひたすら鳴いている。

「事故のことまでは、みんないいんだよな。じゃあ、病院でのことからだな」

俺はそこで大きくひと呼吸ついて、改めて話を始めた。

「入院してた日の午前中、結構早い時間に漑がひとりで来てくれてさ、しばらく話してたんだけど、俺はピンピンしてるのにやっぱり漑は不安になっちゃってたみたいで」

「私たちがまた連れていったときは、あんまりそんな風には見えなかったけど」

「俺といたときはそうだったんだよ。自分のせいじゃないのに謝って、謝って。なんとか慰めてたんだけど、やっと落ち着いてきたころにテレビで俺のニュース見ちゃって」

亮が黙ったままで、あちゃー、というリアクションをとった。

「一瞬でやっぱり、漑もミニバイクの少年ってのが気になったらしくて、パニックになって」

「無意識かもしれないけど、情報を入れないようにしてたんだろっね」

灰原の相槌で話は少しずつ前に進んでいく。ちなみに例の“少年”については、未だに何もつかめていないらしい。

「で、パニックになった漑さんは、どうしたの」

俺の隣に座っている未来が、横を向いて尋ねる。

「え、まあそこもなんとか」

「約束、したんだよな。いなくなったりしないから、って」

俺の歯切れの悪い返事を、貴司がそう補完する。俺はうん、とうなずいた。具体的にどうやって澪を落ち着かせたかは、まあ言わなくてもいいだろう。

「で、澪は帰って、有働先生が来たんだよ。これ、ちょっと見て」朝ポケットに入れ直したあの紙を取り出して、隣の未来から回してもらった。ひとりひとりが読んでいる間に、俺は順を追って話した。貴司が先生に話をしてくれたらしいこと、浪野関連の書類の消失、面談資料の矛盾、いないはずの澪の父親。そして、二十年前の呪いの噂。その後貴司に話した、俺の決意も少しだけ。

そこまで話して見渡した五人の顔が笑顔じゃないけど明るくて、俺は少し救われた。

「で、次の日にはもうフリーだったから、朝から澪んち行っただよ。買い物行っただ料理作ったり、普通に話してたりさ、とにかく普通にしてた。でも携帯が壊れてたからその関係もあって、四時ごろかな。帰ろうとしたんだ。そしたらいきなり、帰らないで、って」何かいい感じ、と対馬が言ったが、俺は首を横に振って続けた。

「多分澪は無理してたんだよ。でも俺が帰るだんになったときにそれがきかなくなった。そのまえにああやって澪と玄関で別れた帰りに、事故にあっただけだし」

空気が重くなるのを感じた。少しだけ話を、続けたくない気もした。

「誰かいれば落ち着くと思ってさ、いつごろお母さんが帰ってくるか聞いたんだ。そしたら澪はまたちょっとパニックになって、泣いて……お母さん、いないって」

少しだけ間があって、灰原がえっ？ と小さく言った。

そのひと言を引き金にして、五人ともが顔を上げてこちらを見た。

「え？ 私会ったことあるよ？」

「俺も、中学の運動会のときに見たよ。光原より背が普通に低かったから、何となく覚えてる」

対馬と亮がかわるがわる言ったが、俺はまた首を横に振った。

「違うんだ。俺と最初に話したあたりで、“消えた”らしい。もと家にはいないことは多かつたらしいんだけど、いきなりだった、って。電話とかもだんだんかかってこなくなってる……」

「それって蒸発とかじゃないの？」

未来が尋ねる。

「可能性はある。でも前までと全く同じ額の給料が先月も口座に振り込まれてたのを見せてもらったし、だとしたら連絡もつくはずだろ？ 職場も変わってないっぽいし。でも、つかないんだって」

みんながそろって同じ、やたら難しい顔をした。

「ここからは漣の推測になるんだけど、話していいか？」

そのままの顔で五人とも、思い思いにうなずいたり、承認の返事をしたりした。

「自分は呪いに生かされているのかもしれない、って漣は言ってたんだ。漣が生きていくために必要だったから、母親がいた。でも漣が家事をこなせるようになって、その意味では自立したから、いなくなっただけとお金だけは、入り続けてる」

「他の親戚とかは？」

「まったく、らしい。面談にお父さんが来たことになってるのは、漣が表面上普通に生きるための、ちょっとしたつじつま合わせ」

「そんなの……そんなのおかしいよ」

灰原は強い調子で言って、立ち上がった。

「ありえないよ。ねえ、斉藤もちやんとそんなことないって、そんなのおかしいって、言っておけたんでしょ？」

俺はまた首を軽く振って、答える。

「いいや、言っていない。今まで言ってくれなかったこととか、迷惑かけたこととか、そんなこと全部、もういいよ、ってだけ、言った」

灰原が言葉に詰まる。きゅっ、と唇を噛んだ。

「さすがだな」

誰もが解せていないという雰囲気の中で、貴司だけはそう言った。

目で合図して、灰原を座らせる。

「今さら呪いがもとも嘘だなんて、そんなこと言えないよ。言っちゃったら、その通りになる気がするから、澪まで嘘に、なる気かして……でもありのままを受け入れれば、きっと呪いは解けるんだと思う。二十年前も、だんだん下火になってなくなっただって、先生が言ってた。家の外では澪は多分、明るく遊んで話して、男友達だっている普通の女の子に戻った。俺は事故にはあったけど、ケガはほとんどない。貴司も亮も、消えたりしない。呪いはきっと、弱くなってる」

「やっぱり、さすがだね」

今度は灰原が言った。

ヴー、ヴー。

ちょうどそのとき、食卓においてあった俺の携帯（代替機）がバイブした。一番近いところにいた亮がひょいと取ってサブディスプレイを覗き、光原だよ、と言って手渡してくれた。

「ラブコールだね」

未来がそう言っただけ、他の四人も冷やかしてくる。余計なこと言っただけ、と笑顔で念押しして、ボタンを押して電話に出た。

「もしもし」

「あ、和也くん。あのね」

「どうした？」

逸らした視界の隅に五人が集まってにやけている。

「今ね、神社にいるの」

「うん……」

突然のことに疑問を感じながらも俺は相槌を打った。

「来て、くれる？」

「行けるけど……どうしたの？何かあったの？」

じりっ、じりっ、と這って近づいてくる貴司を足で追い払いながら俺は聞いた。

「うん、ちょっと」

「ちょっと?」

「多分、最後になると思うから」

瞬間、俺は完全に硬直してしまった。えっ、と言ったつもりだったが、声が口から出ていたかも怪しい。

そんな俺の雰囲気を感じてか、貴司は少し下がって大人しくなった。

「ごめんね、いきなり」

そんないつもの調子が、まだ信じられない。

「わかった、行くよ」

俺がなんとかそうしぼり出すと、ごめんね、ありがとう、と澪はいつものように言って、電話を切った。

携帯をたたくでポケットにしまいながら、俺は五人に言う。

「俺、神社まで行ってくる。澪が呼んでるから」

「ええ? 澪もずいぶんワガママになったものね、もう」

「違うんだ。なんか……」

「最後になると思うから、だろ?」

貴司の耳にもどうやら届いていたらしい。灰原を中心に、四人がはつとしたような表情を見せる。

「最後って……」

未来がおびえたような目をして言う。対馬と亮も、静止してこちらをじっと見ている。

「で、お前は何しに行くんだ?」

立ち上がった、貴司が尋ねる。

「最後だなんて嫌だよな。俺らだってそうだ、なあそうだろう?」

「うん」

「だから連れ戻しに行く。それでいいな?」

「ああ」

長身の貴司の真っ直ぐな言葉と強い視線が、俺に力をくれた気がした。

「じゃあ、行ってくるから」

玄関で靴を履きながら、見送りの五人にそう言った。

「急がなくていいの？」

焦るでもない俺に、灰原が尋ねた。俺は答える。

「いいよ。だって澪は絶対、俺をおいていたりしない」

みんなも少し力が抜けたようで、微笑んでくれた。ばーか、と貴司が言う。

「絶対ふたりで帰ってきてね。待ってるよ、私たち」

そう言っただけで、昔の面影そのままに屈託なく笑った。

「もうついてけねーよ。がんばれな」

亮は肩を少し上下させながら言った。心のこもったヘラヘラだった。

「絶対最後になんかしちゃダメよ。斉藤ならできるよ」

できたらふたりの世界に入らずに一応連絡するのよ、と灰原はこんな時までしっかりしている。

「和也のことと澪さんのことも大好きだよ。だからがんばって」

未来とはずっと一緒に暮らしてきたけど、こんな真っ直ぐな言葉は初めてだった。

「誰も心配なんかしてないから、行ってこいよ。信じられないくらい信じてる」

最後まで貴司は、そんな格好いいセリフを吐きやがる。これでやらないわけにはいかない。

「じゃあ、行ってくるよ」

ゆっくりドアを開けて外に出て、それが閉まるのを見届けたあと、ゆつたりと母親の自転車にまたがってこぎ出した。

こぎ出すと急いでしまったのは、怖かったからじゃない。

好きな人に、少しでも早く会いたかったからだ。

驚くほど早く神社に着いた。長くない石段の下に自転車を置いて駆け上がろうとすると、石段の真ん中に人影がある。

浪野だ。

「やつぱり、来たんだな」

「来ないなんてあり得ないよ」

あの夜よりはいくぶん、優しい顔をしているように見えた。

「光原は“呪いを解いてくれる人”を探していた。呪いは本当は、解かれるのを待っていた。でも光原が探し当てたのは、“好きな人”だった。光原はそれで満たされて、お前さえいればいい、と思うようになった」

数段上に立ち俺を見下ろしている浪野の言葉ひとつひとつが、俺の心に直接響く。

「呪いはお前を邪魔した。お前と光原を、呪いは許そうとしなかった。だから呪いは、お前たちを傷つけた。俺も呪いのひとりだし、本当は光原の世界すべてが、呪いなのかもしれない。でもそのお前が今、呪いを解こうとしている」

あの夜も、そして今回も淀みなく話し続けていた浪野が、そこで言葉に詰まり、黙り込んだ。明らかに何も言えなくなっている浪野に、俺は口を開いた。

「もう、いいよ。俺だって、漣がいれば、それでいい。でもその他に漣と分かち合える何かがあれば、もつといい。だからもう、行かせてくれ。俺は何かをしに来たわけじゃない。ただ、漣がいるところに会いに来たんだ。漣を、迎えに来たんだ」

「解っている。ずっと手荒なまねをしておいて……最後まで、すまなかった」

浪野はそう言うとかたく目を閉じ、うつむいた。

「もう、会うことはないだろう」

「……ありがとな」

俺の心に浮かんだ唯一のかけるべき言葉、それを口に出した刹那、大きな風船のはじけるような音がして、浪野は俺の前から消えた。俺はしばし呆然としていたが、思い直して齒を食いしばり、石段を駆け上がった。

やたらと広い境内の真ん中あたりに、漑はぽつねんと立っていた。俺の姿を見て漑は少し笑ったように見えたが、その場を動くことはしない。

俺は駆け寄っていき、少しだけ息を弾ませながら声をかけた。

「どうしたんだよ、いきなり」

漑はまた、ごめんね、と前置きして答えた。

「呪い、解けちゃうみたいなの」

解けるのか、と俺が小さく尋ねると、漑はひとつうなずいて、言う。

「うん。でも私が、呪いそのものだったみたい」

「呪い、そのもの……」

「そう。だから、最後になるの」

その時、目に映る漑の姿が一瞬蜃気楼のようにゆらめいた気がして、俺はかぶりを振った。

「そんなの」

「私だってイヤだよ。でも、解けちゃうの」

言葉がうまく出てこなくて、俺はただ唇を噛むだけだ。

漑はひどく優しい顔をして、また言う。

「ごめんね。もうひとつだけ、黙ってたことがあるの」

今度は漑の指先が少し、ノイズのようにちらついた。これはきつと、錯覚でも見間違いでもない。

「先生が話してくれたっていう二十年前の話、私ももう知ってたんだ。そしてあの話にはもう少しだけ、続きがあるの」

その女の子も、卒業を前にして、消えちゃったんだよ。

先生がひどく苦々しく語った意味が解った気がした。俺に最後まで伝えてくれなかった理由も、どことなく解った。でも、納得はいかない。

「だからってどうして、漣が消えなくちゃいけないんだよ」

「言ったでしょ、生まれる前のことを覚えてる気がするって。多分呪いはずっと、私ひとりだったんだよ」

まるで当たり前の事実を伝えるかのように話す漣に耐えきれなくなつて、俺は叫ぶように言った。

「だったらひとつだけ、聞かせてくれ」

返事はなかったが、俺は続けた。

「いつ、自分が呪われてる、って思ったのか、教えてくれ。噂が先なのか、呪いが先なのか」

「噂よりは、少し後だよ。多分小学校の、三年くらい」

あまり迷うことなく、ちよつと思ひ出す程度の間だけをおいて漣は答えた。

「じゃあ、漣は呪いそのものじゃないじゃんか。ただの噂じゃ……」

「違うの。男の子が消えるのは、物心付いたときからずっと。みんなが騒ぎ出したのが、小学校に入ったころ。それで、その時には、夢を見たの。その次の日から、私は呪い呼ばわりされるようになった」

穏やかすぎる漣の口調に俺は言葉を失つて、代わりに漣がそのままの口調で夢の話始めた。

「今の私くらいの背かっこのお姉さんとね、私は公園で出会ったの。ひどく傷ついて、疲れたような顔をしてた。それでね、『それは呪いだよ、ごめんね』、って言って私の手をとった。しばらくはそのままであつたけど、お姉さんは『がんばるのよ』、って言って、消えたの」

まるで風船が割れるみたいだった。漣は少ししてそう付け加えた。

また耐えきれなくなった俺は、今度はゆっくりと口を開く。

「それはただ、自分で自分に呪いをかけた……狂言だなんて言わないけど、半分は思いこみで、それが呪いになったんじゃないか？」

否定されると思っていた。何も答えてくれないかとも思った。

でも漑は、穏やかなままでの口調で答える。

「そう……そうかもね。私はただ、生まれる前からずっと、和也くんに会いたかっただけなのかもしれない。私が私にかけたのが私の呪いなら、多分私自身で解けるはずだし、まるつきり誰か別の人がかけた呪いなら、多分解けることなんてないはずだもんね……でも、呪いは解けるんだよ」

「どうしてだよ……俺には、解らないよ。俺はこれからずっと、漑と一緒にいたいんだ」

「私もそうだよ。でも、呪いが解けるのも、私が消えるのも多分、和也くんのおかげだよ。もう誰も悲しまないし、苦しめない」

漑はさらに優しく笑った。

「もうやめてくれ、そんなこと言うの」

漑の表情が途端に曇る。きっと漑も、笑いたくなんかないはずだ。

「漑がいなくなったら、俺が悲しいし、苦しい」

俺がそう言うのと、漑はまた優しい笑顔を作り直した。

「うっん、大丈夫。和也くんは、大丈夫だよ」

「大丈夫なんかじゃ……」

「和也くんは、いつも大丈夫って言うてくれた。すごく強いし、優しいひとだよ。だから大丈夫、呪いが解けても、いつもいつまでもきっと、大丈夫」

大丈夫、とまた何度か繰り返して、漑は右目からひと筋涙をこぼした。それを合図に、俺の目からも信じられない量の涙があふれてきた。

「ごめんね。でも本当に、好きだったよ」

チリチリチリ……と、漑にちらつくノイズがひどくなる。涙のせいで声が出なくて、せめて前に出て漑に近づこうとしたが、見えな

い何かに押さえつけられるように進めない。

チリチリチリ。

チリチリチリ。

「ごめん、もう限界みたい。もう呪いが、本当に解けてなくなっちゃう。でも大丈夫だよ、和也くんはきっと」

チリチリチリ。

「きつと、私がいなくても」

チリチリチリ。

「だいじょうぶ」

ノイズの音にかき消されてほとんど声は聞こえなかったが、言っていることは伝わってきた。でも、そんなはずない。そんなわけない。そんなの、耐えられない。

飛び散るノイズが光を発して、その光が零の姿をくらませ、少しずつかき消していく。

最後まで零は何か口に出そうとしていたが、それは結局解らないままで、やっと見えない何かを払いのけて駆け寄り、零を抱き留めようとして飛びついたけど、零のあの細い体の感触はなくて、目一杯叫んだ愛しい名前もかき消され、自分の耳にも届かなかった。

暗転 (Water vein)

気がつくと、神社の隅の大きな木の下で眠っていた。
目を開けると、笑顔で俺を送り出してくれた五人が、俺の顔を覗き込んでいた。

「気がついたか？」

貴司の声だ。

我に返って、立ち上がる。

「三時間も経ったのに帰らないし、携帯にも出ないから、みんな心配して来たのよ」

灰原が途切れ途切れにそう言って、あとはみんな黙ってしまう。

まるでずっとずっと、夢を見ていたみたいだった。

でも、何よりみんなの表情が、夢なんかじゃないと教えてくれた。

澪は確かに、そこにいたんだと。

澪はもう、俺のそばにはいないんだと。

さっきこの場で見たすべてと、澪から聞いたすべてを話した。

貴司と灰原はうつむいていた。

亮はじつと空を見ていた。

対馬と未来は静かに、泣いていた。

誰も俺の話を、疑おうとはしなかった。

漑はもういない。呪いはきつと、解けたのだろう。

それは漑が望んでいたことだ。

でも、最後に呪いがまた誰かを傷つけたことは、疑うべくもない。

漑は、救われたのだろうか。

俺は漑を、救えたのだろうか。

ひと筋だけまた、涙がこぼれた。

どうやって帰り着いたのかよく覚えていないが、気がつくとな自分の部屋にいた。

あふれてくる涙はいたずらに温かく、それは自分をなぐさめているようにもあり、

でも、あざ笑っているようにも思われた。

八月ももう下旬になった。俺たちは昨日から補習と称して学校に集められ、通常授業を受けている。

期待していたわけではもちろんない。だけど補習最初のホームルームで、光原は転校した、と有働先生が短く告げたとき、俺は本当に落胆した。貴司も灰原も対馬も、いくらか同じような気持ちだっただろう。亮だって休み時間にも貴司あたりから聞いただろうし、家に帰って未来にもその旨を告げたけどやっぱり何も言わず、少しだけ悔しそうな顔をした。

俺たち以外のクラスメイトはみんな聞くなりざわついて、休み時間になるやいなやその知らせは人から人へ、クラスからクラスへと伝わっていった。思ったよりもさらにたくさんの人が呪いについて認知していたことに驚いた。そしてだんだんとまた、澪が俺たちのもとを離れていくような気がして、好き勝手言う奴らのことが無性に腹立たしかったが、そんなざわつきも放課後までにはすっかりおさまってしまっていた。

例年、何もない夏休みというのはとかく無気力になってしまいがちなものだが、あの日以降の俺はそれ以前の問題で、ただひたすら宿題をしたり走りこんだり、とにかく何も考えられなくなっていた。でもそれでも料理をしたりたまに外出したりもしたから、そのたびに何もかもからあの日のことや澪のことを思い出して、心が潰れそうなほど苦しかった。

みんなはできるだけ暗くしないように努めてくれて、貴司は頻繁に走りに行こうぜと誘いに來たし、あのとらえどころのない亮もたびたび家に遊びに來た。灰原はよく電話をしてきて、五人の中で唯一直接的に俺を励ましてくれた。灰原らしいな、と思った。対馬も数度家を訪ねてきて、主に未来とだがしばらくしゃべっていったり、

俺からはモスキートズのCDを借りていたりした。零のことを思い出すようなものはできるだけ避けて過ごしていた俺だけど、対馬がCDを返しにきてくれてからは、それだけはレコードの時代だったらすり切れてしまいうくらい聴いた。そして未来は、必要以上に明るくしようと努めてくれた。お菓子作りをねだったり、暇なときにはゲームをしようと誘ってきた。でもそれが本心じゃないってことくらい、未来が生まれてこのかた十五年のつきあいなんだから解る。夜中ひとりの部屋で泣いていたことがあるだなんてことも、ちゃんと知っている。そこまでの気づかいを妹にまでさせていることが、ひたすら心に痛かった。

「大丈夫、大丈夫……」

大丈夫じゃない中でもさらに大丈夫じゃない、そんな最悪の状態のときに限って、零のあの言葉がやけにはつきりとした輪郭を帯びて頭の中でしきりに響く。

ほら、俺の言った通り、大丈夫なんかじゃないじゃんか。

そんな言葉を伝えられるその相手も、もちろん今はもう、いない。せめてもう一度だけあるとき、好きだと言えていたなら、と今も未練がましく思ったりしている。

零の携帯はまだどこかに存在するのではないか、と灰原が言っていた。家ももぬけの殻になり、学校にもどこにも零がそこにいたという証拠となる品物は何もなかったけど、もちろん零がいなくなっただという証拠となるものもないし、灰原が電話をかけても、それは存在しない番号ではなくただ誰も出ないだけであるようなのだという。決定的なのはメールアドレスで、全く同じものが存在することがどう考えてもあり得ない中で、何通送ってもアドレス不明で返ってくることはなかったらしい。

聞いてみると、未来も亮も貴司も対馬もあれから一度以上、零の番号にかけてみたりメールを送ったりしてみたことがあったという。それを聞いて俺も、何度もメールを送ったりダイヤルしたりしよ

うと思った。けど、できなかった。

俺がそうすることで、本当にすべてが終わってしまう気がした。

「タイム、上がってるな」

放課後、気が進んだわけではないが他にすることもないのでまっすぐ足を運んだグラウンドで体力のチェックのためにひと通り走ってみると、自分でも驚くようなタイムが出た。

「ああ」

「貴司だつてそこそこ上がってるじゃん」

「俺は少しだけ、な」

他の仲間や先輩が聞いたら驚くだろうタイムにも、貴司は驚くことも喜ぶこともうまくできていないようだった。無理もない。俺が抱えている事情を全部、知っているんだから。

「どのくらい走りこんだんだ？」

「覚えてない」

校舎に近いグラウンドの隅の木陰でそんな会話をしつつ、水分補給と足回りの軽いストレッチを済ませる。さあ戻るか、と言って貴司が立ち上がって、俺も続いて立ち、もう少しヒザを曲げ伸ばししていた。

「あのう」

不意にそのとき、後ろから声がした。

「陸上部のかたですか？」

振り向くと、そこまで若くはないだろうがぴしとした感じで小柄な、それでいて綺麗な女の人が立っていた。

「そう、ですけど」

数歩ぶん近い位置にいた貴司が、それに応じる。

「木田ちゃんと斉藤くん、つてのは」

「俺らですけど」

俺もすすつ、と寄っていき、答えた。

「失礼ですけど、どちら様ですか」

おずおずと貴司が聞く。

「ごめんなさい、と焦りながらも笑顔を見せたその女の人に、何か引つかかるものを感じた。」

「……………です」

最初はよく、名乗った名前が聞き取れなかった。

「「えっ？」」

俺と貴司が同時に発したその声に応えるように、その女の人はもう一度名乗った。

「光原怜といいます。光原漣の、母です」

「うそ……………」

「あ、いや、もう転校したと聞いていたものですから」

俺が反射的に発したひと言にその女の人は不思議そうな顔をして、それを見た貴司が慌てて取りつくろう。

「ええ」

その女の人は、そう言つて優しい笑顔を作った。俺はまたさらに、ひどく動揺した。

「ごめんなさいね、いきなりで。突然ですけど、私が体を壊して実家に帰ることになりました、漣も転校、という形をとることになったんですよ。親ひとり子ひとりなのに私が働きづめで、あの子に寂しい思いもさせて、そのせいで体も壊して……………びっくりしましたよ。気付いたらいつのまにか、自分の娘があんなに立派になっていて」

呆然と目をしばたかせたり互いに顔を見合わせたりしながら何も言えずにいる俺と貴司に構わず、その女の人は続けていく。

「……………そんな中でいろいろよくしていただいたみたいで。実家に帰るといつてもその実家には誰もいないんですが、また私の都合で……………私は仕事をやめるんですが、それでその、前の夫と、あの子にと

つては父親になりますが、復縁とでもいいですか、ね。それで養ってもらって……」

父親の話まで出て、貴司は全部間違いなんじゃないかとでも言いたげな目でまたこちらを見た。でも俺は、何もかも全部これで正しいんじゃないのかな、となんとなく思った。

「……大学に入ったらあの子もまたこちらに戻ってきたいと言っていますし、そのときはまた娘をお願いします。それまでまだ一年半ほどありますが、便利な世の中ですから連絡もいろいろできますでしょうし、電車に乗れば会うことのできない距離じゃないですしね」その女の人はそう言って、実家の場所を俺たちに告げた。ひどく遠いように聞こえたが、電車に乗れば二時間はかからないのだという。

「本当にありがとうございます。ごめんなさいね、話ばかり長くなって」

いえいえそんな、と貴司が言った。俺は尋ねる。

「それでその、澪さんはいま」

「ああ、ごめんなさい。それがいちばん大事よね。お昼前まで実家のほうにいたんですが、ついさつき戻ってきて職員室で先生方に挨拶させていただいて、それから……そうだ。玄関のところで担任の先生と話していましたね」

俺が顔を見る前に、貴司は俺の背中をバン、と叩いた。無言で玄関のほうをあごでしゃくる。

俺はその、まだ信じられはしないが澪の母親なのだろう人にお辞儀をして、ひとり駆けだした。

玄関には、有働先生がひとりで立っていた。息を切らして走っていくと、先生のほうから声をかけてきた。

「斉藤じゃないか。どうしたんだ」

「光原のこと、どうして言ってくれなかったんですか」

「だから言っただろう、転校だって」

「でも光原も、あの話には続きがあるって」

先生はひとつため息をついて髪をかき上げ、そして言った。

「教師が率先してああいう話を信じるわけにはいかない。これも言っただろう？」

ああもう、この人にはかなわない。

「それで、光原は」

「今日中にまた向こうに戻って、それでしばらくはこっちには来ないらしいからみんなに挨拶するって言ってたぞ。携帯は引越しのときになくしちゃったらしくて、しょうがないからってここから近い灰原の家にもず行っただぞ」

「は、はあ」

「あいつも抜けてるな、意外に。携帯はなくすし、いちばん会いたいのがいちばん近くにいたのにな」

何をそんな、と焦って俺が言っていると、冗談だよ、と先生は笑って、言う。

「行かなくていいのか？」

「行きますよ、そりゃ」

言いながらポケットに手を突っ込んでみたけど、自転車の鍵は部活中は教室においてある。

「くそっ……どうして濡にちゃんと言ってくれなかったんですか」
呼びかたが変わったのを聞いて先生は、嬉しそうに眉毛をびくつ、と動かしだした。

「どうしてって、聞かれなかったからだ」

「もう、自転車の鍵とってきます」

俺が先生の横を抜けて校舎に入っていこうとすると、先生は俺の腕をつかんで引き止めた。

「光原は歩きで行ったぞ。自転車はもう向こうらしいから……なんのために毎日、陸上で鍛えてるんだ？」

俺は一度足を完全に止めてきびすを返し、校門のほうに向かって駆けだした。

がんばれよー、という先生の声が背中が聞く。でも、振り向くことはしなかった。

今はもう、その一瞬さえが惜しく感じられた。

しかし駆けだしたはいいが灰原の家の正確な位置は解らなくて、大体の方向へただやみくもに走った。極力思い出さないようにしていたあの夏祭りの日、俺は漑を見送ったあと対馬とふたりで貴司と灰原を見送った。その情景もまた、思い出さないようにしていたが、今、あり得ないほど鮮明に蘇る。勘で走った細い路地は、思った通り神社の少し向こうにつながった。

方向はこっちで、歩いていける距離。地図もない。携帯もない。知ってもいない。聞いたこともない。ただどきっと、導かれる。それだけを信じて俺は走り続けた。ここまで全力疾走が続いたのは、きつと半分以上が走り込みの成果ではない。

住宅街にありがちな、きれいな直角で交わる十字路。その中央に足を止めて、右を見る。左を見た。

その背中が、あった。

半月以上の間、一度も呼ばないままにしていた名前。

「漑！」

その背中がぴくっと立ち止まり、そしてゆっくり、こちらを見る。その距離のままでしばらく見つめ合ったあと、まだ歩き出さない彼女のもとに、俺は鋭い鼓動と弾んだ息のままで、ゆっくりと歩みを進める。

「和也くん……」

ひどく懐かしい声がこぼれる。

「どうして」

俺のその問いかけに、漑はうつむいて目を閉じ、かぶりを振った。「どうして、またここにいるんなら、最初に俺の、ところに……」

そこまで言ったところで、完全に言葉に詰まってしまった。

「会いたかった、いちばん……でも、近くにいただなんて知らなくて、まずは凜の家に行って話して、電話も借りて……そうかもう学校、補しゅ……」

あふれてくるそんな言い訳はもどかしく、だけどむやみに愛しくて。

俺は小さく動き続ける形のいい唇にもう一步だけ踏み出して、短いキスでそつとふさいだ。

「そんなの、いいよ。そんなの」

それだけ必死でしぼり出して、俺はもう一度漣と目を合わせたあと、その背中にゆっくり手を回した。

もはやずつと昔のことに成り下がっていたあの日よりも、ずっと強く、さらに強く抱きしめて、俺の早い鼓動と漣のゆったりした鼓動が、ふたりの胸にひたすら響く。

どうして呪いは解けたのか。

どうして呪いが解けてもまた、ここにいるのか。

どうしてお母さんまでがまた、現れたのか。

そしてどうしてこんなにも、俺は漣を好きなのか。

俺の「好き」が決まったあの日の灰原の言いぐさを借りれば、いつまでも「好き」は「愛してる」に変わりそうもないけど、今はそれでいい。

きっともう伝えられないと思っていた「好き」が、全部まとめてあふれてきた。

だけどそれはいつまでも絶えることはなくて、今はただとめどなく、俺は漣のことが好きだ。

俺の肩のところで、漣がうん、と小さくうなづく。

うだるような暑さに人影を奪われた八月の住宅街。それを引き起こした張本人、やたらと輝く夏の太陽だけが、じっと俺と澪を見つめている。

俺たちにとって三回目のキス。俺が知っている二回目のキス。

そして初めての、“ちゃんとした”キス。

今度はちゃんと、甘酸っぱい味がした。

気がついたらね、お母さんの実家の、今度私になる部屋のすみでね、眠ってたんだ。

それは、いつ？

それが、昨日の夕方。夕日がキレイだったよ。知らないはずの部屋なのに、なぜか懐かしい匂いがした。

そう。

みんなに連絡しようとしたけど、携帯が見つからなくて。探してみただけど、お母さんが明日にしなさい、って。

ふうん。

そしたらお父さんがね、じゃあ学校に挨拶に行くの、明日にしようって言うてくれて。

お父さんが。

初めて見る男の人だったけど、やっぱりすごく、懐かしい感じがしたよ――

ふたりでゆっくり歩いてたどりついた灰原の家のチャイムを鳴らすと、すぐに玄関のドアが開いた。

「みんな、来たよー」

門のところに立っていた俺たちはその意味が解らずにきょとんと

していたが、俺はすぐに気を取り直し、ドアに向けて歩いていこうとした。

すると、歩く動作で少し下げた右手を、漑の白い左手が握る。

目で合図してそのまま、ふたりでドアをくぐった。

「遅いぞ、何やってたんだ」

貴司の声がする。

「やっと来たね、和也も漑さんも」

明るさを取り戻した、未来の声。

「何しれっと、手なんかつないでんのよ」

しんじらんない、と灰原は笑った。

「ホント、間に合ってよかったー」

しっかりピントのずれた亮。

「漑、帰ってきたんだね」

少しもったいぶってから発せられた対馬のそのひと言を合図に、楽しそうな声は拍手に変わる。

ふたりで黙って微笑みながら、漑はぎゅっ、とまた手を握ってきた。

「まずは俺の行動の素早さをほめて欲しいね。部活抜けてみんなに連絡して……」

「俺なんかさ、街にいたんだぜ」

「タクシーなんか使ったの初めてだったよ」

「なににせよ多分、ふたりのラブラブっぷりがよかったのね」

「手、つないだままじゃん」

「バカ離すなよ、見せびらかしとけて」

「もうね、これってアイノチカラだよ」

「運命とか……キセキとか？」

「きつとっん、そうだよ。それでさ、早いとこ奥、入らない？」

かわるがわるみんながしゃべっていたのを灰原がそのひと言で切って、みんなでどっ、と笑った。

そして靴を脱いで上がり込むときに、ようやく俺たちは手を離す。その、運命とかキセキの恋人とまた少し見つめ合って、俺たちは五人に続いた。

「早く早くーっ」

「そうだぞ和也」

「漣も早くっ！」

聞けば貴司から連絡を受けて全力で先回りしたというみんなの笑顔と明るい言葉、そして感じた漣のぬくもりと“好き”の心地よさに、俺は今なら一生分泣けるだなんて、冗談みたいなことを本気で思った。

失われた時間を埋めるように俺たちはみんな、ただひたすらに笑顔で話をした。

だけどこの時間をくれたすべてへ、伝えたいことはまだまだ尽きない。

きっとそれが俺の、漣の、俺たちの、この世で生まれ、出会い、そして生きていく意味なんだと思う。

蛇足になるかもしれないが、それから後のことも少しだけ、話させて欲しい。

漣は予定通り、惜しまれつつもその日のうちにお母さんの実家に戻ってしまった。

六人そろって盛大に見送った後家に帰って、嬉しさにかき消されたままだった一片の寂しさに気付いたころ、夜の八時くらいに電話

があった。

漣からだった。帰ってすぐにお母さんが、段ボールの中から携帯を発見したのだという。

これでまたいつでも漣と話せるんだ。繋がれるんだ。

そう思うと、そんな小さな寂しさも、すうつと消えていく気がした。

でもまあ、あんな事件のせいであふれすぎた愛しさが吹き飛ばしてしまっていた付き合い始めのういういしさを取り戻すかのように俺も漣も少し電話を気兼ねし、時が経つにつれてだんだん、一本の電話に胸がときめくようになっていった。その感覚と少しのもどかしさが、だけどやけに気持ちよかった。

大学に進んだらこちらに来ると繰り返す漣に、ある日俺は約束をした。

好きに世界と関われるようになった漣の未来を狭めたくないから、漣の偏差値にあわせた大学と一緒に進もう、と。

その旨を母親に伝えたところ、金銭的な余裕はあるだろうけど、そこは俺の努力次第だという。ちゃんと勉強しろ、ということらしい。だから先生にも相談したら、ビシバシ鍛えてやる、ということだった。末恐ろしかったけど、頼もしく思った。

その先生についてだが、なんと十月に入ったところにいきなり、名字が変わったから、だなんて朝のホームルームで言い出して、クラスが大した騒ぎになった。

「え、じゃあ何に変わったんですか」

「渡部涼子だ」

「ダンナさん、どんな人？」

「塾の先生だ。高校の、同級生」

ひどくびっくりした。そんなことがあっていいものか、と思った。

そういえばあのふたりは同じ年だ、といつか気に留めたことを思い出した。

貴司たちがもつと騒ぐかと思ったけど、そう言えば俺と未来と、後で俺から話をした澪以外あのワタナベさんの職業や、もしかしたら名字も知らなかったと思う。

放課後、ひとりで職員室を訪ねたが、先生は短く、残り物どうしでくつついたただけだ、と言っただけで、それきり俺にも何も教えてくれなかった。

いろいろ解らないことだらけだったけど、先生の男くさい物言いだけは少し、柔らかくなっていた気がした。

未来は俺があと二年しないうちに家を離れるつもりらしいと聞くと、途端にさらに料理に熱をあげた。いつまでも俺に世話を焼かせるわけにはいかない、と思っただけだ。その未来に料理を教えるのは俺でも母親でもなく対馬で、頻繁に家を行き来して料理をしてみたりお菓子を作ってみたりしていた。未来はもしかしたら澪以上に対馬のことをしたい、もはや姉のような存在ととらえているようにも映った。その対馬の指導もあって、俺以上に勉強が嫌いだっただけが御崎高校に進むことになるのは、もう少し先の話になる。

亮は相変わらず飄々としている。未来もどうやら、つかまえ損ねたらしかった。

つくづく何がしたいのか、何を考えているのかそれとも何も考えていないのか全くわからないとらえどころのない奴だけど、貴司と灰原の初めてのひどいケンカ（犬も食わない）の仲裁に一役買うなど、貴司に言わせると「あいつなりにいろいろ考えている」らしい。ただ、当の本人は「放っておいてもなんとかなった」と言っただけで聞かなかったが。

そんなこともあった貴司と灰原だけど、最も相変わらなずなのは多

分このふたりで、結局ケンカの後も元のさやに納まり、ふたりで人生設計まで立てているというのろけ話まで聞いた。いつまで続くか見ものだなんて言う友達もいるけど、俺はいつまでも続いてくれればいいと思う。

呪いのことについても、少し話しておかなければならない。

呪いが解けた神社でのあの日、ポケットに入れたままのつもりでいた先生から受け取ったあの紙は気付くともなくなってしまっていていくら探しても見つからないし未来も誰も知らないし持っていないという。澪の転校についてもやはりしばらくはまことしやかに呪いの噂含みで語られ続けたが、どうやら本当にただの転校らしいと言うことが広まると、なあんだ、といった感じで噂も徐々に収束していった。もしかしたら形としては二十年前と似ているのかもしれない。

そして空いた澪の机には、高橋という名の転入生がおさまった。話してみると気のいい奴で、もう呪いのことはあまり考えないようになしよう、と思った。ただ、ようやく涼しくなってきたところに街で浪野が不良っぽいでたちでいるのを見たという話が出て、また少しクラスがざわついたが、一度火が消えてしまった以上灰が舞い上がる程度で済んで、大した騒ぎにはならなかった。

十一月に入ったところに、御崎高校では文化祭が催された。

貴司もみんなも澪を呼べとうるさかったけど、計算した電車賃と所要時間にためらってふんざりがつかず、結局誘えないままで当日を迎えた。

しかし朝、俺が学校に向かおうと準備していたころだった。

「今から電車乗るところだよ」

澪からの、いきなりの電話だった。

ひどく驚きはしたけど、嬉しくないはずなんてない。

結局本当のところは俺がためらっているということを未来から聞

いて業を煮やした灰原と対馬が呼んだらしいが、俺はそれでもよかった。

にわかになぎやかになり、ちゃちいなりに華やかに彩られた学校へ自転車走らせる。形だけのホームルームの後で未来も加わり、久しぶりに“いつものメンバー”が六人そろった。

そしてしきりに茶化されながら、すべてが大切な俺の世界の、だけれど確実に他より大きな一部分、光原澪を待った。

澪が駅のほうから現れるのにそれほど時間はかからずに、その姿が見えると同時に六人は、全力でその“大切な人”を出迎えた。

「おい」

「みおー」

「久しぶりー」

現れた澪は少しだけ気恥ずかしそうに、久しぶり、ではなく、ただいま、と小さく言った。

積もる話もあったらうけどそこは何とかふたりにしてもらって、笑顔の俺と澪は校内を歩いていく。

すれ違うのは知った顔ばかりで、その上もうすでにクラスでは俺と澪のことは周知の事実になってしまっていたから、みんな概ね温かく、時には冷やかしかし半分で迎えてくれた。

いつの間にかどちらからともなく手を伸ばし、ぎゅっと握りあう。言葉にできなかった思いもできなかった思いもすべて、そこから伝わっていく気がした。

誰もが背負う十字架を、呪いと呼ぶことは容易い。

だけどそう名付けた瞬間に、人はそれを降ろすことを忘れる。この世のすべてが呪いなら、僕は君のための十字架になろう。

せめて闇の中でも明日の後ろ姿が見えるように、
君といつまでも、離れないように。

<了>

14.すべてへ(For everything, to everything

最後まで読んでいただき本当にありがとうございます。

クライマックスにあたる部分なので少しコメントを控えていました。不快さはなかったかと(笑)。

この作品のサイドストーリーを執筆する計画があったりします。受験戦争の魔の手がすぐそこまで迫ってきているので時期的には随分先になるでしょうし、もしかしたら取りやめるかもしれません。

とにかくありがとうございました。

更に感想等もいただければ、それ以上の幸福はありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9902d/>

すべてへ

2010年10月8日14時06分発行